家ノ内遺跡発掘調査報告書

加治川統合小学校建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

新発田市教育委員会

例　　言

1．本報告書は，新潟県新発田市上今泉366番地に所在する家ノ内遺跡の発掘調査の記録である。

2．発掘調査は新発田市立の加治川統合小学校（仮称）建設に伴うもので，新発田市教育委員会が調査主体となり，国際航業株式会社に委託して実施した。調査作業は準備工を経て平成17年10月12日から平成18年4月11日にかけて実施した。整理作業は発掘調査期間中に基礎的な作業を並行して実施していたが，本格的には同年4月12日より実施し，本報告書を作成した。

3．遺物・記録類は，新発田市教育委員会が一括保管している。出土遺物は全て水洗・注記し，土師器などの脆弱な遺物はバインダー17溶液を含浸させて補強した。注記は，遺跡名を漢字で「家ノ内」と記入し，以下，包含層出土遺物の場合は，「グリッド・出土層位・出土年月日」の順で記した。遺構出土遺物は，「遺構名・グリッド・出土層位・出土年月日」とした。遺構名は溝を「SD」，土坑を「SK」，ピットを「P」，自然流路を「流路」と略記した。

4．遺構の実測は担当者・菊池　豊，調査員・山川純一，測量担当・工藤義孝が行った。遺物の実測は，河村圭子・水上奈津子が行い，山川・丹下昌之（以上，国際航業株式会社）が校正をし，鈴木　暁（新発田市教育委員会）が監督した。発掘調査時の写真は菊池・山川が撮影し，遺物写真は丹下が撮影した。

5．引用・参考文献は，著者及び発行年（西暦）を文中に〔　〕で示し，巻末に掲載した。

6．本書に掲載した遺物番号は，すべて通し番号とし，本文・挿図・写真図版の番号は，一致している。

7．本書の編集は鈴木の指示・監督の下，丹下・山川が行った。執筆分担は第Ⅰ章第1・2節を鈴木，第Ⅰ章第3節A・第Ⅲ章第3節A区部分を菊池，第Ⅲ章第1・2節と第3節B区部分・第Ⅳ章の木製品以外・第Ⅵ章第1・4節を山川，第Ⅰ章第3節B・第Ⅱ章・第Ⅳ章の木製品・第Ⅵ章の第2・3節を丹下，第Ⅴ章第1節を井上　巌（㈱第四紀地質研究所），第2節を高橋　敦（パリノ・サーヴェイ㈱）が行った。

8．本報告書の作成にあたって，縄文土器・弥生土器については渡邊裕之氏（（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団）・渡邊朋和氏（新潟市歴史文化課），古墳時代土器は滝沢規朗氏（（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団）・相田泰臣氏（新潟市歴史文化課）に，古代土器については春日真実氏（（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団）にそれぞれご教示を頂いた。石材の鑑定は飯田英樹（国際航業㈱九州調査事務所）に依頼した。また発掘調査から報告書作成にあたり，以下に記した諸氏・機関から多大のご支援・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼を申しあげる（敬称略，順不同）。

北村　亮　鈴木俊成　澤田　敦　神主輝夫　新潟県教育庁文化行政課　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟市歴史文化課　加治郷土地改良区　新発田市立加治川小学校

凡　　例

1．本書で用いた方位は第１・５・６図を除き，他は全て磁北をさす。「磁北」は，真北から西偏約７度である。

2．本調査で確認した遺構の種別は「水田区画」・「畦畔」・「溝」・「土坑」・「ピット」・「流路」である。本文中では遺構の略号は使用していないが，遺構図面の場合に煩雑になるため「ピット」のみ「P」の略号を用いた。遺構番号は現場で確認した順番で，調査区ごとに種別に関係なくつけた。ただし「水田区画」・「畦畔」・「ピット」および「流路」は個別に確認した順にそれぞれ１から番号をつけた。

3．遺構の記載方法は，複数のグリッドにまたがる遺構の位置については主なグリッドで示した。深さは各確認面からの計測値を示した。また，遺構図でそれぞれの遺構の掘形以下（相対的な地山）を斜線のトーンで表現し，地面の傾斜が明確になるようその下端を水平に合わせた。重複する遺構の新旧関係は「旧（切られる）→新（切る）」と表現し，章末の遺構一覧（第１表）にまとめた。土層の土色の観察には農林水産省農林水産　技術会議事務局監修『新版標準土色帖 2003 年版』を用いた。

4．遺構図の縮尺は，各々図のタイトル・スケールに表示している。なお調査区全体図は 1/200・基本土層図は 1/80・遺構詳細平面図は 1/40 で統一した。

5．遺物番号は，遺物の種別に関係なく通し番号とし，実測図・写真図版ともに一致している。写真のみの遺物は丸囲み数字（①・②～）で示した。遺物実測図の縮尺は 1/3 を基本とし，石製紡錘車を 2/3 とした。また土器断面の白抜きは縄文土器・弥生土器・土師器・黒色土器，黒塗りは須恵器である。さらに，黒色土器については黒色処理部を　　のスクリーントーンで示した。また復元する径が円周の 1/10 未満とされる場合は，中軸線の両側に空白を作って区別している。

6．遺物の年代観は古墳時代土器が〔川村浩司 2000・2003〕，古代土器は〔春日真実 1999〕，〔渡邊美穂子ほか 2001〕，他によった。

目　　次

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査体制 …… 2
第３節　発掘調査と整理作業の経過 …… 3
　A　発掘調査 …… 3
　B　整理作業 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 5

第Ⅲ章　遺　　構

第１節　調査区の設定と範囲 …… 9
第２節　基本層序 …… 9
第３節　検出遺構 …… 15
　A　Ⅲ層の遺構 …… 15
　B　Ⅳ層の遺構 …… 17
　C　Ⅴａ層の遺構 …… 20
　D　A区Ⅴｂ層の遺構 …… 23
　E　Ⅵ層の遺構 …… 28

第Ⅳ章　遺　　物

第１節　遺物の記載方法 …… 34
第２節　古代（平安時代）の土器の器種分類 …… 34
　A　土師器・黒色土器 …… 34
　B　須恵器 …… 36
第３節　遺物各説 …… 38
　A　遺構出土の遺物 …… 38
　B　遺構外出土の遺物 …… 48

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　出土須恵器のＸ線回折試験及び化学分析試験 …… 59
第２節　種実遺体・木製品の年代測定及び木製品樹種同定 …… 64

第Ⅵ章　ま と め

第１節　古墳時代以前の土器 …… 66
A　弥生時代後期以前の土器について …… 66
B　古墳時代前期の土師器について …… 66
第２節　古代の土器 …… 67
第３節　Ⅲ・Ⅳ層水田遺構について …… 71
第４節　家ノ内遺跡の性格について …… 72

引用・参考文献 …… 74
要約 …… 77

挿　図　目　次

第１図　試掘トレンチ配置図 …… 1
第２図　家ノ内遺跡位置図 …… 5
第３図　遺跡周辺の旧地形 …… 7
第４図　周辺の遺跡分布図 …… 8
第５図　遺跡周辺の地形と調査区位置図 …… 10
第６図　調査区の配置とグリッド設定図 …… 10
第７図　A区基本土層１ …… 11
第８図　A区基本土層２ …… 12
第９図　B区基本土層１ …… 13
第10図　B区基本土層２ …… 14
第11図　A区Ⅲ層平面図 …… 15
第12図　A区畦畔１・４セクション図 …… 16
第13図　B区Ⅲ層平面図 …… 16
第14図　B区畦畔３セクション図 …… 17
第15図　A区Ⅳ層平面図 …… 18
第16図　A区畦畔１・４セクション図 …… 18
第17図　B区Ⅳ層平面図・水田区画 11・12 セクション図 …… 20
第18図　A区Ⅴa・b層平面図 …… 21
第19図　A区Ⅴa層遺構詳細図（１） …… 22
第20図　A区Ⅴa層遺構詳細図（２） …… 23
第21図　B区Ⅴa層平面図・溝５エレベーション図 …… 24
第22図　A区Ⅴb層遺構詳細図（１） …… 25
第23図　A区Ⅴb層遺構詳細図（２） …… 26
第24図　A区Ⅵ層平面図 …… 28
第25図　A区流路３，トレンチ１・２ セクション図 …… 29
第26図　A区トレンチ３・４ …… 30
第27図　B区Ⅵ層平面図・１・２トレンチ セクション図 …… 31
第28図　土器の器種分類と部位名称 …… 35
第29図　A・B区Ⅲ層遺構出土遺物 …… 39
第30図　A区Ⅳ層遺構出土遺物（１） …… 41
第31図　A区Ⅳ層遺構出土遺物（２） …… 42
第32図　B区Ⅳ層遺構出土遺物 …… 43
第33図　A・B区Ⅴa層遺構出土遺物 …… 44
第34図　A区Ⅴb・Ⅵ層遺構出土遺物 …… 45
第35図　A・B区Ⅵ層流路出土遺物 …… 48
第36図　A区Ⅴa層遺構外出土遺物（１） …… 50
第37図　A区Ⅴa層遺構外出土遺物（２） …… 51
第38図　B区Ⅴa層遺構外出土遺物 …… 52
第39図　A区Ⅴb層遺構外出土遺物 …… 53
第40図　Ｑｔ－Ｐ１図 …… 62
第41図　SiO_2－Al_2O_3図 …… 62
第42図　Fe_2O_3－TiO_2図 …… 62
第43図　K_2O－CaO図 …… 62
第44図　三角ダイヤグラム位置分類図 …… 63
第45図　菱形ダイヤグラム位置分類図 …… 63
第46図　Ｍｏ－Ｍｉ－Ｈｂ三角ダイヤグラム …… 63
第47図　Ｍｏ－Ｃｈ，Ｍｉ－Ｈｂ 三角ダイヤグラム …… 63
第48図　古代土師器・黒色土器編年図 …… 69
第49図　須恵器主要器形編年図 …… 70

表　目　次

第１表　遺構一覧表…… 32
第２表　遺物観察表（石製品・土製品・鉄滓）…… 53
第３表　遺物観察表（木製品）…… 53
第４表　遺物観察表（土器）…… 54
第５表　家ノ内遺跡試料胎土性状表…… 59
第６表　家ノ内遺跡試料タイプ分類表 …… 60
第７表　家ノ内試料化学分析表…… 61
第８表　家ノ内遺跡試料組成分類表 …… 63
第９表　放射性炭素年代測定結果 …… 64
第10表　暦年較正結果 …… 65
第11表　弥生時代中期末葉～後期初頭の編年 … 66
第12表　古墳時代前期中葉～後葉の編年 …… 67

写真図版目次

図版１　A区溝18・同出土遺物
図版２　B区基本土層・流路検出状態
図版３　調査前状態・基本土層・A区Ⅲ層
図版４　A・B区 Ⅲ・Ⅳ層
図版５　A区Ⅴa層
図版６　A・B区Ⅴa層，A区Ⅴb層
図版７　A区Ⅴb層
図版８　A区Ⅵ層
図版９　B区Ⅵ層
図版10　旧地形写真
図版11　遺物写真（１）
図版12　遺物写真（２）
図版13　遺物写真（３）
図版14　遺物写真（４）
図版15　遺物写真（５）
図版16　遺物写真（６）
図版17　墨書部分拡大・底部調整痕拡大写真
図版18　須恵器胎土分析試料写真

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成 14 年度に、現存する加治川村内の加治川・新金塚・中川の３小学校を１校に統合する計画が持ち上がった。審議の結果，この統合小学校は加治川小学校の敷地及び隣接する水田に建設されることとなった。

加治川村教育委員会生涯学習課ではこの計画を受け，計画予定地が今泉川の自然堤防に沿った立地であり，遺跡の存在の可能性があると判断し，試掘調査を行うこととした。試掘調査は平成 16 年 10 月６日から 12 日にかけてバックホーを用いて実施し，その結果，現水田面より約１m，現グラウンド面よりも約２m下に平安時代の遺物が包含されていることが判明した。開発部局と協議するためのより詳しい資料を得る目的で，11 月 20 日から 12 月２日に補足調査を行い，新潟県教育委員会の判断を仰いで遺跡の範囲を確定した。遺跡名は所在地の旧字名から「家ノ内遺跡」とした。

一方、加治川村は平成 17 年５月１日に紫雲寺町とともに新発田市への合併が決まっており，統合小学校建設

第１図　試掘トレンチ配置図

事業も合併協議に登載され，その中で話し合いが行われた。協議の結果，統合小学校の予定地変更は不可能とのことであり，遺跡範囲の末端部にあたる現校舎敷地内の東側部分（グラウンド部分）に新校舎の建設を行うこととなった。また，新校舎は平成 20 年度中の完成を目標とするため，平成 17 年度中に現地での発掘調査を終了させることが必要となった。

しかし，合併後の新新発田市では県営ほ場整備事業関連を中心に多くの調査要望を抱えており、現状の埋蔵文化財調査体制ではこの期限での対応が不可能であった。このため，家ノ内遺跡の本発掘調査については民間調査組織への委託を実施することとなった。

調査委託のための具体的な作業は合併後に開始され，業者は指名競争入札で決定することとした。入札の結果，国際航業株式会社（以下，国際航業㈱という）新潟支店が落札し，平成 17 年 9 月 13 日に契約を締結した。同年 9 月 22 日付け教総第 541 号で埋蔵文化財発掘の通知が新発田市長から提出され，9 月 29 日付け生学第 674 号で県教育長に進達を行った。同年 10 月 11 日付け生学第 726 号で埋蔵文化財発掘調査の報告を県教育長に行い本発掘調査に着手した。なお，調査費用については全額を市が単独で負担した。

第 2 節　調査体制

平成 17 年度（発掘調査・整理作業）

調査主体者　新発田市教育委員会　（教育長　大滝　昇）
監　　理　築井　信幸（教育部長）
総　　括　土田　雅穂（生涯学習課長）
監　　督　田中　耕作（　〃　　副参事）
　　鈴木　暁　（　〃　　文化財技師）

調 査 組 織　国際航業㈱文化事業部　（事業部長　門屋　鉄男）
現場代理人　山本　実　（国際航業㈱文化事業部　技師）9 月 13 日～ 11 月 30 日
　　植田　誠一（　〃　　〃　　主任技師）12 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日
調 査 担 当　菊池　豊　（国際航業㈱文化事業部 研究員）
調　査　員　山川　純一（　〃　　〃　　）

平成 18 年度（発掘調査・整理作業・報告書作成）

調査主体者　新発田市教育委員会　（教育長　大滝　昇）
監　　理　築井　信幸（教育部長）
総　　括　土田　雅穂（生涯学習課長）
監　　督　田中　耕作（　〃　　参事）
　　鈴木　暁　（　〃　　主任）

調 査 組 織　国際航業㈱文化事業部　（事業部長　門屋　鉄男）
現場代理人　植田　誠一（国際航業㈱文化事業部 主任技師）4 月 1 日～ 28 日
調 査 担 当　菊池　豊　（　〃　　〃　　研究員）4 月 1 日～ 14 日：現地調査
調 査 担 当　山川　純一（　〃　　〃　　研究員）4 月 15 日～ 7 月 31 日：報告書作成

調　査　員　山川　純一（国際航業㈱文化事業部 研究員）4月1日～14日：現地調査
　　辻　弘和　（　〃　　〃　　研究員）3月22日～4月4日：現地調査
　　丹下　昌之（　〃　　〃　　研究員）

第3節　発掘調査と整理作業の経過

A　発掘調査

平成17年10月11日より，パイル打ち込み・安全柵の設置等準備作業を開始し，10月12日から28日にかけて表土掘削・暗渠工事を行った。その後グリッド設定をし，11月1日より作業員を入れて包含層掘削作業を開始した。調査地が2か所に分かれていたため北側の調査区をB区，南側をA区とした。作業員を2班に分け両地区を並行して作業開始した。土層観察の結果，2層にわたっての水田の重複が認められ，水田面ごとに順次包含層掘削・遺構確認調査を行うこととした。水田の確認できた層はⅢ・Ⅳ層である。

11月中旬，Ⅲ層の水田畦畔及び水田区画の検出作業に着手した。A区では南北に延びる畦畔及び東西に延びる畦畔（畦畔1）及び擬似畦畔（畦畔2）と水田区画4区画（水田区画1～4）を確認した。B区では東西に延びる畦畔1条（畦畔3）とそれに仕切られた南北の水田区画（水田区画5・6）を確認した。

次にⅢ層水田を掘り下げ，Ⅳ層の水田畦畔及び水田区画の検出作業を行った。A区では東西に延びる畦畔2条（畦畔5・7）と南北に延びる畦畔2条（畦畔4・6）の合わせて4条と水田区画4区画（水田区画7～10）を確認した。B区では東西に延びる畦畔1条（畦畔8）と水田区画2区画（水田区画11・12）を確認した。上層に比して多くの土師器・須恵器が出土した。

12月上旬，A・B両地区ともにⅣ層調査終了時に深掘りトレンチにより確認したところ，下層（Ⅴ層）より比較的遺存状態の良い須恵器片が多数出土するとともに，Ⅵ層上面で古墳時代の遺構・遺物が確認された。Ⅵ層以下は無遺物層であったため，Ⅴ層の掘削とⅥ層上面を遺構確認面とした調査が必要となった。当初はⅤ層上面を確認面とする古代の調査面1面のみと想定していたため，期間の延長と経費の増額が必要となった。事業者である市教育総務課の了承を得て関係部所と協議した結果，17年度の繰り越し事業として実施することとなった。これを受けて，新発田市教育委員会・国際航業㈱の協議の結果，工期の延期及び仮設資機材の設置期間の延長をすることとなった。変更契約を平成18年3月3日に国際航業㈱との間で締結した後，履行期間延長協議書を16日に取り交わし，工期を平成18年3月31日から7月31日に延長した。

積雪の時期を勘案し，17年は12月21日に現地調査を一旦中断し，翌22日に冬越しのため調査面に埋め戻し用の山砂を約50㎝敷設し，現場を一時閉鎖した。資機材については事務所及び休憩所プレハブ・仮設トイレ・立入り防護柵・敷鉄板等は引き続き設置し，事故・盗難等を防ぐため掘削機械・ベルトコンベアは一時搬出した。

越冬期間中は，現場事務所内において遺物整理・写真整理等の整理作業を集中的に実施した。

翌年3月に入り，養生砂を除去し，3月6日に調査を再開した。A区ではⅤ層において遺構は2か所に集中的にみられ，溝1条，畝溝状の小溝7条，土坑8基，ピット9基を確認した。B区では溝1条の確認にとどまった。出土遺物は遺構内からはそれほど多く出土していないが，土師器には古墳前期のものが多く含まれる。A区では流路から弥生土器も出土した。遺構外では，古代の土師器・須恵器がほぼ半数の割合で多数出土した。Ⅵ層上面の遺構は，A区では溝1条と流路が3条，B区では土坑1基と流路2条を調査した。出土遺物はA区溝18で古墳時代前期の土師器がまとまって出土したほか，流路から若干出土したのみである。

調査再開後も降雪に悩まされながらの調査となったが，4月11日に監督員による現地調査の終了確認を受け，

調査を終了した。調査終了後，埋め戻し作業を実施するとともに，安全柵の撤去など撤収作業を行い，５月１日に調査地の引渡しをもって，現地調査工程を全て終了した。

B　整理作業

調査実施中にも遺物の洗浄・注記・簡単な接合作業を並行して進めるとともに，発掘調査の越冬期間中の平成18年１月～３月にかけては，遺物整理作業のみならず写真・図面類の整理も実施し，報告書作成に備えた。

本格的な整理作業は，４月11日の発掘調査終了後に開始した。現場に設置したプレハブを撤去することや，設備の問題から，新潟市にある国際航業㈱北陸調査事務所に調査に関わる記録類と遺物を搬送し，この事務所において遺物の復元作業を開始した。遺物復元作業は５月中旬にほぼ終了し，実測遺物を抽出した上，実測作業に入った。実測遺物の点数は縄文土器・弥生土器・土師器・黒色土器・須恵器・土器片製円板・石製紡錘車・砥石・木製品を合わせて184点である。

実測作業は５月中旬から６月初旬にかけて実施し，遺物のトレース作業は，６月初旬から７月初旬に行った。また土層断面図校正・トレース作業は４月中旬より下旬にかけて実施した。

自然科学分析については調査前に珪藻分析・花粉分析等の土壌分析も検討項目として掲げられていたが，調査の進展によりいずれも良好なデータを得ることが出来ないと判断し，出土須恵器の蛍光Ｘ線による胎土分析と，木製品類の樹種同定・年代測定のみを行うこととなり，専門業者に委託して行った。

出土土器の胎土分析の試料は，肉眼で須恵器の胎土を分類し，その結果５種類の胎土が確認できた。胎土の種類ごとで破壊しても差し支えない破片を選び出し，㈱第四紀地質研究所に依頼した。分析結果は本文第Ⅴ章第１節に記すとおりである。

また，木製品類の樹種同定・年代測定の試料の選択は，まず各層位で自然木・木製品，クルミなどの種子が出ていたが，木製品類は分析結果に伐採年などを勘案すると年代幅が大きくなるため，一年生の種子を選択した。それ以外にⅢ・Ⅳ層において検出された水田区画に伴う畦畔に沿って打ち込まれていた木杭の年代を測定することにより，前述のように年代幅が存在するもののある程度の各層位で検出された水田区画の年代を推定できるものと考え，種子と合わせて10点の試料をパリノ・サーヴェイ㈱に分析依頼した。分析結果は同じく第Ⅴ章第２節に記すとおりである。

遺構・遺物の図面，写真図版の編集は６月一杯で行うとともに，並行して原稿を執筆した。７月上旬に原稿の校正を受け，中旬に入稿し，７月末に報告書を刊行し，全事業を完了した。

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

家ノ内遺跡は，新潟県新発田市上今泉366番地ほか（第２図）に所在し，経緯は北緯37°59′22″，東経139°21′32″の地点にあたる。

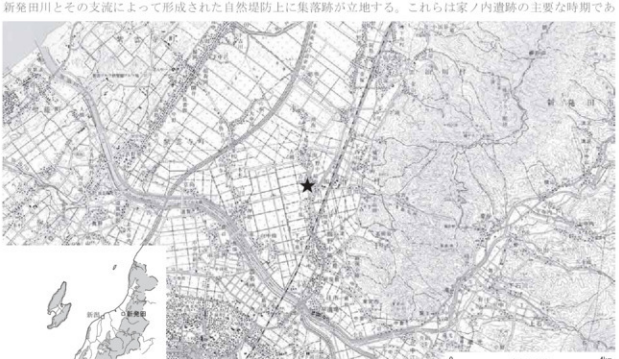
新発田市は新潟市の東方約27㎞，越後平野の北部に位置する。市街地の北東から南西にかけて，JR羽越線が横切っており，西から延びるJR白新線が新発田駅で接続する。平成15年から17年にかけて隣接する豊浦町・紫雲寺町・加治川村を相次いで合併し，市域は拡大し，人口は約10万６千人，面積は532.82㎢となった。県内では新潟市，長岡市，上越市，三条市に次いで，５番目の人口規模である。江戸時代には新発田藩の城下町として，また第二次大戦前には歩兵16連隊の軍都として栄えた阿賀野川以北の中核都市である。

市域の中央を流れる加治川は，二王子山塊の西側に開析扇状地を形成し，二王子岳から流れ出した中小河川を合わせ，日本海へ注いでいる。

家ノ内遺跡は，今泉川が形成した自然堤防の西に面した沖積低地に位置し，標高は約６ｍである。西には一面水田が広がっている。遺跡の北側には，江戸時代・享保年間まで今泉川の注いでいた旧紫雲寺潟（塩津潟）が広がっていたとされ〔大熊1979〕，この潟との関係を考慮に入れる必要がある（第３図）。

第２節　歴史的環境

第４図に新発田市周辺の古墳時代から中世の遺跡を示した。全体の傾向としては，古墳時代の遺跡は，海岸に並行して連なる砂丘列の最も内陸側の砂丘列上及び旧紫雲寺潟（塩津潟）の潟端に多く立地する。古代の遺跡は，古墳時代と同様に最も内陸側の砂丘列上及び旧紫雲寺潟（塩津潟）・福島潟の潟端に認められるほか，加治川・新発田川とその支流によって形成された自然堤防上に集落跡が立地する。これらは家ノ内遺跡の主要な時期であ



第２図　家ノ内遺跡位置図（中央★印。国土地理院5万分の1地形図　中条・新発田を合成縮小）

る８世紀末～９世紀前半頃に主体をもつ例が多い。山地・丘陵地には須恵器窯を中心に生産遺跡が多く見られる。中世の遺跡は，主に内陸部に多く見られ櫛形山脈・二王子山塊，真木山丘陵の山裾に立地している。

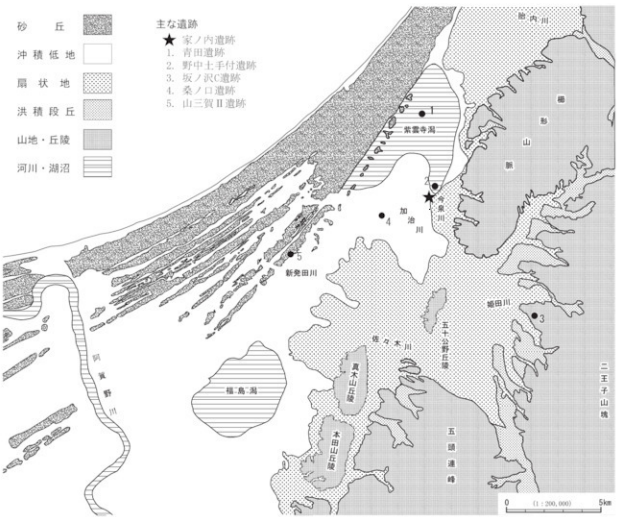
古墳時代　旧中条町（現胎内市）に所在する船戸川崎遺跡では，古墳時代前期の集落跡と８～９世紀にかけての集落跡が確認されている。旧紫雲寺潟の潟端に立地している〔水澤 2002，水澤・吉村 2002〕。また，同町に所在する大塚遺跡も，旧紫雲寺潟の潟端に営まれていており，城ノ山・籠ほろき山という２基の古墳の周辺に広がっていた古墳時代前期を中心とする集落跡である〔水澤ほか 2006，吉村 2004，水澤 2006〕。屋敷遺跡も旧同町に所在し，古墳時代後期の集落跡と考えられている。溝跡などから６世紀代の土師器の良好な一括資料が出土している〔水澤・吉村 2004〕。

古墳時代から古代にかけての遺跡としては，聖籠町の山三賀Ⅱ遺跡があげられる。古墳時代から断続的に続く大規模な集落遺跡であり，古代では家ノ内遺跡とほぼ同時期の８世紀～９世紀前半が最盛期である〔坂井ほか 1989〕。また，中世にまたがる遺跡として，紫雲寺地区に所在するデト山遺跡があげられる。古墳時代前期と 13～14 世紀を中心とする時代の遺構・遺物が確認されている。古墳時代前期の遺構としては竪穴建物跡１軒とピットが少数検出されたのみである。中世の遺構も掘立柱建物１棟と区画溝と思われる溝が数条検出されたのみで遺跡の性格は不明である〔坂野井・宮内ほか 2005〕。

古代　古代の遺跡は数多く知られている。旧中条町に所在する蔵ノ坪遺跡では，８世紀後半～９世紀後半の掘立柱建物群や道路跡などが検出され，掘立柱建物を囲む溝から「津」と記された墨書土器が出土するなど古代の津に関連した施設と考えられている〔飯坂・霜鳥ほか 2002〕。旧同町に所在する船戸桜田遺跡では両川跡から８～10 世紀に属す土師器や木製品など多量の遺物が出土している。船戸川の旧流ではないかと考えられ，遺物の内容，出土量から付近に古代の集落が存在した可能性が想定され，船戸川崎遺跡との関連が高いと考えられる〔水澤ほか 1999，水澤・吉村 2002〕。

加治川地区に所在する青田遺跡では平安時代の遺構・遺物が出土しており，紫雲寺潟は９世紀末～ 10 世紀初頭に形成されたことが明らかになった〔荒川ほか 2000〕。旧紫雲寺潟（塩津潟）成立以前の微高地に立地していたと考えられる。同じく野中土手付遺跡は調査面積が狭いため遺構の具体的な性格は不明であるが，出土遺物から８世紀後半～９世紀にかけての拠点的な集落であったと考えられている。また，古墳時代前期の土器も出土しており，家ノ内遺跡とは立地上近い位置関係にあるばかりではなく，遺物の面でもほぼ同時期の遺物が出土しており，家ノ内遺跡の性格を考える上で最も注目される遺跡である〔春日・滝沢ほか 2004，鳴田 2005〕。

新発田市域では五十公野丘陵の先端部が沖積平野に埋没して出来た微高地上に立地する松橋遺跡が知られ，８世紀中頃～９世紀中頃の集落跡がみつかっている〔鶴巻 1998〕。また，山王遺跡からは８世紀後半の遺物が見つかっている〔鶴巻 1998〕。新発田川の氾濫原の自然堤防上に位置する新発田城跡の下層からは９世紀後半～末の井戸と土坑が検出されている〔鶴巻ほか 1997〕。さらに，同時期の特殊な性格の遺跡としては二王子岳麓の坂ノ沢Ｃ遺跡があげられる。この遺跡では掘立柱建物が検出されるとともに，鉄鉢形土器や鍋形鉢，甑杯などの仏具形遺物が多く見つかっており，確認された掘立柱建物のいずれかが「村寺・村堂」や「里寺」などの小規模な仏堂施設として，仏事が執り行われていたと考えられている。時期は９～ 10 世紀と考えられる〔渡邊ほか 2001〕。近接する坂ノ沢Ｄ遺跡では，少数の土坑しか検出されておらず性格が不明であるが，Ｃ遺跡と一体となって営まれていたものと考えられている〔渡邊ほか 2001〕。加治川左岸の桑ノ口遺跡では掘立柱建物，土坑墓などが検出されたが，京都産の緑釉陶器輪花椀や愛知県尾北窯産の灰釉陶器段皿，労働力の徴収に関わると推定される漆紙文書などが出土しており，９世紀末～ 10 世紀前半を主体とする拠点的集落と考えられている〔鶴巻ほか 2003〕。豊浦地区曽根遺跡は福島潟の東の潟端，自然堤防上に立地する。建物群が掘立柱建物で構成され，出土遺物も官衙的様相を示している。８世紀～９世紀後半にかけて存続し，福島潟の内水面交通の拠点であったと考えられている〔家田

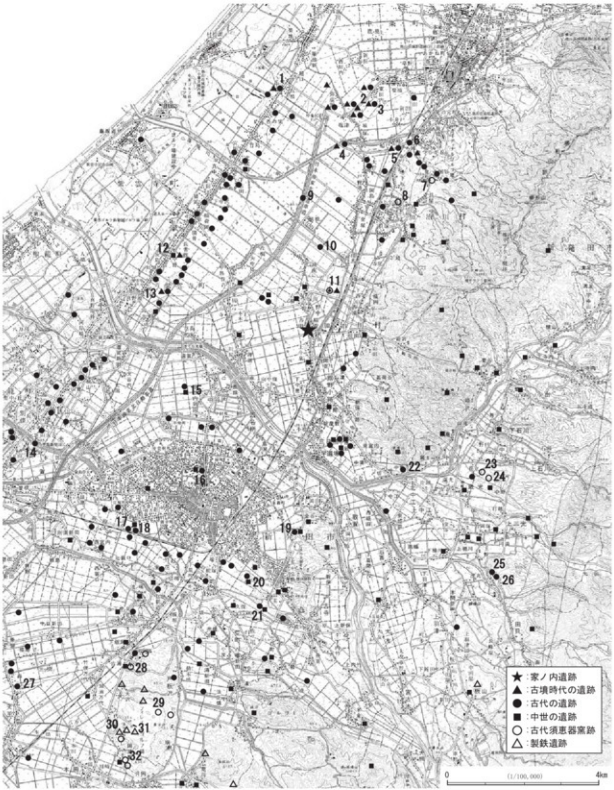


第３図　遺跡周辺の旧地形（渡邊ほか2001を改編）

1981・1982，川上 1997，中川・土井・川上 1973，川村 1989）。

生産遺跡としては，須恵器窯跡では真木山丘陵に馬上窯跡〔戸根 1986〕・岡屋敷窯跡〔中川ほか1973〕・志村山窯跡〔川上 1999〕などがあり，操業時期はいずれも８世紀初頭～９世紀前半である。櫛形山脈西麓では加治川村地区の貝屋窯跡〔川上 1982〕と下小中山窯跡〔戸根 1973〕が知られ，それぞれ操業時期は８世紀末～９世紀初頭と８世紀前半に位置づけられている。また，二王子山塊の西麓にホーロク沢Ａ・Ｂ窯跡が知られている。Ｂ窯は「ホーロク沢窯跡」として出土遺物が紹介され，採集資料のため詳細は不明であるが，時期は８世紀末～９世紀初頭に位置づけられている〔坂井ほか1989〕。製鉄遺跡としては豊浦地区の万代かなくそ沢遺跡（真木山Ｂ）・五月山遺跡（真木山Ｃ）は製鉄炉と登窯タイプの木炭窯が調査されている。分析の結果，砂鉄を利用した製鉄をおこなっており，８～９世紀に位置づけられている〔関・本間 1981〕。

家ノ内遺跡の所在する上今泉地区は地名の由来が「紫雲寺潟の中央から東南方に出泉という湧あり」ということから起こったと考えられている〔加治川村誌編さん委員会編 1986〕とされているように旧紫雲寺潟（塩津潟）との関係が深く，遺跡の立地場所もまさに旧紫雲寺潟の南西端に位置している。このことから同じ立地である加治川地区の野中土手付遺跡，旧中条町船戸川崎遺跡・屋敷遺跡・大塚遺跡・中倉遺跡などの遺跡の様相は重要であるが，いずれの遺跡でも古代の集落は確認されているものの中核的な性格の遺構・遺物の発見には至っていない。野中土手付遺跡と家ノ内遺跡の位置は旧紫雲寺潟に今泉川が流れ込む河口部に位置しており，旧紫雲寺潟周辺の遺跡の中では特に注目される遺跡ということが出来る。



1	中倉遺跡	9	青田遺跡	17	荒神裏B遺跡	25	坂ノ沢D遺跡
2	大原遺跡・城の山遺跡	10	砂山中道下遺跡	18	荒神裏A遺跡	26	坂ノ沢C遺跡
3	屋敷遺跡	11	野中土手付遺跡	19	松橋遺跡	27	曽根遺跡
4	船戸川崎遺跡	12	デト山遺跡	20	大真木遺跡	28	志村山窯跡
5	船戸桜田遺跡	13	王子山遺跡	21	山王遺跡	29	馬上窯跡（真木山D）
6	蔵ノ坪遺跡	14	山三賀Ⅱ遺跡	22	太田遺跡	30	万代かなくそ沢遺跡（真木山B）
7	貝屋窯跡	15	桑ノ口遺跡	23	ホーロク沢B窯跡	31	五月山遺跡（真木山C）
8	下小中山窯跡	16	新発田城跡	24	ホーロク沢A窯跡	32	岡屋敷窯跡

第４図　周辺の遺跡分布図（国土地理院5万分の1地形図　中条・新発田を合成縮小）

第Ⅲ章　遺　　構

第１節　調査区の設定と範囲

本発掘調査の対象地である加治川小学校敷地の西側境界線，その西側一帯に広がる水田区画の南北軸，さらに今回の調査区の南北軸は磁北とほぼ一致している。そのためこの軸を基準に，県道545号線（紫雲寺菅谷線）と市道加治川小学校線の十字路交差点南東側にある県営ほ場整備事業（加治川地区）水準点（BM. 29）上を通る二線（東西軸線・南北軸線）をグリッドの基準線とした。そして，想定される遺跡全体を網羅できるように一辺10ｍの大グリッドを組み，東西軸を大文字アルファベット，南北軸を小文字アルファベットで示した。大グリッドはさらに２ｍごとに区切り小グリッドとし，北西端を基点にそれぞれ１～５の番号を付けて「東西－南北」の順に記した。発掘調査を実施したのは現在の小学校敷地西端付近，中央部よりやや南寄りのA区及び中央部よりやや北寄りのB区である。

第２節　基本層序

A区では，大別６層，細別23層に識別した。

Ⅰ層　Ⅰａ層・Ⅰｂ層に細別した。現代（加治川小学校校庭造成時）の盛土。

Ⅰａ層：にぶい黄褐色シルト。層厚25～50cm前後。

Ⅰｂ層：黄灰～灰色粘土。層厚25～55cm前後。

Ⅱ層　Ⅱａ層～Ⅱｉ層に細別した。現代（加治川小学校校庭造成以前）～近世？の水田耕作土及び洪水砂？層。

Ⅱａ層：（南壁）オリーブ黒色粘土。層厚20～50cm前後。現代の水田耕作土。

（西壁）灰オリーブ色砂。層厚30～50cm前後。

Ⅱｂ層：黒褐～オリーブ黒色粘土。層厚10～30cm前後。近世？の水田耕作土。

Ⅱｃ層：暗灰黄～灰色砂。層厚10～25cm前後。洪水砂？

Ⅱｄ層：オリーブ黒色粘土。層厚10～35cm前後。近世？の水田耕作土？

Ⅱｅ層：灰色粘土。層厚30cm前後。近世？の水田耕作土？

Ⅱｆ層：暗灰黄～灰色シルト～砂。層厚10～50cm前後。

Ⅱｇ層：オリーブ灰色砂。層厚10cm前後。洪水砂？

Ⅱｈ層：灰オリーブ色砂。層厚5cm前後。

Ⅱｉ層：灰色砂質シルト。層厚15cm前後。

Ⅲ層　Ⅲａ層～Ⅲｅ層に細別した。中世の水田耕作土。

Ⅲａ層：黄灰～オリーブ黒色粘土。層厚10～40cm前後。水田耕作土（Ⅲ層水田跡）。

Ⅲｂ層：暗灰黄～灰オリーブ色砂。層厚10～15cm前後。

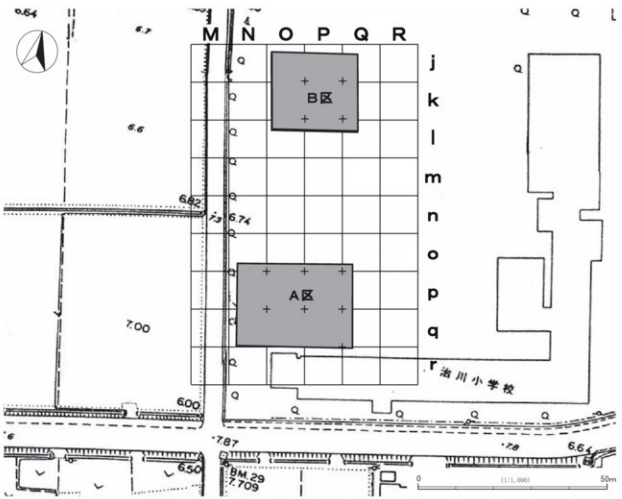
Ⅲｃ層：灰色砂質シルト～砂。層厚15～25cm前後。

Ⅲｄ層：灰色粘土。層厚5～15cm前後。水田耕作土？

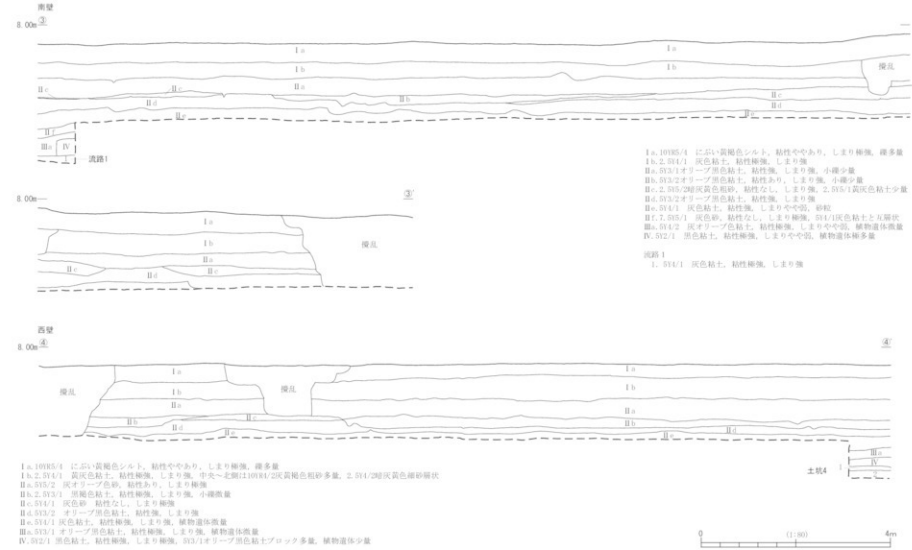
Ⅲｅ層：黒褐～黒色粘土。層厚10～25cm前後。水田耕作土？

Ⅳ層：黒褐～オリーブ黒色粘土質シルト～粘土。層厚10～35cm前後。古代の水田耕作土（Ⅳ層水田跡）。

第５図　遺跡周辺の地形と調査区位置図



第６図　調査区の配置とグリッド設定図


南壁
8.00m
③
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
Ⅱd
Ⅱe
Ⅱf
Ⅲa
Ⅳ
撹乱
流路1
8.00m
③'
西壁
8.00m
④
④'
土坑4
Ⅰa.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト，粘性ややあり，しまり極強，礫多量
Ⅰb.2.5Y4/1 黄灰色粘土，粘性極強，しまり強
Ⅱa.5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性強，しまり強，小礫少量
Ⅱb.5Y3/2オリーブ黒色粘土，粘性あり，しまり強，小礫少量
Ⅱc.2.5Y5/2暗灰黄色粗砂，粘性なし，しまり強，2.5Y5/1黄灰色粘土少量
Ⅱd.5Y3/2オリーブ黒色粘土，粘性強，しまり強
Ⅱe.5Y4/1 灰色粘土，粘性強，しまりやや弱，砂粒
Ⅱf.7.5Y5/1 灰色砂，粘性なし，しまり極強，5Y4/1灰色粘土と互層状
Ⅲa.5Y4/2 灰オリーブ色粘土，粘性極強，しまりやや弱，植物遺体微量
Ⅳ.5Y2/1 黒色粘土，粘性極強，しまりやや弱，植物遺体極多量
流路1
1. 5Y4/1 灰色粘土，粘性極強，しまり強
Ⅰa.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト，粘性ややあり，しまり極強，礫多量
Ⅰb.2.5Y4/1 黄灰色粘土，粘性極強，しまり強，中央～北側は10YR4/2灰黄褐色粗砂多量，2.5Y4/2暗灰黄色細砂層状
Ⅱa.5Y5/2 灰オリーブ色砂，粘性あり，しまり極強
Ⅱb.2.5Y3/1 黒褐色粘土，粘性極強，しまり強，小礫微量
Ⅱc.5Y4/1 灰色砂 粘性なし，しまり極強
Ⅱd.5Y3/2 オリーブ黒色粘土，粘性強，しまり強
Ⅱe.5Y4/1 灰色粘土，粘性極強，しまり強，植物遺体微量
Ⅲa.5Y3/1 オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまり強，植物遺体微量
Ⅳ.5Y2/1 黒色粘土，粘性極強，しまり極強，5Y3/1オリーブ黒色粘土ブロック多量，植物遺体少量
土坑4
1.2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト，粘性あり，しまりあり，炭化物粒多量
2.2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト，粘性あり，しまりあり
0
(1:80)
4m

第７図　A区基本土層１

Ⅴ層　Ⅴａ層・Ⅴｂ層に細別した。弥生～平安時代の遺物包含層。

Ⅴａ層：黄灰～灰色粘土質砂～粘土。層厚 10 ～ 25cm 前後。この層の上面で遺構を検出している。

Ⅴｂ層：灰～黒色砂質シルト～粘土質シルト。層厚 10 ～ 15cm 前後。この層の上面で遺構を検出している。

Ⅵ層　Ⅵａ層～Ⅵｄ層に細別した。無遺物層。本遺跡の最終面（相対的な地山）。

Ⅵａ層：灰オリーブ色砂質シルト。層厚 20cm 以上。

Ⅵｂ層：暗灰黄～灰色砂～砂質シルト。層厚 65cm 以上。この層の上面で遺構を検出している。

Ⅵｃ層：黄灰～オリーブ黒色粘土質シルト～粘土。層厚 30cm 以上。この層の上面で遺構を検出している。

Ⅵｄ層：灰色砂質シルト～シルト。層厚 55cm 以上。

B区：大別６層，細別 18 層を識別した。

Ⅰ層　Ⅰａ層・Ⅰｂ層に細別した。現代（加治川小学校校庭造成時）の盛土。

Ⅰａ層：オリーブ褐色砂。層厚 15 ～ 50cm 前後。

Ⅰｂ層：灰オリーブ色砂。層厚 15 ～ 70cm 前後。

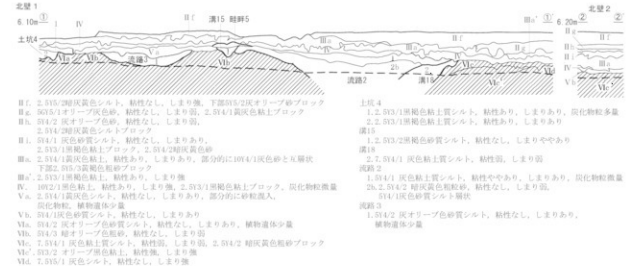
Ⅱ層　Ⅱａ層～Ⅱｅ層に細別した。現代（加治川小学校校庭造成以前）～近世？の水田耕作土及び洪水砂？層。

Ⅱａ層：オリーブ黒色粘土質砂～粘土質シルト。層厚 15 ～ 50cm 前後。現代の水田耕作土。

Ⅱｂ層：オリーブ黒色粘土質砂。層厚 5 ～ 50cm 前後。近世？の水田耕作土？

Ⅱｃ層：灰色砂。層厚 25 ～ 65cm 前後。洪水砂？

Ⅱｄ層：灰色粘土。層厚 40 ～ 50cm 前後。近世？の水田耕作土？



Ⅱｆ. 2.5Y5/2灰黄色シルト，粘性なし，しまり強，下部5Y5/2灰オリーブ砂ブロック
Ⅱｇ. 5G5/1オリーブ灰色砂，粘性なし，しまり弱，2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック
Ⅱｈ. 5Y4/2 灰オリーブ色砂，粘性なし，しまり弱，
2.5Y4/2緑灰黄色シルトブロック
Ⅲｉ. 5Y4/1 灰色砂質シルト，粘性なし，しまりあり，
2. 5Y3/1黒褐色土ブロック，2.5Y4/2緑灰黄色砂
Ⅲａ. 2.5Y4/1黄灰色粘土，粘性あり，しまりあり，部分的に10Y4/1灰色砂と互層状
下部2. 5Y5/3黄褐色粗砂ブロック
Ⅲａ'. 2. 5Y3/1黒褐色粘土，粘性あり，しまり強
Ⅳ. 10Y2/1黒色粘土，粘性あり，しまり強，2. 5Y3/1黒褐色粘土ブロック，炭化物粒微量
Ⅴａ. 2. 5Y4/1黄灰色シルト，粘性なし，しまりあり，部分的に砂粒混入，
炭化物粒，植物遺体少量
Ⅴｂ. 5Y4/1灰色砂質シルト，粘性なし，しまりあり
Ⅵａ. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト，粘性なし，しまりあり，植物遺体少量
Ⅵｂ. 5Y4/3 暗オリーブ色粗砂，粘性なし，しまり弱
Ⅵｃ. 7. 5Y4/1 灰色粘土質シルト，粘性弱，しまり弱，2. 5Y4/2 暗灰黄色粗砂ブロック
Ⅵｃ'. 5Y3/2 オリーブ黒色粘土，粘性強，しまり強
Ⅵｄ. 7. 5Y5/1 灰色シルト，粘性なし，しまり強

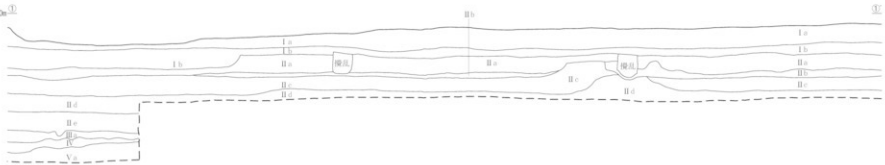
土坑 4
1. 2. 5Y3/1黒褐色粘土質シルト，粘性あり，しまりあり，炭化物粒多量
2. 2. 5Y3/1黒褐色粘土質シルト，粘性あり，しまりあり
溝15
1. 5Y3/2黒褐色砂質シルト，粘性なし，しまりややあり
溝16
2. 7. 5Y4/1 灰色粘土質シルト，粘性弱，しまり弱
流路 2
1. 5Y4/1 灰色粘土質シルト，粘性ややあり，しまりあり，炭化物粒微量
2b. 2. 5Y4/2 暗灰黄色粗砂，粘性なし，しまり弱，
5Y4/1灰色砂質シルト層状
流路 3
1. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト，粘性なし，しまりあり，
植物遺体少量

Ⅱｆ. 5Y4/1 灰色砂，粘性なし，しまり弱
Ⅲａ. 2. 5Y3/1 黒褐色粘土，粘性あり，しまり強，2. 5Y4/1黄灰色粘土ブロック，5G5/1オリーブ灰色砂
Ⅲｈ. 5Y4/2 灰オリーブ色砂，粘性なし，しまり弱，2. 5Y4/2緑灰黄色シルトブロック
Ⅲｃ. 5Y4/1 灰色砂質シルト，粘性なし，しまりあり，2. 5Y3/1黒褐色粘土ブロック，2. 5Y4/2緑灰黄色砂
Ⅲｄ. 5Y4/1 灰色粘土，粘性強，しまり強，植物遺体少量
Ⅲｅ. 5Y2/1 黒色粘土，粘性極強，しまり極強，5Y3/1オリーブ黒色粘土ブロック多量，植物遺体少量
Ⅳ. 5Y3/2 オリーブ黒色粘土質シルト，粘性あり，しまりあり，畦畔？
Ⅴｂ. 5Y3/2 オリーブ黒色粘土質シルト，粘性あり，しまりあり

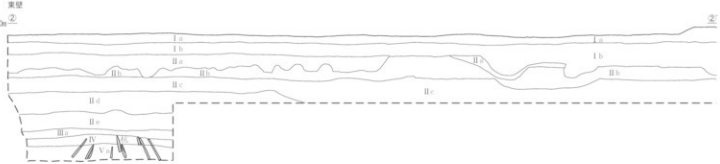
流路 1
1. 7. 5Y4/1 灰色粘土質シルト，粘性なし，しまりあり，植物遺体少量

0　(1:80)　4m

第８図　A区基本土層２



Ⅰa.2.5Y4/3オリーブ褐色砂，粘性なし，しまり極強，小礫少量
Ⅰb.5Y4/2灰オリーブ色砂，粘性なし，しまり極強，小礫微量，5Y3/2オリーブ黒色砂質シルトブロック少量
Ⅱa.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト，粘性ややあり，しまり極強，酸化鉄中量，5Y4/2灰オリーブ色砂マーブル状，下部5Y4/2灰オリーブ色砂縞状
Ⅱb.5Y3/1オリーブ黒色粘土質砂，粘性あり，しまり強，小礫・5Y5/1灰色砂少量
Ⅱc.5Y4/1灰色粗粒砂，粘性なし，しまりやや弱
Ⅱd.5Y5/1灰色粘土，粘性なし，しまりやや弱，植物遺体微量
Ⅱe.5Y4/1灰色粘土質砂，粘性あり，しまり強，小礫少量，植物遺体微量
Ⅲa.2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅳ.5Y2/1黒色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅴa.5Y4/1灰色粘土質砂，粘性強，しまり強，植物遺体多量



Ⅰa.2.5Y4/3オリーブ褐色砂，粘性なし，しまり極強，小礫少量
Ⅰb.5Y4/2灰オリーブ色砂，粘性なし，しまり極強，小礫微量，5Y3/2オリーブ黒色砂質シルトブロック少量
Ⅱa.5Y3/1オリーブ黒色粘土質砂，粘性あり，しまり強，小礫少量
Ⅱb.5Y3/1オリーブ黒色粘土質砂，粘性あり，しまり強，小礫・5Y5/1灰色砂少量
Ⅱc.7.5Y4/1灰色粗粒砂，粘性なし，しまりややゆる
Ⅱd.5Y4/1灰色粘土，粘性あり，しまりややゆる，小礫少量，植物遺体微量
Ⅱe.5Y4/1灰色粘土質砂，粘性あり，しまり強，小礫少量，植物遺体微量
Ⅲa.2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅳ.5Y2/1黒色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅴa.5Y4/1灰色粘土質砂，粘性強，しまり強，植物遺体多量

第９図　B区基本土層１

Ⅱe層：灰色粘土質砂。層厚 30 ～ 40cm 前後。近世？の水田耕作土？

Ⅲ層　Ⅲa層～Ⅲc層に細別した。中世の水田耕作土。

Ⅲa層：黒褐～オリーブ黒色粘土。層厚 10 ～ 25cm 前後。水田耕作土（Ⅲ層水田跡）。

Ⅲb層：黒褐色粘土。層厚は 10cm 前後。水田耕作土？

Ⅲc層：黒褐色粘土。層厚は 10 ～ 15cm 前後。水田耕作土？

Ⅳ層：黒色粘土。層厚は 10 ～ 35cm 前後。古代の水田耕作土（Ⅳ層水田跡）。

Ⅴ（Ⅴa）層：灰色粘土質砂。層厚 10 ～ 30cm 前後。古墳～平安時代の遺物包含層。この層の上面で遺構を検出している。

Ⅵ層　Ⅵa層～Ⅵf層に細別した。無遺物層。本遺跡跡の最終面（相対的な地山）。

Ⅵa層：灰色砂。層厚 10 ～ 15cm 前後。この層の上面で遺構を検出している。

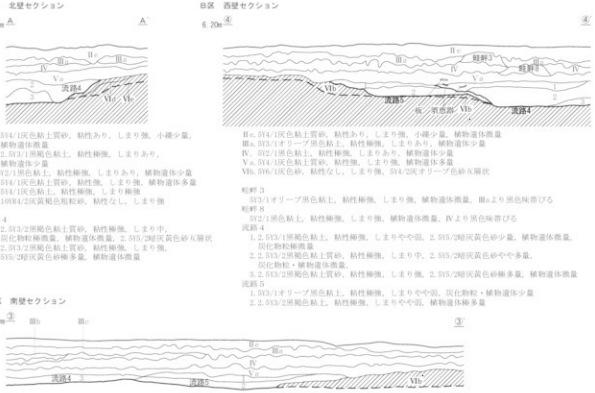
Ⅵb層：灰色砂。層厚 10 ～ 70cm 以上。この層の上面で遺構を検出している。

Ⅵc層：灰色砂。層厚 10cm 以上。

Ⅵd層：灰～オリーブ黒色粘土。層厚 10 ～ 25cm 以上。この層の上面で遺構を検出している。

Ⅵe層：灰黄褐色砂。層厚 15 ～ 20cm 以上。

Ⅵf層：灰オリーブ色粘土質砂。層厚 45cm 以上。



Ⅱc. 5Y4/1灰色粘土質砂，粘性あり，しまり強，小礫少量，植物遺体微量
Ⅲa. 2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，
　植物遺体少量
Ⅲb. 2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，
　植物遺体少量
Ⅲc. 2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅳ. 5Y2/1黒色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅴa. 5Y4/1灰色粘土質砂，粘性強，しまり強，植物遺体多量
Ⅵa. 5Y4/1灰色粘土，粘性極強，しまり極強
Ⅵc. 10YR4/2灰黄褐色粘質砂，粘性なし，しまり強

流路4
　2.2.5Y3/2黒褐色粘土質砂，粘性極強，しまり中，
　　炭化物粒極微量，植物遺体微量，2.5Y5/2灰黄色砂ブロック層状
　3.2.5Y3/2黒褐色粘土質砂，粘性極強，しまり強，
　5.5Y5/2灰黄色砂極多量，植物遺体微量

Ⅱc. 5Y4/1灰色粘土質砂，粘性あり，しまり強，小礫少量，植物遺体微量
Ⅲa. 5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅲb. 2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，5Y5/1灰色砂多量，植物遺体少量
Ⅲc. 2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅳ. 5Y2/1黒色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅴa. 5Y4/1灰色粘土質砂，粘性強，しまり強，植物遺体多量
Ⅵb. 5Y6/1灰色砂，粘性なし，しまり強，5Y4/2灰オリーブ色砂ブロック層状

粗砕3
　5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまり強，植物遺体微量，Ⅲaより黒色味帯びる
粗砕2
　5Y2/1黒色粘土，粘性極強，しまり強，植物遺体微量，Ⅳより黒色味帯びる
流路4
　1.2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりやや弱，2.5Y5/2灰黄色砂少量，植物遺体微量，
　　炭化物粒極微量
　2.2.5Y3/2黒褐色粘土質砂，粘性極強，しまり中，2.5Y5/2灰黄色砂やや多量，
　　炭化物粒・植物遺体微量
　3.2.5Y3/2黒褐色粘土質砂，粘性極強，しまり強，2.5Y5/2灰黄色砂極多量，植物遺体微量
流路5
　1.5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまりやや弱，炭化物粒・植物遺体少量
　2.2.5Y3/2黒褐色粘土，粘性極強，しまりやや弱，植物遺体極多量

Ⅱc. 5Y4/1灰色粘土質砂，粘性あり，しまり強，小礫少量，植物遺体微量
Ⅲa. 5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅲb. 2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，5Y5/1灰色砂多量，植物遺体少量
Ⅲc. 2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅳ. 5Y2/1黒色粘土，粘性極強，しまりあり，植物遺体少量
Ⅴa. 5Y4/1灰色粘土質砂，粘性強，しまり強，植物遺体多量
Ⅵb. 5Y6/1灰色砂，粘性なし，しまり強，5Y4/2灰オリーブ色砂ブロック層状

流路4
　3.2.5Y3/2黒褐色粘土質砂，粘性極強，しまり強，2.5Y4/2灰黄色砂極多量，炭化物粒・植物遺体微量
流路5
　1.5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまりやや弱，炭化物粒・植物遺体少量
　2.10YR3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまり極強

第10図　B区基本土層２

第３節　検出遺構

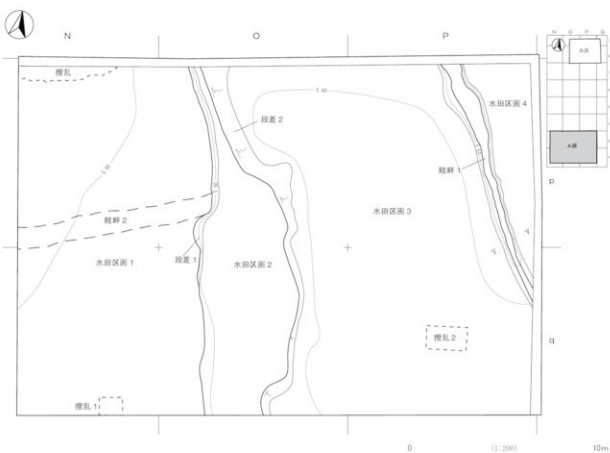
２時期の水田跡，溝 10 条，土坑９基，ピット９基，自然流路５条を検出した。水田跡については，Ｂ区Ⅲ層水田跡水田区画６より出土した柱状高台をもつ土師器有台椀の年代観（12 ～ 13 世紀初頃）から，Ⅲ層水田跡の年代が中世のものである可能性が高いため，それより上層であるⅡ層に断続的に形成された水田跡は近世以後のものと判断しⅢ層以下の層を調査の対象とした。遺構から出土した遺物の時期は，概ね古墳時代３世紀末葉～４世紀中葉頃と平安時代の８世紀後葉～ 10 世紀初頭頃に二大別することができ，量的には後者が圧倒的に多数を占める。なお，遺構の記載は，基本層序の上層から順に行う。

Ａ　Ⅲ層の遺構

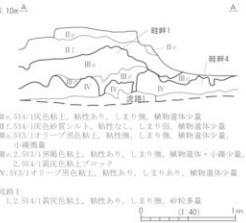
１）Ａ区

１条の畦畔と２ヶ所の段差によって区画された水田を４区画検出した。４区画とも部分的な検出であり全体的な形状・規模は不明である。また，水口・水路などは検出していない。

畦畔１（第 11・12・16 図，図版３・４）　Pp3-1 ～ Pq5-2 グリッドに位置する。北西及び南東側は調査区外へと延びる。方向は北から 32° 西に偏る。長さ 13.9 m以上，上幅 20 ～ 100cm，下幅 80 ～ 182cm，耕作土上面からの高さ 10 ～ 28cm であり，耕作土と同一の土壌を盛り上げてつくられている。Ⅳ層水田跡畦畔３の直上にあり，それを踏襲するとみられる。遺物は出土していない。



第11図　Ａ区Ⅲ層平面図



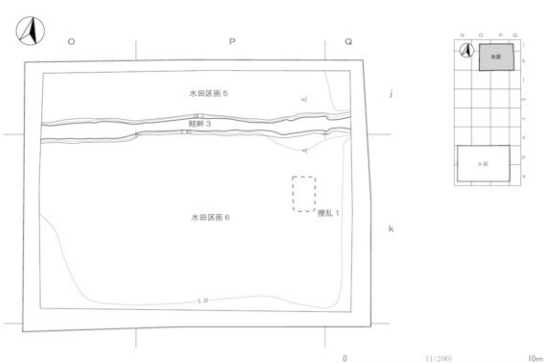
第12図　A区畦畔1・4セクション図

水田区画1（第11図,図版3・4）　Np2-1～0q2-5グリッドに位置する。調査区北西端の撹乱及び撹乱1によって切られ，西・北・南側は調査区外へと延びる。東側は段差1によって区画され，その比高は5～10cmである。方向は北から17°西に偏る。東西4.9m以上，南北18.4m以上，面積180.5㎡以上，耕作土上面からの深さ10～30cmであり，耕作土除去後の地表面は，東方向へ傾斜している。遺物は，土師器無台椀・小甕・長胴甕・鍋・甑・高杯，黒色土器無台椀・有台椀，須恵器無台杯（1）・有台杯（3）・杯蓋（2）・甕・長頸瓶（4）・横瓶（5），箸状木製品（6・7）・不明加工材（8）が出土している。

水田区画2　（第11図，図版3・4）0p1-1～0q3-5グリッドに位置する。南・北側は調査区外へと延びる。西・東側はそれぞれ段差1・段差2によって区画され，その比高は前者が5～10cm，後者が5～15cmである。方向は北から19°西に偏る。東西5.1m以上，南北18.4m以上，面積60.1㎡以上，耕作土上面からの深さ5～20cmであり，耕作土除去後の地表面は，東方向へ傾斜している。遺物は，土師器無台椀・小甕・長胴甕・鍋，須恵器無台杯（9）・有台杯（10）・杯蓋・横瓶，砥石が出土している。

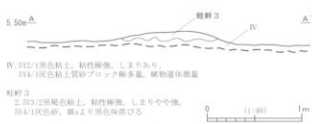
水田区画3　（第11図,図版3・4）0p2-1～Pq5-5グリッドに位置する。南側の一部が撹乱2によって切られ，北・南側は調査区外へと延びる。西側は段差2，東側は畦畔1によって区画され，段差2との比高は5～15cmである。方向は北から32°西に偏る。東西17.4m以上，南北18.4m以上，面積229.1㎡以上，耕作土上面からの深さ10～30cmであり，耕作土除去後の地表面は，南方向へ傾斜している。遺物は，弥生土器甕（11），土師器無台椀・小甕・長胴甕，黒色土器無台椀，須恵器無台杯・有台杯・甕が出土している。

水田区画4　（第11図，図版3・4）Pp4-1～Pq5-1グリッドに位置する。東・北側は調査区外へと延びる。



第13図　B区Ⅲ層平面図

西側は畦畔1によって区画される。方向は北から32°西に偏る。東西3.5m以上，南北11.2m以上，面積21.0㎡以上，耕作土上面からの深さ10～25cmであり，耕作土除去後の地表面は，西方向へ傾斜している。遺物は，土師器無台椀・長胴甕，黒色土器椀（12），須恵器無台杯・甕，箸状木製品（13）が出土している。



第14図　B区畦畔3セクション図

畦畔2（擬似畦畔）（第11図，図版4）Ⅲ層水田跡耕作土除去後のⅢb層上面で検出した。Np5-1～Op2-5グリッドに位置する。西側は調査区外へと延びる。東側はⅢ層水田跡段差1によって切られ遺存しない。方向は北から67°東に偏る。長さ10.7m以上，幅123cmである。下層であるⅣ層水田跡畦畔4の西側延長上にあたり，Ⅲ層水田跡の東西畦畔がこの方向性を踏襲していた可能性を示唆する。

2）B区

1条の畦畔とそれによって区画された水田を2区画検出した。2区画とも部分的な検出であり全体的な形状・規模は不明である。また，水口・水路などは検出していない。

畦畔3（第13・14図，図版4）0j3-5～Qj1-5グリッドに位置する。東・西側は調査区外へと延びる。方向は北から75°東に偏る。長さ16.4m以上，上幅38～93cm，下幅78～127cm，耕作土上面からの高さ10～15cmであり，耕作土と同一の土壌を盛り上げてつくられている。Ⅳ層水田跡畦畔8の直上もしくはすぐ南側に接しており，それを踏襲している可能性がある。遺物は出土していない。

水田区画5（第13図，図版4）0j3-4～Qj1-5グリッドに位置する。東・西・北側は調査区外へと延びる。方向は北から75°東に偏る。東西16.4m以上，南北2.6m以上，面積39.7㎡以上，耕作土上面からの深さ10～25cmであり，耕作土除去後の地表面は，西方向へ傾斜している。遺物は，土師器無台椀・長胴甕，黒色土器無台椀，須恵器甕が出土しているが，図示しえなかった。

水田区画6（第13図，図版4）0k3-1～Qk5-1グリッドに位置する。撹乱1によって切られるが，東・西・南側は調査区外へと延びる。方向は北から75°東に偏る。東西16.4m以上，南北9.2m以上，面積151.0㎡以上，耕作土上面からの深さ10～25cmであり，耕作土除去後の地表面は，西方向へ傾斜している。遺物は，土師器無台椀・有台椀（14）・長胴甕，黒色土器無台椀，須恵器無台杯・甕，石製紡錘車（15）が出土している。

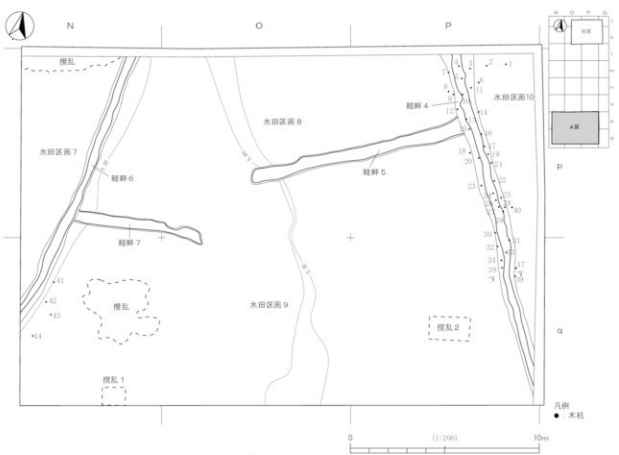
B　Ⅳ層の遺構

1）A区

4条の畦畔とそれによって区画された水田を4区画検出した。4区画とも部分的な検出であり全体的な形状・規模は不明である。また，水口・水路などは検出していない。

畦畔4（第12・15・16図，図版4）Pp3-1～Pq5-5グリッドに位置する。北西及び南東側は調査区外へと延びる。畦畔5とT字状に交差し，方向は北から28°西に偏る。長さ18.6m以上，上幅30～60cm，下幅70～170cm，耕作土上面からの高さ10～15cmであり，耕作土と同一の土壌を盛り上げてつくられている。この畦畔にともなうとみられる杭が38本（杭1～34・37～40）検出された。すべて丸木である。いわゆる打ち込み杭であるため上層（Ⅲ層）にともなう可能性も否定できないが，畦畔上あるいは，畦畔に沿って検出されていることから，この畦畔に伴うものと考える。遺物は出土していない。

畦畔5（第15図）0p3-4～Pp3-3グリッドに位置する。畦畔4とT字状に交差し，方向は北から62°東に偏る。長さ11.5m，上幅54～80cm，下幅70～93cm，耕作土上面からの高さ3～10cmであり，耕作土と同一の土壌



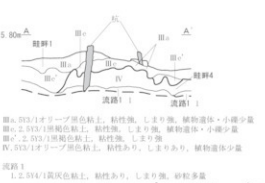
第15図　A区Ⅳ層平面図

を盛り上げてつくられている。遺物は出土していない。

畦畔6（第8・15図，図版4）　Np5-1～Nq2-3グリッドに位置する。北東及び南西側は調査区外へと延びる。畦畔7とT字状に交差し，方向は北から9°東に偏る。長さ15.4ｍ以上，上幅20～50cm，下幅76～90cm，耕作土上面からの高さ5～20cmであり，耕作土と同一の土壌を盛り上げてつくられている。この畦畔にともなうとみられる杭が4本（杭41～杭44）検出された。すべて丸木である。いわゆる打ち込み杭であり，また，杭1～40ほど畦畔との関係が明瞭ではなく，上層の（Ⅲ層）にともなう可能性も考えられる。遺物は，土師器無台椀・小甕・長胴甕，黒色土器無台椀，須恵器杯・横瓶が出土している。

畦畔7（第15図，図版4）　Np3-5～Oq1-1グリッドに位置する。畦畔6とT字状に交差し，方向は北から86°西に偏る。長さ6.8ｍ，上幅20～55cm，下幅36～72cm，耕作土上面からの高さ2～10cmであり，耕作土と同一の土壌を盛り上げてつくられている。遺物は，土師器長胴甕が出土しているが，図示しえなかった。

水田区画7（第15図，図版4）　Np2-1～Nq2-2グリッドに位置する。調査区北西端の撹乱によって切られ，西・北側は調査区外へと延びる。東側は畦畔6によって区画される。方向は北から9°東に偏る。東西5.4ｍ以上，南北12.8ｍ以上，面積37.7㎡以上，耕作土上面からの深さ5～15cmであり，耕作土除去後の地表面は，北方向へ傾斜



第16図　A区畦畔1・4セクション図

している。遺物は，縄文土器鉢（16），土師器無台椀（17）・小甕・長胴甕・鍋・瓶（18）・有台鉢，黒色土器無台椀，須恵器無台杯（19・20）・有台杯（21）・杯蓋・甕・長頸瓶・横瓶，土器片製円板（22），剥片（①），曲物側板？（23）が出土している。

水田区画８（第15図，図版４） Np5-5 ～ Pp3-2 グリッドに位置する。北側は調査区外へと延びる。東側は畦畔４，西側は畦畔６，南側は畦畔５・７によって区画される。方向は東辺を基準にすると北から28°西に偏し，西辺を基準にすると北から９°東に偏る。東西19.9ｍ以上，南北9.2ｍ以上，面積113.9㎡以上，耕作土上面からの深さ５～20cmであり，耕作土除去後の地表面は，東方向へ傾斜している。遺物は，弥生土器甕（24～27），土師器無台椀（28・30）・蓋？・長胴甕（29），黒色土器無台椀，須恵器無台杯（31～33）・有台杯（35～38）・杯蓋（34）・甕・長頸瓶（39）・横瓶，土器片製円板（40），砥石（41）が出土している。

水田区画９（第15図，図版４） Np3-5 ～ Pq5-5 グリッドに位置する。西側の一部を撹乱，東側の一部を撹乱２によって切られ，南側は調査区外へと延びる。東側は畦畔４，西側は畦畔６，北側は畦畔５・７によって区画される。方向は東辺を基準にすると北から28°西に偏し，西辺を基準にすると北から９°東に偏る。東西27.2ｍ以上，南北14.2ｍ以上，面積283.6㎡以上，耕作土上面からの深さ10～30cmであり，耕作土除去後の地表面は，東方向へ傾斜している。遺物は，土師器無台椀（42）・椀（43）・壺・小甕（44・45）・鍋（46・47）・瓶・有台鉢，黒色土器無台椀（48）・有台椀（49・50），須恵器無台杯（51～55）・有台杯（63～67）・折縁杯（62）・杯蓋（56～61）・甕（68）・長頸瓶（69）・横瓶・鉢，土器片製円板（70・71），曲物側板？（72）・不明加工材（73）が出土している。

水田区画10（第15図，図版４） Pp4-1 ～ Pq5-3 グリッドに位置する。東・北側は調査区外へと延びる。西側は畦畔４によって区画される。方向は北から28°西に偏る。東西3.1ｍ以上，南北15.6ｍ以上，面積28.4㎡以上，耕作土上面からの深さ10～25cmであり，耕作土除去後の地表面は，ほぼ平坦である。遺物は，土師器無台椀，須恵器無台杯・甕が出土しているが，図示しえなかった。

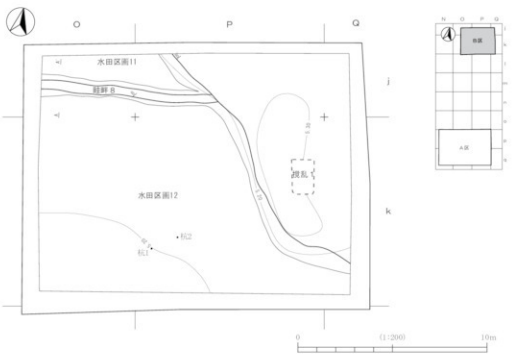
２）Ｂ区

１条の畦畔とそれによって区画された水田を２区画検出した。２区画とも部分的な検出であり全体的な形状・規模は不明である。また，水口・水路などは検出していない。

畦畔８（第17図，図版４） 0j3-4 ～ Pj3-5 グリッドに位置する。西側は調査区外へと延びる。方向は北から82°東に偏る。長さ9.3ｍ以上，上幅40～68cm，下幅80～116cm，耕作土上面からの高さ10～15cmであり，耕作土と同一の土壌を盛り上げてつくられている。遺物は，土師器無台椀・長胴甕，黒色土器無台椀（74・75），須恵器無台杯・横瓶，砥石（76）が出土している。

水田区画11（第17図，図版４） 0j3-3 ～ Pj2-5 グリッドに位置する。西・北側は調査区外へと延びる。南側は畦畔２によって区画される。方向は南辺を基準にすると北から82°東に偏し，東辺を基準にすると北から53°西に偏る。東西8.8ｍ以上，南北2.1ｍ以上，面積9.6㎡以上，耕作土上面からの深さ10～30cmであり，耕作土除去後の地表面は，東方向へ傾斜している。遺物は，土師器無台椀・長胴甕，黒色土器無台椀，須恵器無台杯（77），箸状木製品（78）が出土している。

水田区画12（第17図，図版４） 0j3-5 ～ Qk1-5 グリッドに位置する。東・西・南側は調査区外へと延びる。北側は畦畔８によって区画される。方向は北辺を基準にすると北から82°東に偏し，東辺を基準にすると北から53°西に偏る。東西16.4ｍ以上，南北10.2ｍ以上，面積120.9㎡以上，耕作土上面からの深さ10～30cmであり，耕作土除去後の地表面は，東方向へ傾斜している。この水田区画にともなうとみられる杭が２本（杭１・２）検出された。２本とも丸木である。いわゆる打ち込み杭であり，稲干し台など水田区画の中に杭を打ち込む施設の可能性が低く，上層（Ⅲ層）にともなうものかもしれない。遺物は，土師器無台椀（79）・小甕・長胴甕・鍋，



第17図　B区Ⅳ層平面図・水田区画11・12セクション図

黒色土器無台椀，須恵器無台杯・有台杯・杯蓋・甕・瓶，土器片製円板（80）が出土している。

C　Ｖａ層の遺構

1）A区

溝１（第18～20図，図版5）　Np2-3～3-4グリッドに位置する。北西側は調査区外へと延びる。溝15を切る。方向は北から42°西に偏る。長さ4.04m以上，最大幅40cm，深さ19cmであり，埋土除去後の底面は，北西方向へ傾斜している。断面形はU字形。埋土は2層で，黒褐色粘土（1層）と暗灰黄色砂（2層）からなる。遺物は，土師器無台椀・小甕・長胴甕，須恵器無台杯（81）が出土している。

溝２（第18～20図，図版5）　Np2-1～3-4グリッドに位置する。北側は撹乱によって切られている。溝15・16・17，土坑4，ピット8・9を切る。方向は北から34°西に偏る。長さ5.08m以上，最大幅40cm，深さ24cm

であり，埋土除去後の底面は，中央に向けて傾斜している。断面形はU字形。埋土は２層で，黒褐色粘土（１層）と暗灰黄色砂（２層）からなる。遺物は，土師器無台椀（82）・小甕（83）・長胴甕，黒色土器無台椀，須恵器無台杯（84・85）・甕が出土している。

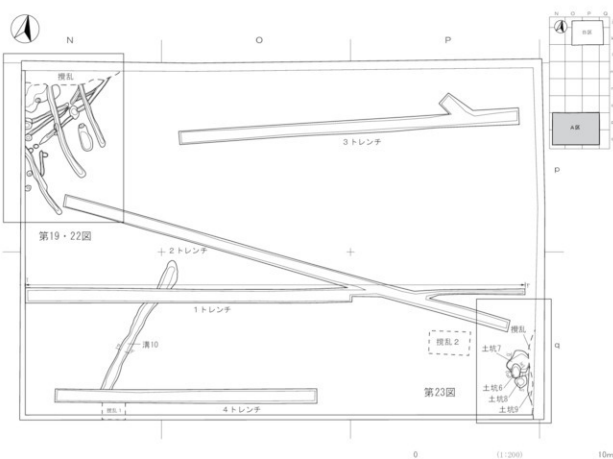
溝３（第18～20図，図版５） Np3-1～4-3グリッドに位置する。北側は撹乱によって切られている。溝15・16・17を切る。方向は北から33°西に偏る。長さ3.51m以上，最大幅28cm，深さ17cmであり，埋土除去後の底面は，中央に向けて傾斜している。断面形はU字形。埋土は２層で，黒褐色粘土（１層）と暗灰黄色砂（２層）からなる。遺物は，土師器椀・小甕・長胴甕，須恵器有台杯（86）が出土している。

これら３条の溝は底面中央間距離がほぼ２m間隔で並ぶ。畑跡の耕作痕である可能性が高い。

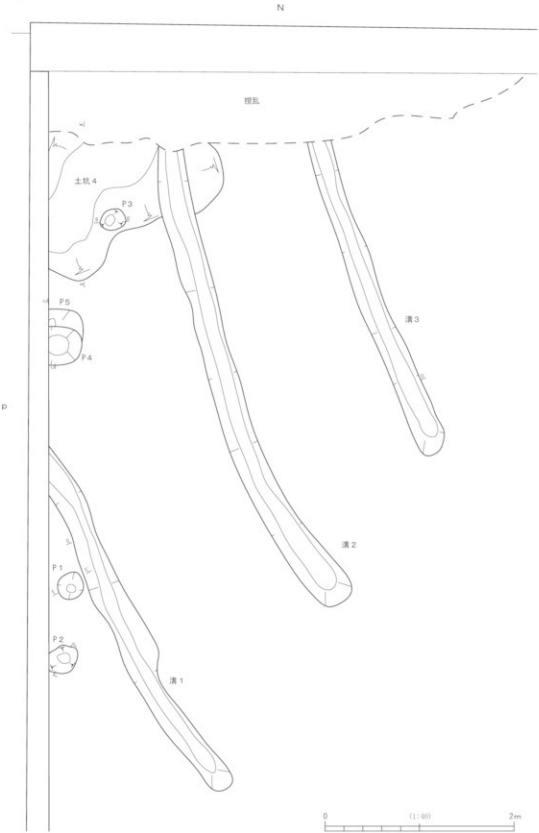
土坑４（第７・８・18～20図，図版５） Np2-1～3-1グリッドに位置する。西側は調査区外へ延びる。北側は撹乱によって切られているが調査区外へと延びるとみられる。溝２，ピット３に切られる。方向は北から25°東に偏る。長軸2.14m以上，短軸1.03m以上の不整形で，深さ18cmである。断面形は皿形。埋土は２層で，黒褐色粘土（１層）と黄灰色粘土（２層）からなる。遺物は，土師器無台椀（87）・小甕・長胴甕（88・89）・鍋，須恵器無台杯（91）・杯（90）・甕が出土している。

ピット１（第18～20図，図版５） Np2-3グリッドに位置する。長軸30cm，短軸28cmの楕円形で，深さ20cmである。断面形は中程に段が付く椀形。埋土は３層で，黒色粘土（１層）・黒褐色砂質粘土（２・３層）からなる。柱痕跡は認められなかった。遺物は出土していない。

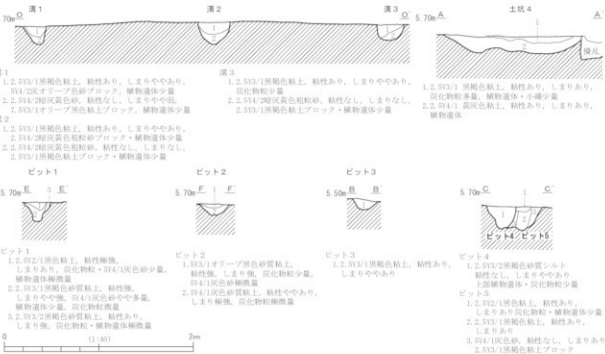
ピット２（第18～20図，図版５） Np2-4グリッドに位置する。西側は調査区外へと延びる。長軸36cm以上，短軸28cmの楕円形で，深さ12cmである。断面形は皿形。埋土は２層で，オリーブ黒色砂質粘土（１層）と灰色



第18図　A区Ⅴａ・ｂ層平面図



第19図　A区Ⅴａ層遺構詳細図（1）



第20図　A区Ⅴa層遺構詳細図（2）

砂質粘土（2層）からなる。柱痕跡は認められなかった。遺物は出土していない。

ピット3（第13図,図版4）　Np2-1・2-2グリッドに位置する。土坑4を切る。長軸27cm,短軸22cmの楕円形で,深さ11cmである。断面形は皿形。埋土は単層で,黒褐色粘土からなる。柱痕跡は認められなかった。遺物は出土していない。

ピット4（第18～20図,図版5）　Np2-2グリッドに位置する。西側は調査区外へと延びる。ピット5を切る。長軸35cm以上,短軸40cmの楕円形で,深さ23cmである。断面形は椀形。埋土は単層で,黒褐色砂質シルトからなる。柱痕跡は認められなかった。遺物は出土していない。

ピット5（第18～20図,図版5）　Np2-2グリッドに位置する。西側は調査区外へと延びる。ピット4に切られる。長軸36cm以上,短軸19cm以上の楕円形で,深さ25cmである。断面形は椀形。埋土は3層で,黒色粘土（1層）・黒褐色粘土（2層）・灰色砂（3層）からなる。柱抜取穴（1層）を除去すると柱痕跡（2層）と掘形埋土（3層）が明瞭に区分できた。柱痕跡の直径は14cmであり,底面は掘形よりも4cm沈降していた。遺物は出土していない。

2）B区

溝5（第17・21図,図版6）　Pj1-4～Pk3-2グリッドに位置する。北西側は調査区外へと延びる。方向は北から56°西に偏る。長さ8.0m以上,最大幅105cm,深さ10～20cmであり,埋土除去後の底面は,北西方向へ傾斜している。断面形は皿形。埋土は単層で,オリーブ黒色粘土からなる。遺物は土師器無台椀（92）が出土している。

D　A区Ⅴb層の遺構

a　調査区南西部の遺構

溝10（第18・23・25図,図版6）　Nq4-4～Oq1-1グリッドに位置する。方向は北から14°東に偏る。長さ7.66m以上,最大幅80cm,深さ11cmであり,埋土除去後の底面は,ほぼ平坦である。断面形は皿形。埋土は単層で,灰色粘土からなる。遺物は,土師器無台椀・小甕（93）・長胴甕・有台鉢（94）・鍋,須恵器無台杯（95）・杯蓋・

甕が出土している。

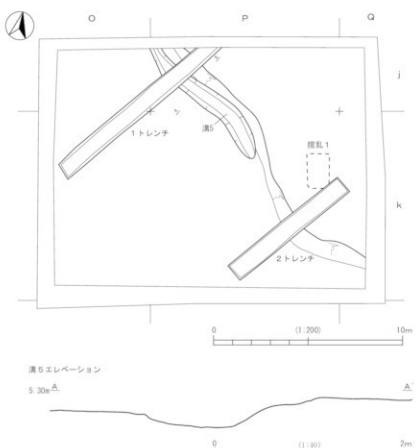
b　調査区北西端の遺構

溝14（第22・23図，図版６）　Np2-3グリッドに位置する。土坑13を切る。方向は北から15°西に偏る。長さ1.35m，最大幅16cm，深さ3cmであり，埋土除去後の底面は，南方向へ傾斜している。断面形は皿形。埋土は単層で，黒褐色砂質シルトからなる。遺物は，土師器無台椀（96）が出土している。

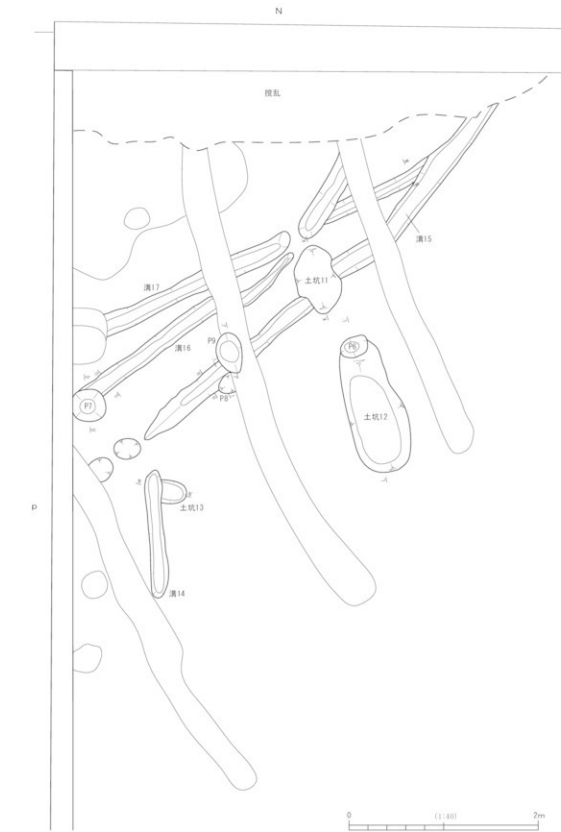
溝15（第８・23図，図版７）　Np2-3～4-1グリッドに位置する。北側は撹乱によって切られているが調査区外へと延びる。溝１～３・土坑11・ピット８に切られ，ピット９を切る。方向は北から33°東に偏る。長さ5.76m以上，最大幅48cm，深さ10cmであり，埋土除去後の底面は，ほぼ平坦である。断面形は椀形。埋土は単層で，暗灰黄色砂質シルトからなる。遺物は，土師器甕（97）・無台椀・小甕，須恵器杯（98）が出土している。

溝16（第22・23図，図版６・７）　Np2-2～3-1グリッドに位置する。溝２・３，ピット７に切られ，溝17を切る。西側はピット７によって切られているが調査区外へと延びるとみられる。方向は北から35°東に偏る。長さ3.74m以上，最大幅24cm，深さ7cmであり，埋土除去後の底面は，ほぼ平坦である。断面形は皿形。埋土は単層で，暗灰黄色砂質シルトからなる。遺物は，土師器椀・長胴甕が出土しているが，図示しえなかった。

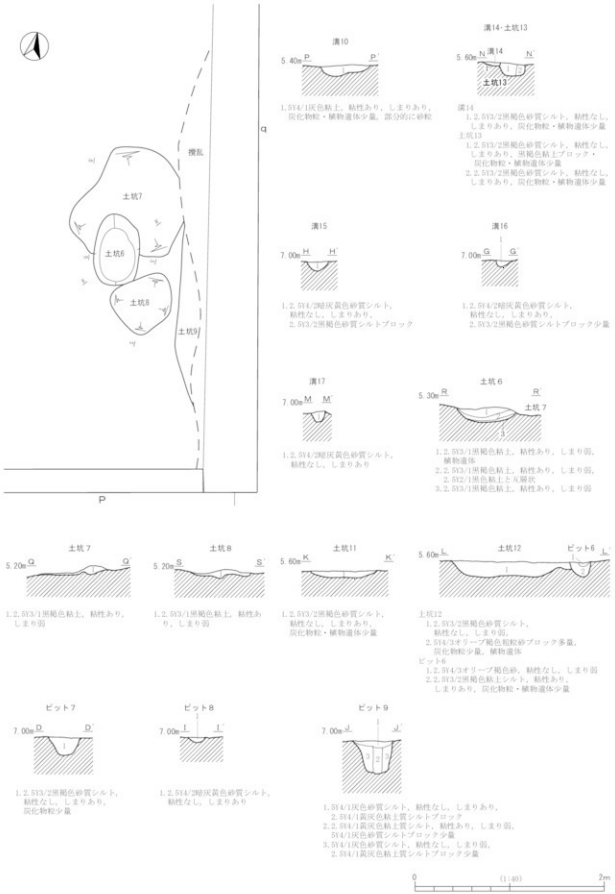
溝17（第22・23図，図版６・７）　Np2-2～4-1グリッドに位置する。西側はピット５に切られているが調査区外へと延びるとみられる。溝２・３・15・16，ピット５に切られる。方向は北から51°東に偏る。長さ3.88m以上，最大幅23cm，深さ11cmであり，埋土除去後の底面は，ほぼ平坦である。断面形は椀形。埋土は単層で，暗灰黄色砂質シルトからなる。遺物は，土師器小甕・長胴甕（99），須恵器杯が出土している。



第21図　B区Ⅴa層平面図・溝５エレベーション図



第22図　A区Ⅴb層遺構詳細図（1）



第23図　A区Ｖｂ層遺構詳細図（２）

このうち溝15～17の3条は，Ⅴa層上面で検出した溝1～3同様，畑跡の耕作痕である可能性がある。

土坑11（第22・23図，図版6・7） Np3-2グリッドに位置する。溝15を切る。方向は北から26°西に偏る。長軸74cm，短軸42cmの楕円形で，深さ7cmである。断面形は皿形。埋土は単層で，黒褐色砂質シルトからなる。遺物は出土していない。

土坑12（第22・23図，図版6・7） Np3-2～4-3グリッドに位置する。ピット6に切られる。方向は北から32°西に偏る。長軸140cm，短軸60cmの長楕円形で，深さ17cmである。断面形は皿形。埋土は単層で，黒褐色砂質シルトからなる。遺物は，土師器無台杯（100）・長胴甕が出土している。

土坑13（第22･23図,図版6・7） Np2-3グリッドに位置する。溝14に切られる。方向は北から86°東に偏る。長軸30cm以上，短軸26cmの楕円形で，深さ13cmである。断面形は椀形。埋土は2層で，双方とも黒褐色砂質シルトからなる。遺物は出土していない。

ピット6（第22･23図,図版7） Np3-2グリッドに位置する。土坑12を切る。長軸30cm,短軸21cmの楕円形で,深さ15cmである。断面形は椀形。埋土は2層で,オリーブ褐色砂（1層）と黒褐色粘土質シルト（2層）からなる。柱痕跡は認められなかった。遺物は，土師器長胴甕，須恵器杯が出土しているが，図示しえなかった。

ピット7（第22･23図,図版6・7） Np2-2～2-3グリッドに位置する。西側は調査区外へと延びる。溝16を切る。長軸37cm以上,短軸35cmの楕円形で,深さ20cmである。断面形は椀形。埋土は単層で,黒褐色砂質シルトからなる。柱痕跡は認められなかった。遺物は，土師器長胴甕・須恵器杯が出土しているが，図示しえなかった。

ピット8（第22・23図，図版6・7） Np3-2グリッドに位置する。溝2に切られ，溝15・ピット9を切る。長軸16cm以上，短軸19cmの楕円形で，深さ5cmである。断面形は皿形。埋土は単層で，暗灰黄色砂質シルトからなる。柱痕跡は認められなかった。遺物は出土していない。

ピット9（第22・23図，図版7） Np3-2グリッドに位置する。溝2・15，ピット8に切られる。長軸43cm，短軸27cmの楕円形で，深さ35cmである。断面形は椀形。埋土は3層で，灰色砂質シルト（1層）・黄灰色粘土質シルト（2層）・灰色砂質シルト（3層）からなる。柱抜取穴（1層）を除去すると柱痕跡（2層）と掘形埋土（3層）が明瞭に区分できた。柱痕跡の直径は10cmであり，底面は掘形よりも2cm沈降していた。遺物は出土していない。

c　調査区南東端の遺構

土坑6（第22・23図，図版7） Pq5-3，5-4グリッドに位置する。土坑7・8を切る。方向は北から16°西に偏る。長軸76cm，短軸45cmの楕円形で，深さ16cmである。断面形は皿形。埋土は3層で，すべて黒褐色粘土からなる。遺物は出土していない。

土坑7（第22･23図） Pq5-3,5-4グリッドに位置する。土坑6・撹乱に切られる。方向は北から66°東に偏る。長軸124cm以上,短軸121cmの不整円形で,深さ10cmである。断面形は不整形。埋土は単層で,黒褐色粘土からなる。遺物は出土していない。

土坑8（第22・23図） Pq5-4グリッドに位置する。土坑6に切られる。方向は北から27°東に偏る。長軸64cm，短軸63cmの不整円形で，深さ8cmである。断面形は不整形。埋土は単層で，黒褐色粘土からなる。遺物は出土していない。

土坑9（第23図） Pq5-4グリッドに位置する。東側は撹乱によって切られているが調査区外へと延びるとみられる。長軸190cm以上，短軸24cm以上であるが全体の形状及び方向は窺い知れない。埋土は土坑6～8同様，2.5Y3/1黒褐色粘土である。粘性があり，しまりに欠ける。

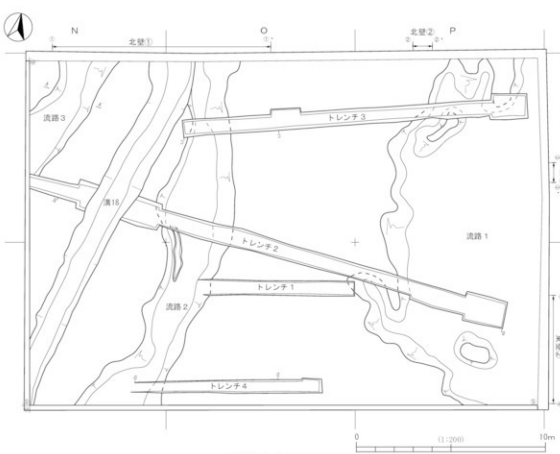
E　VI層の遺構

1）A区

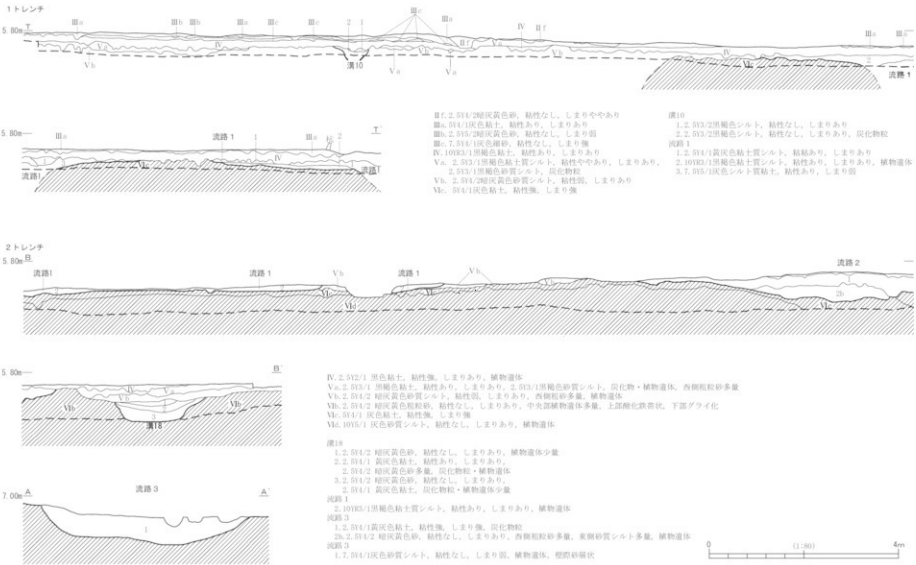
溝18（第８・25図，図版１・８）　Nq2-5 ～ 0p1-2 グリッドに位置する。北・南西側は調査区外へと延びる。流路２に切られる。方向は北から 15° 東に偏る。長さ 21.5 m以上，幅 1.25 ～ 2.45m 以上，深さ 42cm であり，埋土除去後の底面は，ほぼ平坦である。断面形は逆台形状。埋土は３層で，暗灰黄色砂（１層）・黄灰色粘土（２層）・暗灰黄色砂（３層）からなる。遺物は，土師器甕（101 ～ 103・105）・壺（106 ～ 109）・鉢（104・110・111）が出土している。

流路１（第７・８・12・16・24・25図）　0q5-2 ～ Pq5-5 グリッドに位置する。東・北・南側は調査区外へと延びる。長さ 18.3 m以上，幅 10.3 m以上，深さ 15 ～ 30cm 以上であり，埋土除去後の底面は，東方向へ傾斜している。断面形は不整形。埋土は３層で，黄灰色粘土質シルト（１層）・黒褐色粘土質シルト（２層）・灰色シルト質粘土（３層）からなる。上面プランが不整形をなし，北側及び南側に１ヶ所ずつ島状の高まりがある。方向は不明である。遺物は，弥生土器甕（112 ～ 114），土師器椀・甕，須恵器甕が出土している。上面プラン及び断面形が不整形であることから自然の流路と判断した。

流路２（第８・22 ～ 26 図，図版８）　Nq3-5 ～ 0p2-1 グリッドに位置する。北・南側は調査区外へと延びる。溝 18 を切る。方向は北から 4° 東に偏る。長さ 19.9 m以上，幅２～ 4.1 m以上，深さ 45 ～ 60cm であり，埋土除去後の底面は，ほぼ平坦である。断面形は不整形。埋土は３層で，黄灰～暗灰黄色砂質シルト～粘土（１層）・黄褐色砂（２a 層）・にぶい黄褐～暗黄灰色砂（２b 層）からなる。0p・0q グリッドの一部が溝状に落ち込む。遺物は，土師器椀・甕・長胴甕，須恵器無台杯（115）・杯蓋（116）・有台杯（117）・甕・横瓶・括れ鉢（118）が



第24図　A区VI層平面図



Ⅱf. 2.5Y4/2暗灰黄色砂，粘性なし，しまりやや弱
Ⅲa. 5Y4/1灰色粘土，粘性あり，しまりあり
Ⅲb. 2.5Y5/2暗灰黄色砂，粘性なし，しまり弱
Ⅲc. 7.5Y4/1灰色礫砂，粘性なし，しまり強
Ⅳ. 10YR3/1黒褐色粘土，粘性あり，しまりあり
Va. 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト，粘性やや弱，しまりあり，2.5Y3/1黒褐色砂質シルト，炭化物粒
Vb. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト，粘性弱，しまりあり
Vc. 5Y4/1灰色粘土，粘性強，しまり強

溝10
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト，粘性なし，しまりあり
2. 2.5Y3/2黒褐色シルト，粘性なし，しまりあり，炭化物粒

流路1
1. 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト，粘着あり，しまりあり
2. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト，粘性あり，しまりあり，植物遺体
3. 7.5Y5/1灰色シルト質粘土，粘性あり，しまり弱

Ⅳ. 2.5Y2/1 黒色粘土，粘性強，しまりあり，植物遺体
Va. 2.5Y3/1 黒褐色粘土，粘性あり，しまりあり，2.5Y3/1黒褐色砂質シルト，炭化物・植物遺体，西側粗粒砂多量
Vb. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト，粘性弱，しまりあり，西側粗砂多量，植物遺体
Vb. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂，粘性なし，しまりあり，中央部植物遺体多量，上部酸化鉄帯状，下部グライ化
Vc. 5Y4/1 灰色粘土，粘性強，しまり強
Vd. 10Y5/1 灰色砂質シルト，粘性なし，しまりあり，植物遺体

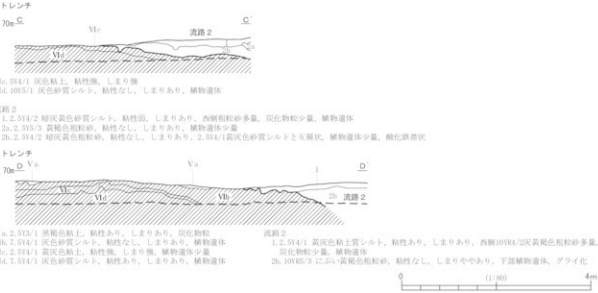
溝18
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂，粘性なし，しまりあり，植物遺体少量
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘土，粘性あり，しまりあり
2. 5Y4/2 暗灰黄色砂多量，炭化物粒・植物遺体
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂，粘性なし，しまりあり，
2. 5Y4/1 黄灰色粘土，炭化物粒・植物遺体少量

流路1
2. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト，粘性あり，しまりあり，植物遺体

流路3
1. 7.5Y4/1灰色粘土，粘性強，しまり強，炭化物粒
2b. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂，粘性なし，しまりあり，西側粗粒砂多量，東側砂質シルト多量，植物遺体

流路3
1. 7.5Y4/1灰色砂質シルト，粘性なし，しまり弱，植物遺体，堰跡砂層状

第25図　A区流路3，トレンチ1・2セクション図



第26図　A区トレンチ3・4セクション図

出土している。上面プラン及び断面形が不整形であることから自然の流路と判断した。

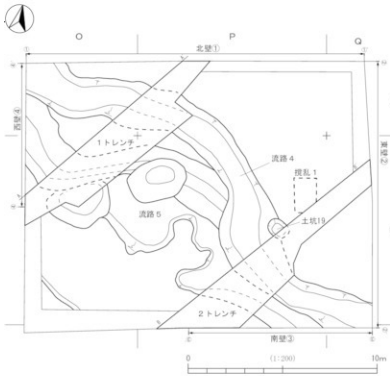
流路3（第8・24・25図，図版8）　Np2-2～4-1グリッドに位置する。北・西側は調査区外へと延びる。方向は北から22°東に偏る。長さ7.45 m以上，幅2.25～2.95 m以上，深さ30～65cmであり，埋土除去後の底面は，ほぼ平坦である。断面形は皿形。埋土は単層で，灰色砂質シルトからなる。遺物は出土していない。上面プランがやや不整形であること及びNpグリッドではⅤa層及びⅤb層から多量の遺物が出土しているが，木遺構からの出土遺物が皆無であることから自然の流路と判断した。

2）B区

土坑19（第10・27図，図版2・9）　Pk4-3グリッドに位置する。流路4を切る。方向は北から61°西に偏る。長軸75cm以上，短軸85cm，深さ35cmである。断面形は楕形。埋土は単層で，オリーブ黒色粘土質砂からなる。遺物は出土していない。

流路4（第10・27図，図版2・9）　0j2-4～Qk2-5グリッドに位置する。北東・南西側は調査区外へと延びる。土坑19に切られ，流路5を切る。方向は北から64°西に偏る。長さ22.8 m以上，幅1.6～3.1 m，深さ16～54cmであり，埋土除去後の底面は，北西方向へ傾斜している。断面形は皿形。埋土は3層で，黒褐～オリーブ黒色粘土質砂～粘土（1層）・黒褐色粘土質砂～粘土（2層）・黒褐色粘土質砂～粘土（3層）からなる。5ヶ所（0j3-4グリッド，0j5-5グリッド，Pk3-2グリッド，Pk3-3グリッド，Pk5-5グリッド）で屈曲し，蛇行していた様子が窺える。遺物は，土師器無台椀（119～122）・長胴甕（123），黒色土器無台椀（124），須恵器無台杯（125）・有台杯（126）・壺（127）・甕・横瓶が出土している。上面プランがやや不整形であること及び蛇行する状況から自然の流路と判断した。

流路5（第10・27図，図版2～9）　0j2-4～Pk5-5グリッドに位置する。北東・南西側は調査区外へと延びる。流路4に切られる。方向は北から66°西に偏る。長さ20.05 m以上，幅2.35～6.0 m，深さ14～64cmであり，埋土除去後の底面は，北西方向へ傾斜している。断面形は皿形。埋土は3層で，オリーブ黒色粘土（1層）・黒褐色粘土（2層）・オリーブ黒色粘土質砂（3層）からなる。南側の上面プランが不整形をなし，擂鉢状の落ち込みが2ヶ所みられる。また，2ヶ所（0k3-1グリッド・Pk1-1グリッド）で屈曲し，蛇行していた様子が窺える。遺物は，土師器高杯（128）・長胴甕，須恵器無台杯（129），不明加工板（130）が出土している。上面プランが不整形であること及び蛇行する状況から自然の流路と判断した。



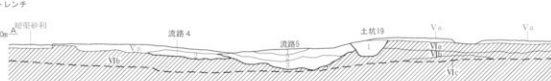
1トレンチ

Va. 5Y4/1灰色粘土質砂，粘性なし，しまり強，5Y4/2灰オリーブ色砂・植物遺体微量，炭化物粒極微量
VIb. 5Y6/1灰色砂，粘性なし，しまり強，5Y4/2灰オリーブ色砂互層状
VId. 5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまり強
VIc. 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂，粘性なし，しまり強
VIf. 5Y4/2灰オリーブ色粘土質砂，粘性極強，しまり強，5Y6/2灰オリーブ色砂互層状

流路4
1. 2.5Y3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまりやや弱，2.5Y5/2暗灰黄色砂少量，植物遺体微量，炭化物粒極微量
2. 2.5Y3/2黒褐色粘土質砂，粘性極強，しまり中，2.5Y5/2暗灰黄色砂やや多量，炭化物粒・植物遺体微量
3. 2.5Y3/2黒褐色粘土質砂，粘性極強，しまり強，2.5Y5/2暗灰黄色砂極多量，植物遺体微量

流路5
1. 5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまりやや弱，植物遺体少量，炭化物粒極微量
2. 2.5Y3/2黒褐色粘土，粘性極強，しまりやや弱，植物遺体極多量，西壁際5Y6/1灰色砂微量
3. 5Y3/1オリーブ黒色粘土質砂，粘性やや小，しまり強，5Y6/1灰色砂多量

2トレンチ



Va. 5Y4/1灰色粘土質砂，粘性強，しまり強，植物遺体多量
VIb. 5Y4/1灰色砂，粘性なし，しまり強，植物遺体少量
VIb. 7.5Y4/1灰色砂，粘性なし，しまり極強，植物遺体やや量
VIc. 5Y6/1灰色砂，粘性なし，しまり強，小礫極多量

土坑19
1. 5Y3/1オリーブ黒色粘土質砂，粘性強，しまり強，植物遺体少量，炭化物粒極微量

流路4
1. 5Y3/1オリーブ黒色粘土，粘性極強，しまり強，炭化物粒・植物遺体少量
2. 2. 5Y3/2黒褐色粘土，粘性極強，しまりやや強，植物遺体微量，炭化物粒極微量，2.5Y4/2暗灰黄色砂互層状，部分的に5Y4/1灰色粘土質砂
3. 2. 5Y3/2黒褐色粘土，粘性極強，しまり強，炭化物粒・植物遺体微量，2.5Y4/2暗灰黄色砂互層状

流路5
2. 10YR3/1黒褐色粘土，粘性極強，しまり極強

0 (1:80) 4m

第27図　B区VI層平面図・1・2トレンチセクション図

第１表　遺構一覧表

地区名	遺構名	主なグリッド	検出層位	規模 長軸	規模 短軸	規模（cm）深さ（最高）	規模（cm）畔幅の幅 上幅	規模（cm）畔幅の幅 下幅	断面形状	主軸方向	出土遺物	切り合い	埋没 平面	埋没 断面	図版	備考
A	畦畔１	Pp3-1～Pp5-2	Ⅲ	(1390)	—	28	100	182	—	N-32°-W	—	—	11	12・16	3・4	
	畦畔２	Np5-1～Op2-5	Ⅲ	(1070)	—	—	—	123	—	N-67°-E	—	—		—	4	
	畦畔４	Pp3-1～Pp5-5	Ⅳ	(1860)	—	15	60	170	—	N-28°-W	—	—	15	12・16		
	畦畔５	Op3-4～Pp3-3	Ⅳ	1150	—	10	80	93	—	N-62°-E	—	—		—		
	畦畔６	Np5-1～Nq2-3	Ⅳ	(1540)	—	20	50	90	—	N-9°-E	土師器無台椀・小甕・長胴甕、黒色土器無台椀、須恵器杯・横瓶	—		8		
	畦畔７	Np3-5～Oq1-1	Ⅳ	680	—	10	55	72	—	N-86°-W	土師器長胴甕	—		—		
	水田区画１	Np2-1～Oq2-5	Ⅲ	(1840)	(490)	30	—	—	—	N-17°-W	土師器無台椀・小甕・長胴甕・鍋・瓶・高杯、黒色土器無台椀・有台椀、須恵器無台杯・杯（1）・杯蓋（2）・有台杯（3）・甕・長頸瓶（4）・横瓶（5）、筆状木製品（6・7）・不明加工材（8）	—	11	—	3・4	
	水田区画２	Op1-1～Oq3-5	Ⅲ	(1840)	(510)	20	—	—	—	N-19°-W	土師器無台椀（9）・杯蓋・有台杯（10）・横瓶、鍋有	—		—		
	水田区画３	Op2-1～Pp5-5	Ⅲ	(1840)	(1740)	30	—	—	—	N-32°-W	弥生土器壺（11）、土師器無台椀・小甕・長胴甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯・有台杯・甕	—		—		
	水田区画４	Pp4-1～Pp5-1	Ⅲ	(1120)	(350)	25	—	—	—	N-32°-W	土師器無台椀・長胴甕、黒色土器椀（12）、須恵器無台杯・甕、筆状木製品（13）	—		—		
	水田区画７	Np2-1～Nq2-2	Ⅳ	(1280)	(540)	15	—	—	—	N-9°-E	縄文土器体（16）、土師器無台椀（17）・小甕・長胴甕・鍋・瓶（18）・有台鉢、黒色土器無台椀、須恵器無台杯（19・20）・杯蓋・有台杯（21）・甕・長頸瓶・横瓶、土器片製円板（22）、剥片（23）、曲物側板？（23）	—	15	—	4	
	水田区画８	Np5-5～Pp3-2	Ⅳ	(1990)	(920)	20	—	—	—	N-9°-E N-28°-W	弥生土器壺（24～27）、土師器無台椀（28・30）・蓋？・長胴甕（29）・小甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯（31～33）・杯蓋（34）・有台杯（35～38）・甕・長頸瓶（39）・横瓶、土器片製円板（40）、紡石（41）	—		—		
	水田区画９	Np3-5～Pp5-5	Ⅳ	(2720)	(1420)	30	—	—	—	N-9°-E N-28°-W	土師器無台椀（42）・椀（43）・壺・小甕（44・45）・鍋（46・47）・瓶・有台鉢、黒色土器無台椀（48）・有台椀（49・50）、須恵器無台杯（51～55）・杯蓋（56～61）・台付鉢（62）・有台杯（63～67）・甕（68）・長頸瓶（69）・横瓶・鉢、土器片製円板（70・71）、曲物側板？（72）・不明加工材（73）	—		—		
	水田区画 10	Pp4-1～Pp5-3	Ⅳ	(1560)	(310)	25	—	—	—	N-28°-W	土師器無台椀、須恵器無台杯・甕	—		—		
	溝１	Np2-2～Nq3-4	Ⅴa	(404)	40	19	—	—	Ｕ字形	N-42°-W	土師器無台椀・小甕・長胴甕、須恵器無台杯（81）	—	18・19	20	5	
	溝２	Np2-1～Nq3-4	Ⅴa	(508)	40	24	—	—	Ｕ字形	N-34°-W	土師器無台椀（82）・小甕（83）・長胴甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯（84・85）・甕	溝 15～17、土坑 4、Ｐ 8・9 を切る				
	溝３	Np3-1～Nq3-4	Ⅴa	(351)	28	17	—	—	Ｕ字形	N-33°-W	土師器椀・小甕・長胴甕、須恵器有台杯（86）	溝 15～17 を切る				
	土坑４	Np2-1～Nq3-1	Ⅴa	(214)	103	18	—	—	逆形	N-25°-E	土師器無台椀（87）・小甕・長胴甕（88・89）・鍋、須恵器無台杯（91）・杯（90）・甕	溝 2、Ｐ 3 に切られる		7・8・20		
	土坑５	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	P4-5 に変更
	土坑６	Pp5-3、5-4	Ⅴb	76	45	16	—	—	逆形	N-16°-W	—	土坑７・８を切る	23	23	7	
	土坑７	Pp5-3、5-4	Ⅴb	(124)	121	10	—	—	不整形	N-66°-E	—	土坑６に切られる			—	
	土坑８	Pp5-4	Ⅴb	64	63	8	—	—	不整形	N-27°-E	—	土坑６に切られる			—	
	土坑９	Pp5-4	Ⅴb	(190)	(24)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	溝 10	Nq4-4～Oq1-1	Ⅴb	(766)	80	11	—	—	逆形	N-14°-E	土師器無台椀・小甕（93）・長胴甕・有台鉢（94）・鍋、須恵器無台杯（95）・杯蓋・甕	—	18	23・25	6	

地区名	遺構名	主なグリッド	検出層位	規模（cm） 長軸	短軸	深（最高さ）	畦畔の幅 上幅	畦畔の幅 下幅	断面形状	主軸方向	出土遺物 括弧内は遺物番号	切り合い	挿図 平面	挿図 断面	図面	備考
A	土坑 11	Nq3-2	V b	74	62	7	—	—	皿形	N-26°-W		溝 15 を切る	22	23	6・7	
	土坑 12	Nq3-3 ～ 4-3	V b	140	60	17	—	—	皿形	N-32°-W	土師器無台杯（100）・長胴甕	P 6 に切られる				
	土坑 13	Nq2-3	V b	(30)	26	13	—	—	椀形	N-66°-E	—	溝 14 に切られる				
	溝 14	Nq2-3	V b	135	16	3	—	—	皿形	N-15°-W	土師器無台椀（96）	土坑 13 を切る			6	
	溝 15	Nq2-3 ～ 4-1	V b	(576)	48	10	—	—	椀形	N-33°-E	土師器甕（97）・無台椀・小甕・、須恵器杯（98）	P 9 を切り、溝 1 ～ 3、土坑 11、P 8 に切られる		8・23	7	
	溝 16	Nq2-2 ～ 3-1	V b	(374)	24	7	—	—	皿形	N-35°-E	土師器椀・長胴甕	溝 17 を切り、溝 2・3、P 7 に切られる		23	6・7	
	溝 17	Nq2-2 ～ 4-1	V b	(388)	23	11	—	—	椀形	N-51°-E	土師器小甕・長胴甕（99）、須恵器杯	溝 2・3・15・16、P 8 に切られる				
	溝 18	Nq2-5 ～ 0q1-2	VI	(2150)	245	42	—	—	逆台形	N-15°-E	土師器甕（101 ～ 103・105）・壺（106 ～ 109）・鉢（104・110・111）	流路 2 に切られる	24	8・25	1・8	
	P 1	Nq2-3	V a	30	28	20	—	—	椀形	—	—	—	18・19	20	5	
	P 2	Nq2-4	V a	(36)	28	12	—	—	皿形	—	—	—				
	P 3	Nq2-1、2-2	V a	27	22	11	—	—	皿形	—	—	土坑 4 を切る				
	P 4	Nq2-2	V a	(35)	30	23	—	—	椀形	—	—	P 5 を切る				土坑 5 より変更
	P 5	Nq2-2	V a	(36)	(19)	25	—	—	椀形	—	—	P 4 に切られる				土坑 5 より変更
	P 6	Nq3-2	V b	30	21	15	—	—	椀形	—	土師器長胴甕、須恵器杯	土坑 12 を切る	22	23	7	
	P 7	Nq2-2 ～ 2-3	V b	(37)	35	20	—	—	椀形	—	土師器長胴甕・須恵器杯	溝 16 を切る			6・7	
	P 8	Nq3-2	V b	(16)	19	5	—	—	皿形	—	—	溝 15・P 9 を切り、溝 2 に切られる				
	P 9	Nq3-2	V b	43	27	35	—	—	椀形	—	—	溝 2・15、P 8 に切られる			7	
	流路 1	Oq5-2 ～ Pq5-5	VI	(1830)	(1030)	(30)	—	—	不整形	—	弥生土器壺（112 ～ 114）、土師器椀・甕、須恵器壺	—	24	7・8・12・16・25	8	
	流路 2	Nq3-5 ～ 0q2-1	VI	(1990)	(410)	60	—	—	不整形	N-4°-E	土師器椀・甕・長胴甕、須恵器無台杯（115）・杯蓋（116）・有台杯（117）・壺・横瓶・筒れ鉢（118）	溝 18 を切る		8・25・26		
	流路 3	Nq2-2 ～ 4-1	VI	(745)	(295)	65	—	—	皿形	N-22°-E	—	—		8・25		
B	畦畔 3	0j3-5 ～ 0j11-5	III	(1640)	—	15	93	127		N-75°-E	—	—	13	14	4	
	畦畔 8	0j3-4 ～ Pj3-5	IV	930	—	15	68	116		N-82°-E	土師器無台椀・長胴甕、黒色土器無台椀（74・75）、須恵器無台杯・横瓶、砥石（76）	—	17	17		
	水田区画 5	0j3-4 ～ 0j11-5	III	(1640)	(260)	25	—	—	—	N-75°-E	土師器無台椀・長胴甕、黒色土器無台椀、須恵器壺	—	13	—		
	水田区画 6	0k3-1 ～ 0k5-1	III	(1640)	(920)	25	—	—	—	N-75°-E	土師器無台椀・有台椀（14）・長胴甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯・壺、石製紡錘車（15）	—		—		
	水田区画 11	0j3-3 ～ Pj2-5	IV	(880)	(210)	30	—	—	—	N-82°-E N-53°-W	土師器無台椀・長胴甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯（77）、箆状木製品（78）	—	17	17		
	水田区画 12	0j3-5 ～ 0k1-5	IV	(1640)	(1020)	30	—	—	—	N-82°-E N-53°-W	土師器無台椀（79）・小甕・長胴甕・鍋、黒色土器無台椀、須恵器無台杯・杯蓋・有台杯・壺・瓶、土錘片製円板（80）	—				
	溝 5	Pj1-4 ～ Pk3-2	V a	(800)	105	20	—	—	皿形	N-56°-W	土師器無台椀（92）	—	21	17	6	
	土坑 19	Pk4-3	VI	(75)	85	35	—	—	椀形	N-61°-W		流路 4 を切る	27	27	9	
	流路 4	0j2-4 ～ 0k2-5	VI	(2280)	310	54	—	—	皿形	N-64°-W	土師器無台椀（119 ～ 122）・長胴甕（123）、黒色土器無台椀（124）、須恵器無台杯（125）・有台杯（126）・壺（127）・甕・横瓶	流路 5 を切り、土坑 19 に切られる		10・27	2・9	
	流路 5	0j2-4 ～ Pk5-5	VI	(2005)	600	64	—	—	皿形	N-66°-W	土師器高杯（128）・長胴甕、須恵器無台杯（129）、不明加工板（130）	流路 4 に切られる				

第Ⅳ章　遺　　物

第１節　遺物の記載方法

出土遺物は，すべて遺構ごとにまとめ，「第Ⅲ章　遺構」の記述順序で記載した。また，各遺物の個別情報を載せた観察表（第２～４表）は章末に掲載した。

古代（平安時代）の土器は，はじめに器種分類を行い，器種ごとの形態的・技法的な特徴をまとめて述べ，次の遺物各説ではここから外れる点を中心に説明する。

また，土器の観察・図化・記載にあたっては，以下の点に留意した。

土器の製作には，ロクロを使用するもの（ロクロ成形）とロクロを使用しないもの（非ロクロ成形）とがあり，調整技法にはロクロの回転を利用したものにヘラケズリ・ナデ・ハケメがあり，それぞれロクロケズリ・ロクロナデ・カキメとした。逆に，ロクロの回転を利用しないものは単にヘラケズリ・ナデ・ハケメとした。そのほかの調整技法には，ヘラミガキがある。また，アテ具痕・タタキ目が残るものは，それぞれ同心円文・平行線文などと文様を記載した。

実測図では，ロクロ・回転台による成形・調整は定規を用いた直線，それ以外はフリーハンドで表現した。また，稜は実線，ロクロナデは２箇所で途切れる線，ロクロケズリは１箇所で途切れる線で表現した。

第２節　古代（平安時代）の土器の器種分類

土師器・黒色土器・須恵器には，それぞれ以下の器種が存在する。各器種の部位名は第28図に示した。

Ａ　土師器・黒色土器

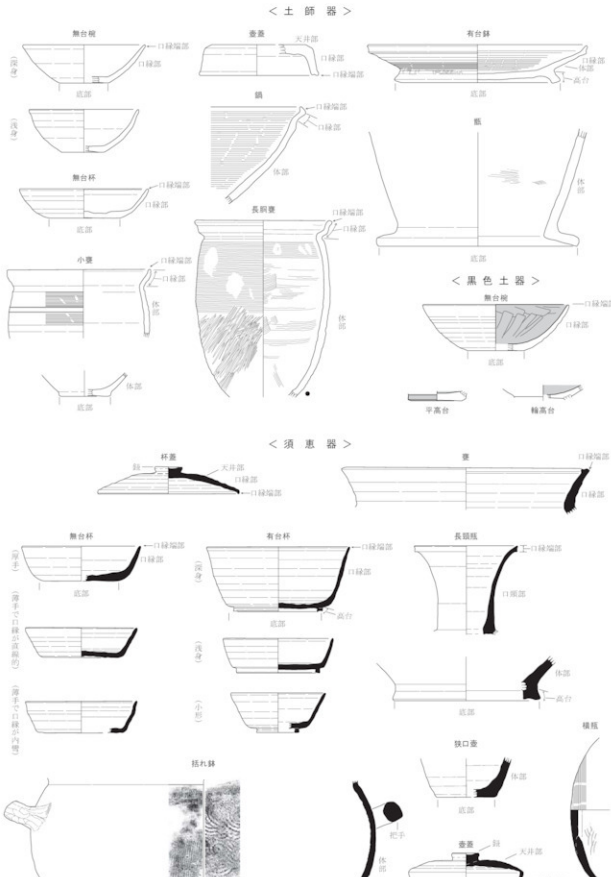
土師器には，無台椀・有台椀・無台杯・壺蓋・小甕・長胴甕・鍋・甑・有台鉢が，黒色土器には無台椀・有台椀がある。

土師器無台椀　口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形である。ただし一部に体部が直線的なもの，口縁端部が僅かに外反するものがある。口径11.4～12.8cm，高さ3.7～5.1cmにおさまる。底部は切り離し不明なもの以外は全て回転糸切り無調整，もしくはロクロケズリ再調整を行うものであり，そのほかはロクロナデされる。体部～底部外面に煤状の炭化物が付着するもの，体部～底部内外面にタール状の付着物がみとめられるもの，底面に墨書（判読不明）がみられるものがある。

土師器無台杯（100・137）　胎土が土師質で，酸化焔焼成であることを除き須恵器無台杯と同じ，いわゆる杯形。口径13.0・13.6cm，高さ3.4・3.1cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ再調整で，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。

土師器壺蓋（143）　土師器短頸壺にともなうとみられる。須恵器にもみられる器形であるが，土師器無台杯（100・137）と同様に胎土・焼成から土師器と考えられる。口径12.4cm，高さ3.3cm。口縁部内外面ヨコナデ，天井部内面指オサエ・外面ロクロケズリ。

土師器小甕　口径15.0～17.2cmにおさまる。整形はほとんどがロクロナデのみであるが，頸部外面にケズリを



第28図　土器の器種分類と部位名称（●印 S=1/6，他 S=1/4）

施すもの，体部上半外面にカキメを施すものもみられる。口縁部の形態には，外反し端部に丸みを持つもの，端部が上方へ屈折するもの，内湾しながら立ち上がり端部が直立気味に上方へ短く屈折するものがみとめられる。内外面に煤状の炭化物が付着するものがある。

土師器長胴甕　口径 18.0 ～ 22.0cm におさまる。整形手法は口縁部内外面ヨコナデ，体部内面ハケメ・ナデ，体部外面上半カキメ・下半平行線文タタキ目が多い。口縁部の形態には，外反し端部に丸みを持つもの，端部がつまみ上げられるもの，端部が上方に引き上げられるもの，端部が上方へ短く屈折するもの，端部が受け口状に立ち上がり外面が樋状にくぼむもの，内屈し端部が丸く収まるものがみられる。内外面に煤状の炭化物が付着するものがある。

土師器鍋　整形は内外面ともカキメ後口縁部ヨコナデ。口縁部の形態には，緩やかな「く」の字状に屈曲し端部がつまみ上げられ丸く収まるもの，緩やかな「く」の字状に屈曲し端部がやや内側向きに丸く収まるもので口縁部外面が強くナデられ稜がつくもの，緩やかな「く」の字に屈曲し端部がつまみあげられ外側が樋状にくぼむものがみられる。体部外面に炭化物が塊状・煤状に付着するものがある。

土師器甑（18・142）　無底式で，体部から底部に向かって屈折し，内外面ハケメ後ナデによって仕上げられるものである。18は，可動式カマドの下部である可能性もある。

土師器有台鉢（94）　体部が緩やかに立ち上がり，口縁端部が上方へ屈折する。端部を外側に僅かに引き出した高台がつく。内外面ともにカキメの後，口縁部がヨコナデされる。

黒色土器無台椀　内面が黒色処理された土師器椀である。口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形。口径15cm 前後・高さ 5cm 前後の小型品と口径 19cm 以上・高さ 7.5cm 以上の大型品がある。全ての個体で体部下端及び底部外面にロクロケズリを行う。内面にヘラミガキが施され，そのほかの部分はロクロナデ。内面に放射状のヘラミガキを施すものもある。

黒色土器有台椀　内面もしくは内外両面が黒色処理された土師器椀である。遺存状態が悪く，いずれも全体の形状がつかめない。12は，口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形。内面が黒色処理され，外面も黒色化し，両面黒色処理を意識している。輪高台がつくと考えられる。49は，輪高台が付き，内面が黒色処理される。体部下端及び底部の外面，高台の破断面にタール状の付着物がみとめられる。50・173は，両面黒色処理され，高さ 0.3cm・0.6cm の削り出しによる低い高台（平高台）がつく。特に 173は，内面に放射状のヘラミガキを施す。施釉陶器の模倣品とみられる。

B　須恵器

無台杯・杯蓋・折縁杯・有台杯・狭口壺・壺蓋・甕・長頸瓶・横瓶・括れ鉢がある。壺・甕・瓶・鉢の分類については北野氏の分類〔北野 1999〕を参考にした。

胎土は，聖籠町山三賀Ⅱ遺跡の調査報告書〔坂井ほか1989〕・坂ノ沢C遺跡の調査報告書〔渡邊ほか2001〕・桑ノ口遺跡の調査報告書〔鶴巻ほか2003〕・新潟市秋葉堂遺跡出土土器の編年案〔春日 2006〕の分類を参考にA群（阿賀北地方の在地産）・B群（佐渡小泊産）・C群（その他）に分類した。

A群：胎土が相対的に粗く，長石・石英・金雲母を多量に含む。器面はざらつき，1㎜を超える大粒の小礫が露出する。焼成は良好な場合と，やや甘く軟質な場合とがある。阿賀野市北部から新発田市南部の五頭山麓（笹神・真木山）窯跡群〔川上 1999，戸根 1986，中川・倉田・岡本・田村 1962，中川・土井・川上 1973〕や新発田市ホーロク沢窯跡〔鶴巻 2001〕・貝屋窯跡〔川上 1982〕・下小中山窯跡〔戸根 1973〕，胎内市松山窯跡群〔伊藤 1997〕などの，周辺の在地窯の製品と考えられる。

B群：胎土が精良で，長石とみられる軟質の白色小粒子を多く含む。きめの細かいものと砂質の強いものがある。

壺・甕・瓶類では，小さな黒色粒子も目立つ。焼成はみな良好で，硬質である。佐渡市小泊窯跡群〔坂井・鶴間・春日 1991〕など佐渡市南西部の窯の製品と考えられる。

C群：A・B群以外の胎土を一括した。長石・石英を少量含み，比較的精良で粘土質の強い胎土（C1群）とシルト質で均質な胎土（C2群）がある。

前者は，岩船郡荒川町元山窯跡〔吉井 1999〕，胎内市松山窯跡群〔伊東 1997〕の一部のほか，新潟市から五泉市にかけての新津（丘陵）窯跡群，後者は，高田平野西部（頸城西部）に点在する須恵器窯跡（群）の製品と考えられる。

須恵器無台杯　口径 11.2 ～ 14.8cm，高さ 2.7 ～ 4.3cm におさまる。体部の開きには大小があり，前者は後者より器壁が薄い傾向がある。底部は基本的に回転ヘラ切り無調整が多いが，ナデもしくはロクロケズリによる再調整を行うものもある。また，体部下半外面もしくは下端外面がロクロケズリされるものがあり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土は，図化した 36 点のうちA群が 18 点，B群が 18 点であり，酸化焔焼成のものが９点，酸化焔焼成気味のものが２点ある。口縁部内外面にタール状付着物がみとめられるものがあり，灯明皿として用いられたと考えられる。底面に墨書（「φ」６点・「φ」？１点・判読不明１点）がみられる。また，底部内外面に煤状の炭化物が付着するものもある。

須恵器有台杯　口径 10.0 ～ 15.2cm，高さ 3.7 ～ 6.9cm におさまる。底部は基本的に回転ヘラ切り無調整だが，ロクロケズリ再調整するものもある。体部下半外面もしくは下端外面にロクロケズリが施されるものがあり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土は，図化した 22 点のうちA群が９点，B群が１１点，C１群が１点，C２群１点であり，酸化焔焼成のものが３点ある。65・157 の底面に墨書（「光」？・「φ」）がみられる。また，口縁部外面に煤状の炭化物が付着するものもある。

須恵器杯蓋　口径 11.2 ～ 17.0cm，高さ 1.8 ～ 3.0cm におさまる。有台杯にともなうと考えられる。鈕が残存するのは７点で，形状は低い擬宝珠形が１点，頂部が広いボタン形１点，中央部が窪むボタン形が５点である。口縁部は端部が直立するもの（６点）・緩く内湾するもの（１点）がみとめられ，断面は丸形（３点）と尖った形（４点）がある。天井部外面にロクロケズリが施されるものがほとんどで，稀に口縁部上半外面まで及ぶ。そのほかはロクロナデによって仕上げられる。天井部内面の摩耗したものがあり，転用硯として用いられた可能性があるが，墨の付着は確認できない。胎土は，図化した 10 点のうちA群が１点，B群が９点。口縁部～体部内面にタール状の付着物がみとめられるものがある。57 は酸化焔焼成気味。

須恵器折縁杯（62）　口径 12.0cm。口縁部が外反した後，端部が内湾する杯で，今回の調査で出土したのはこの１点のみである。阿賀北地方に特徴的に見られる地域色の強い器形〔坂井ほか 1989〕であり，基本的に沼垂郡内の遺跡でのみ消費するためにつくられた可能性〔水澤 2004b〕がある。

須恵器壺（127）　平底の底部。体部は長胴である。また，内部の焼成時の降灰の様子から狭口壺の可能性が高い。底径 6.2cm。

須恵器壺蓋（161）　短頸壺にともなうと考えられる。天井部～体部外面はロクロケズリが施され，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。口縁部は，「く」の字状に屈曲し，中央が窪むボタン状の鈕がつく。胎土はB群である。

須恵器甕（68）　口径 25.4cm の中型品。頸部以下を欠損するが，体部から外反する器形である。口縁端部内面に段を有する。内外面ともロクロナデによって仕上げられる。胎土は，A群である。

須恵器長頸瓶（4・39・69）　39 は口径 11.0cm。体部が円形に刳り抜かれ，口縁部が取り付けられる。長い頸部をもち，口縁部は緩やかに外反し，端部は上下に折り返す。胎土はA群である。69 は底径 15.2cm。端部を外側にひきだした高台がつく。４は，小型品。胎土はB群である。

須恵器横瓶（5・162） 5は頸部～体部の破片で，頸部以上を欠損するが，体部に穴を開け外反する口縁部を取り付けた俵形の器形とみられる。内面同心円文アテ具痕後カキメ，外面平行線文タタキ目。162は体部側面端部の破片であり，円板を側面にあて閉塞する。内面同心円文アテ具痕後ナデ，外面平行線文タタキ目後カキメ。胎土は2点ともA群である。

須恵器括れ鉢（118・163） 口縁部が頸部から「く」の字状に屈曲する（頸部が括れる）器形。口縁部から体部まで内外面ともロクロナデによって仕上げられるもの（118）と口縁部～頸部をロクロナデし，体部内面に同心円文アテ具痕，外面に平行線文タタキ目を残すもの（163）がある。胎土は2点ともA群であり，163には橋状？（半円状）の把手が横位に取り付けられる。

第3節　遺物各説

A　遺構出土の遺物

1）A区Ⅲ層上面遺構出土の遺物

a　水田区画1出土遺物（第29図・図版14・16）

須恵器杯（1） 口径12.2cmで，口縁端部内面が肥厚する。胎土はB群。

須恵器有台杯（3） 底径7.2cm。底部は回転ヘラ切り無調整であり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。酸化焔焼成で，胎土はA群。

須恵器杯蓋（2） 天井部外面はロクロケズリされ，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。天井部内面に摩耗が認められる。胎土はB群である。

須恵器長頸瓶（4） 小型品。口縁端部は短く上につまみあげられる。胎土はB群である。

須恵器横瓶（5） 頸部～体部の破片で，頸部以上を欠損するが，体部に穴を開け外反する口縁部を取り付けた俵形の器形とみられる。内面同心円文アテ具痕後カキメ，外面平行線文タタキ目。胎土はA群である。

著状木製品（6・7） 6は上下両端部を欠く。中央ややや下よりで二つに折損している。表面は面取りされて，稜をもつ。下端部に向かってやや細くなる。7も上下両端部を欠く。6と同様に表面は面取りされて，稜をもつ。下端部に向かってやや細くなる。

不明加工材（8） 全体に面取りなどの加工が施されているが，具体的な用途は不明である。上端部は滑らかな曲面をもつように削られており，下端部は垂直面を成すように切断されている。使用された工具はおそらく鉈と思われる。側面は，一方が上端と同じように滑らかな曲面を呈するように仕上げられているが，反対側は欠損あるいは切断されたと思われる平坦面を呈する。同様に裏面も平坦面を呈するが，意図的な加工によるかどうかは不明である。表面は平滑である。いずれの面の加工痕も表面の磨耗により使用工具や加工方向を観察することは不可能である。

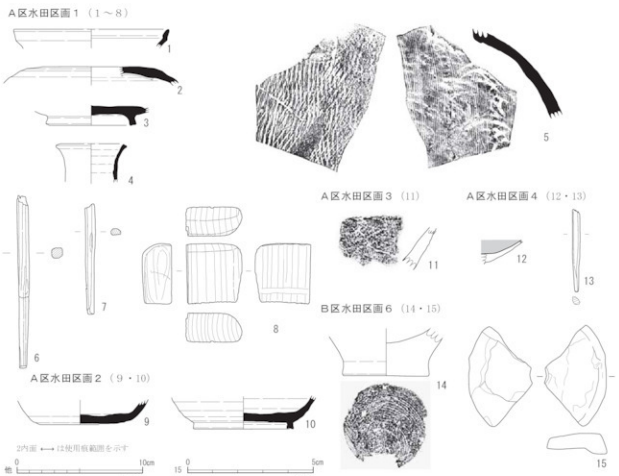
b　水田区画2出土遺物（第29図・図版11・14）

須恵器無台杯（9） 底径7.2cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ再調整であり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。酸化焔焼成で，胎土はA群。底部内外面に煤状の炭化物が付着する。

須恵器有台杯（10） 底径8.0cm。底部は回転ヘラ切り無調整。体部下端外面はロクロケズリされ，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はC1群である。

c　水田区画3出土遺物（第29図・図版14）

弥生土器甕（11） 体部下端。地文（撚りはLR縄文）が施される。詳細な時期は不明。



第29図　A・B区Ⅲ層遺構出土遺物

d 水田区画４出土遺物（第29図・図版16）

黒色土器椀（12）　内面にヘラミガキを施し，黒色処理された土師器椀である。外面も黒色化し，両面黒色処理を意識しているとみられる。外面はロクロナデによって仕上げられる。

箸状木製品（13）　上端部を欠く。下端部は滑らかな曲面を呈する。表面は面取りされて，稜をもつ。断面は楕円形状をなす。下端部に向かってやや細くなる。

2）B区Ⅲ層上面遺構出土の遺物

水田区画６出土遺物（第29図・図版11・16・17）

土師器有台椀（14）　体部はロクロ成形で，高さ1.2cmの高台（いわゆる柱状高台）がつく。底部は回転糸切り無調整である。12～13世紀初頭のものである。

石製紡錘車（15）　約1/4が残存している。復元直径5.6cm・厚さ0.8cm以上・復元孔径0.6cm・重さ6g以上。石材は細砂粒の凝灰岩である。

3）A区Ⅳ層上面遺構出土の遺物

a 水田区画７出土遺物（第30図・図版11・14・16）

縄文土器鉢（16）　棒状工具による平行沈線が施される体部破片。外面に煤状の炭化物が付着する。晩期後半～末葉（大洞A～A'式期併行）のものである。

土師器無台椀（17）　底部は回転糸切り無調整であり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。底径5.2cm。

土師器甑（18）　無底式で，内外面ナデによって仕上げられる。可動式カマドの下部である可能性もある。

須恵器無台杯（19・20）　双方ともロ径 12.1cm，高さ 2.8cm で，底径のみ 19 が 7.0cm，20 が 8.2cm と異なる。底部は 19 が回転ヘラ切り無調整，20 が回転ヘラ切り後ナデ再調整で，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はB群である。

須恵器有台杯（21）　底径 8.6cm。底部は回転ヘラ切り無調整。体部下端外面にロクロケズリを施す。胎土はB群である。

土器片製円板（22）　須恵器甕体部を利用し，その周縁部を加工しておおよそ円形に仕上げたものである。長さ 2.6cm，幅 2.7cm，厚さ 1.1cm，重さ 9g。内面同心円文アテ具痕，外面平行線文タタキ目。

剥片（①）　長さ 5.8cm，幅 4.6cm，厚さ 1.8cm，重さ 25g。石材は珪質頁岩である。

曲物側板？（23）　扁平な板材である。木目に沿って剥いだ後，二次調整を施していないようである。表・裏面ともに非常に平滑であるが，切削痕は認められない。両端部を欠く。片端は抉り込みがあり，幅が細くなっている。曲物側板の綴じ合わせ付近の破片ではないかと推定される。

b　水田区画８出土遺物（第 30 図・図版 11・14・17）

弥生土器甕（24 ～ 27）　24 は口縁部～頸部で，口縁端部及び外面に地文（撚りは LR 縄文）施文後，２本同時施文手法によって，上方から横位区画平行沈線文・連弧文・横位区画平行沈線文が施される。25 は口縁部，26・27 は体部。地文（撚りは LR 縄文）施文後，２本同時施文手法によって，連弧文・菱形文が施される。これらは，後期初頭，天王山式期のものである。

土師器無台椀（28・30）　２点とも底部は回転糸切り無調整であり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。底径は，28 が 4.4cm，30 が 4.8cm。30 の体部～底部内外面にはタール状の付着物がみとめられる。

土師器長胴甕（29）　口径 18.8cm。口縁端部を「く」の字状に内屈させ，端部を丸く収める。

須恵器無台杯（31 ～ 33）　口径 11.9 ～ 13.6cm，高さ 2.9 ～ 3.7cm。底部は回転ヘラ切り無調整のもの（31・33）とナデ再調整のもの（32）がある。33 の体部下端外面がロクロケズリされるほかはロクロナデによって仕上げられる。31 の底面に墨書（「φ」？）がみられる。胎土は 31・33 がB群，32 がA群である。32 は酸化焔焼成，31 は酸化焔焼成気味。

須恵器杯蓋（34）　口径 17.0cm。口縁端部は直立し，断面は丸形である。天井部外面はロクロケズリが施される。胎土はB群である。

須恵器有台杯（35 ～ 38）　口径 10.0 ～ 14.0cm，高さ 4.6 ～ 6.7cm。底部は回転ヘラ切り無調整，35 の体部下端外面がロクロケズリされるほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土は 35・36・38 がA群，37 がB群である。38 は酸化焔焼成。

須恵器長頸瓶（39）　口径 11.0cm。体部が円形に刳り抜かれ，口縁部が取り付けられる。長い頸部をもち，口縁部は緩やかに外反し，端部は上下に折り返す。胎土はA群である。

土器片製円板（40）　須恵器甕体部を利用し，その周縁部を加工しておおよそ円形に仕上げたものである。長さ 2.4cm，幅 1.7cm，厚さ 0.8cm，重さ 5g。内面同心円文アテ具痕，外面平行線文タタキ目。

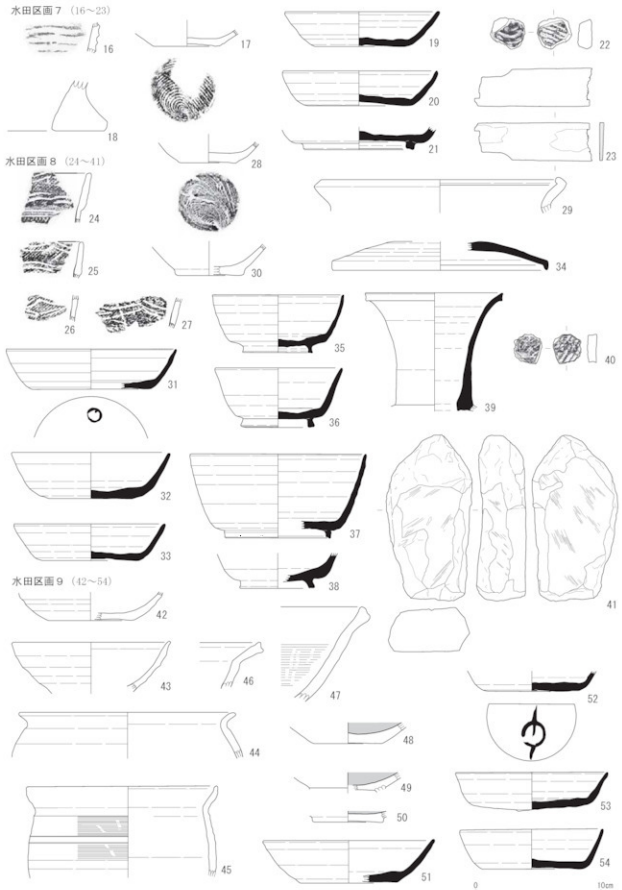
砥石（41）　長さ 13.2cm，幅 6.8cm，厚さ 3.4cm，重さ 510g。砥面は３面で，荒砥とみられる。石材は溶結凝灰岩。

c　水田区画９出土遺物（第 30・31 図・図版 11・14・16・17）

土師器無台椀（42）　底部は回転糸切り無調整で，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。底径 6.6cm。体部下端～底部外面にタール状の付着物がみとめられる。

土師器椀（43）　内外面ともロクロナデによって仕上げられる。口径 12.5cm。

土師器小甕（44・45）　44 は，口径 17.0cm で，口縁端部が「く」の字に外反し，端部が丸く収まるもの，45 は，口径 15.0cm で，口縁部が内湾しながら立ち上がり，端部が直立気味に上方へ短く屈折するものである。45 の体



第30図　A区Ⅳ層遺構出土遺物（１）

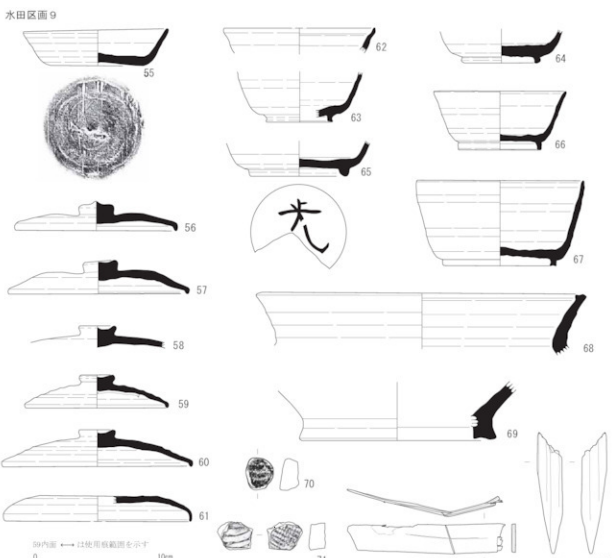
部上半外面にカキメがみられるほかは，内外面ロクロナデによって仕上げられる。

土師器鍋（46・47） 口縁部が緩やかな「く」の字に屈曲し，端部がつまみあげられ，外側が樋状にくぼむもの。47は，体部内外面にカキメが施され，体部中位外面に煤状の炭化物が付着する。

黒色土器無台椀（48） 内面にヘラミガキを施し，黒色処理された土師器椀である。底径5.4cmで，底部外面はロクロケズリされる。

黒色土器有台椀（49・50） 49は，内面にヘラミガキを施し，黒色処理された土師器椀である。底部はナデ再調整。輪高台がつくが，遺存状態が悪く詳細は不明。体部下端及び底部の外面，高台の破断面にタール状の付着物がみとめられる。50は，内外両面を黒色処理された土師器椀である。削り出しによる高さ0.3cmの低い高台（平高台）をもつ。底径5.6cm。施釉陶器の模倣品とみられる。

須恵器無台杯（51～55） 口径11.2～13.5cm，高さ2.9～3.4cm。底部は回転ヘラ切り無調整のもの（52・55）・ナデ再調整のもの（51）・ロクロケズリ再調整のもの（53・54）がある。52は，体部下端外面にロクロケズリを行う。そのほかはロクロナデによって仕上げられる。底面には墨書「φ」がみられる。54は口縁部内面にタール状の付着物がみとめられる。胎土は51～53がA群，54・55がB群である。51は，酸化焔焼成，52は酸化焔



第31図 A区Ⅳ層遺構出土遺物（2）

焼成気味。

須恵器杯蓋（56 ～ 61） 口径 11.2 ～ 15.0cm，高さ 1.8 ～ 3.0cm。鈕が残存するのは 5 点で，低い擬宝珠形（56）と中央部が窪むボタン形（57 ～ 60）がある。口縁部は端部が直立するもの（56・57・59・60）と緩く内湾するもの（61）があり，断面は丸形（56・60）と尖った形（57・59・61）がある。天井部外面はロクロケズリが施され，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。59 は，天井部内面が摩耗している。60 は，口縁部～体部内面にタール状の付着物がみとめられる。61 は，壺蓋の可能性もある。胎土は 57 がＡ群，それ以外がＢ群である。57 は酸化焔焼成気味。

須恵器折縁杯（62） 口径 12.0cm。口縁部が外反した後，端部が内湾する。今回の調査で出土したのはこの 1 点のみである。

須恵器有台杯（63 ～ 67） 口径 10.4 ～ 13.6cm，高さ 4.7 ～ 6.9cm。底部は回転ヘラ切り無調整のもの（63・64・66・67）とロクロケズリ再調整のもの（65）がある。体部下半外面もしくは下端外面にロクロケズリが施され，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。65 の底面に墨書（「光」？）がみられる。胎土は 63・64 がＡ群，65 ～ 67 がＢ群である。

須恵器甕（68） 口径 25.4cm の中型品。頸部以下を欠損するが，体部から外反する器形である。口縁端部内面に段を有し，内外面ともロクロナデによって仕上げられる。胎土はＡ群であり，酸化焔焼成気味。

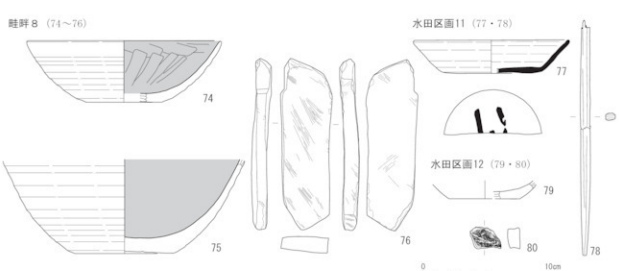
須恵器長頸瓶（69） 底径 15.2cm。端部を外側にひきだした高台がつく。

土器片製円板（70・71） 70 は土師器長胴甕もしくは鍋の体部を，71 は須恵器甕の体部利用し，その周縁部を加工しておおよそ円形に仕上げたものである。70 は長さ 2.6cm，幅 2.2cm，厚さ 1.5cm，重さ 9g。外面に平行線文タタキ目。71 は長さ 2.2cm，幅 2.8cm，厚さ 1.3cm，重さ 10g。内面に同心円文アテ具痕，外面に平行線文タタキ目。

曲物側板？（72） 扁平な板材である。木目に沿って剥いだ後，二次調整を施していないようである。表・裏面ともに非常に平滑であるが，切削痕は認められない。両端部を欠く。中央よりやや端よりに鋭利な刃物による切込みがあり，それを境に屈曲している。この切り込みは曲物側板の内面に見られるケビキの可能性もあり，曲物側板と推定した。

不明加工材（73） 扁平な板材で，上端部と側面をわずかに欠く。下端部は両側面から斜めに切り落とされほぼ逆二等辺三角形状を呈する。表面は摩滅により切削の痕跡は認められない。斎串であろうか。

3）Ｂ区Ⅳ層上面遺構出土の遺物



第32図 Ｂ区Ⅳ層遺構出土遺物

a　畦畔８出土遺物（第 32 図・図版 11・12・16）

黒色土器無台椀（74・75）　内面にヘラミガキを施し黒色処理された土師器椀。口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形。２点とも底部ロクロケズリ再調整で，体部下端外面がロクロケズリされる。

砥石（76）　長さ 13.3cm，幅 4.0cm，厚さ 1.2cm，重さ 115g。砥面は４面で，中砥とみられる。石材は泥岩。

b　水田区画 11 出土遺物（第 32 図・図版 16・17）

須恵器無台杯（77）　口径 12.2cm，高さ 2.7cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ再調整を行う。そのほかはロクロナデによって仕上げられる。底面に墨書（判読不明）がみとめられる。胎土はＢ群である。

箸状木製品（78）　上端部を欠く。ほぼ中央で二つに折損している。表面は面取りされて，稜をもつ。断面は八角形に近い。下端部に向かってやや細くなり，下端は面をなす。

c　水田区画 12 出土遺物（第 32 図・図版 14・16）

土師器無台椀（79）　底部は回転糸切り無調整。底径 5.6cm。底面に墨書（判読不明）がみとめられる。

土器片製円板（80）　土師器長胴甕もしくは鍋の体部を利用し，その周縁部を加工しておおよそ円形に仕上げたものである。長さ 1.7cm，幅 2.5cm，厚さ 1.0cm，重さ４g。外面ケズリ。

4）A区Ｖａ層上面遺構出土の遺物

a　溝１出土遺物（第 33 図・図版 12）

須恵器無台杯（81）　口径 12.2cm，高さ 3.2cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ再調整で，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はＢ群である。

b　溝２出土遺物（第 33 図・図版 14）

土師器無台椀（82）　底部は回転糸切り無調整。底径 6.0cm。体部下端～底部外面に煤状の炭化物が付着する。

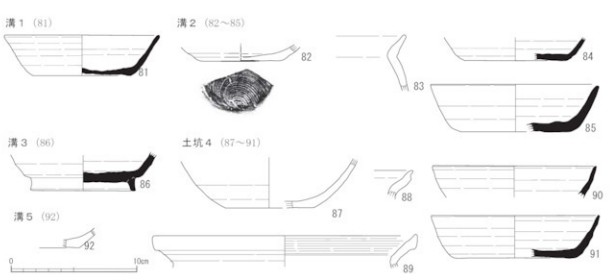
土師器小甕（83）　口縁部は，「く」の字状に外反し，端部に丸みを持つ。頸部外面ケズリ。

須恵器無台杯（84・85）　84 の底部は回転ヘラ切り無調整。85 は，口径 13.2cm，高さ 3.7cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ再調整。そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土は２点ともＡ群である。

c　溝３出土遺物（第 33 図・図版 12）

須恵器有台杯（86）　底径 8.3cm，底部は回転ヘラ切り後ロクロケズリ。体部下端外面がロクロケズリされ，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はＡ群であり，酸化焔焼成。

d　土坑４出土遺物（第 33 図・図版 12・14）



第33図　A・B区Va層遺構出土遺物

土師器無台椀（87）　口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形。底径7.0cm。底部は回転ヘラ切り後ロクロケズリ再調整される。

土師器長胴甕（88・89）　88は口縁部が「く」の字状に屈折し，口縁端部が上方に引き上げられるものである。外面に煤状の炭化物が付着する。89は口縁部が「く」の字状に屈折し，口縁端部がつまみ上げられるもので，口径21.0cm。口縁部内面はカキメ。内外面に煤状炭化物が付着する。

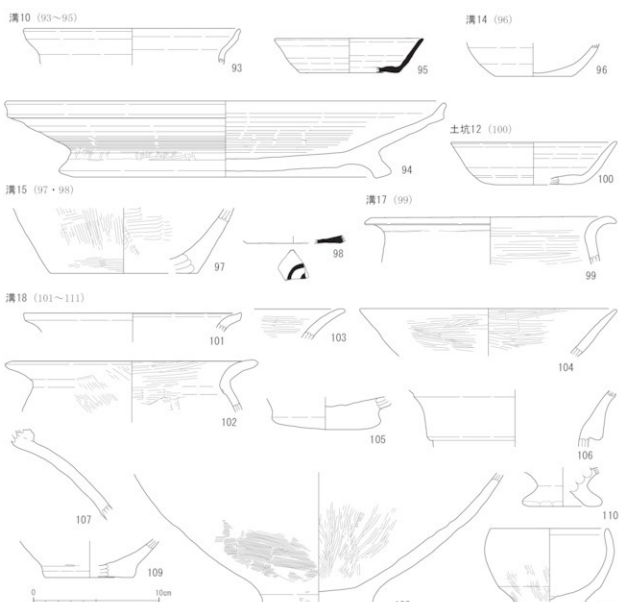
須恵器杯（90）　口径13.0cm，内外面ロクロナデ。胎土はB群である。

須恵器無台杯（91）　口径13.2cm，高さ3.4cm。底部は回転ヘラ切り無調整，体部下端外面がロクロケズリされ，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はA群である。

5）B区Va層上面遺構出土の遺物

溝5出土遺物（第33図・図版14）

土師器無台椀（92）　底部は回転糸切り無調整である。



第34図　A区Vb・VI層遺構出土遺物

6）A区Vb層上面遺構出土の遺物

a　溝10出土遺物（第34図・図版12・14）

土師器小甕（93）　口径17.2cm。口縁端部が上方へ屈折するもので，内外面ともにロクロナデによって仕上げられる。内外面に煤状の炭化物が付着する。

土師器有台鉢（94）　口径34.8cm，高さ6.0cm。体部は緩やかに立ち上がり，口縁端部が上方へ屈折する。端部を外側に僅かに引き出した高さ2.0cmの高台がつく。内外面ともにカキメの後，口縁部がヨコナデされる。高台貼付の際の指オサエが顕著に残り，口縁部～底部内面に煤状の炭化物が付着する。類例に岩船郡荒川町鴨侍遺跡23号溝出土資料，同6号建物付近包含層出土資料〔吉井2002〕などがある。

須恵器無台杯（95）　口径11.8cm，高さ3.2cm。底部は回転ヘラ切り後，ナデ再調整される。そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はB群である。

b　溝14出土遺物（第34図・図版14）

土師器無台椀（96）　底部は回転糸切り無調整。底径6.0cm。

c　溝15出土遺物（第34図・図版14・17）

土師器甕（97）　内外面全面ハケメ。底径11.6cm。

須恵器杯（98）　底部は回転ヘラ切り無調整。底面に墨書（「ゟ」？）がみとめられる。無台杯の可能性大。胎土はB群である。

d　溝17出土遺物（第34図・図版14）

土師器長胴甕（99）　口径18.0cm。口縁部が外反し，端部に丸みを持つものである。内面ハケメ，外面ナデ。外面に輪積痕が残る。

e　土坑12出土遺物（第34図・図版15）

土師器無台杯（100）　口径13.0cm，高さ3.4cm。須恵器無台杯と同じ器形。底部は回転ヘラ切り後ナデ再調整で，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土は土師質で，須恵器を模倣した土器とみられる。

7）A区Ⅵ層上面遺構出土の遺物

a　溝18出土遺物（第34図・図版12・15）

土師器甕（101～103・105）

101は口径17.0cm。口縁部が外反し，端部がつまみあげられる。内外面ともナデ。古墳時代前期中葉のものである。

102は口径20.0cm。口縁部～頸部。頸部が「く」の字状に屈曲し，強く外反する。内外面ともハケメ後口縁端部をナデ。古墳時代前期後葉のものである。103は口縁部が外反する器形。口縁端部が丸く収められている。内外面ともハケメ後口縁端部外面をナデ。内外面とも赤色顔料が塗布される。古墳時代中期のものか。105は底径8.0cm。突出した平底の底部で，外面中央が窪むことから輪台技法を用いて製作されたと考えられる。内外面ともナデ。壺の可能性もあり。古墳時代前期～中期のものか。

土師器壺（106～109）　106は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。二重口縁を作出するために粘土を貼り付けて整形している。内外面ともナデ整形。口縁端部欠損。古墳時代前期後葉のものである。107は頸部～体部上半。体部は球胴と考えられ，頸部に刻み目が入る隆帯が貼り付けられる。内面はナデられ，外面にはヘラミガキが施される。108は底径8.4cm。体部下半～底部。球胴と考えられる体部に，突出した平底の底部がつく。内外面ともハケメの後内面にヘラミガキを施す。107と108は同一個体とみられる。古墳時代前期中葉のものである。109は底径7.0cm。平底の底部。古墳時代前期後葉のものである。

土師器鉢（104・110・111）　104は口縁の開き具合，胎土・調整から有孔鉢の可能性がある。口径20.0cm。口縁部は直線的に開く。内外面ともハケメ後口縁端部をナデ。作りはやや粗い。古墳時代前期中葉のものである。

110は底径6.0cm。（台付）鉢の体部最下部～脚部。整形は粗雑である。体部内面ハケメ，脚部ナデ。時期は不明。111はロ径9.0cm，高さ6.7cm。小型で無頸。内湾する丸い体部に平底の底部がつく。内傾する口縁端部は丸く収められている。内面中央に小さな窪みがある。内面ナデ，外面ハケメ後ナデ。古墳時代前期中葉のものである。

b 流路1出土遺物（第35図・図版15）

弥生土器甕（112～114） いずれも体部破片。地文（擦りはLR縄文）施文後，ヘラ状工具1本描き手法によって，横位区画平行沈線文（113・114）・鋸歯文が施される。後期初頭，天王山式期のものである。

c 流路2出土遺物（第35図・図版12・15）

須恵器無台杯（115） 口径11.6cm，高さ2.9cm。底部は回転ヘラ切り無調整であり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はB群である。

須恵器杯蓋（116） 口径12.3cm，高さ2.7cm。頂部が広いボタン状の鈕をもつ。口縁部は端部が直立し，断面は尖る。天井部外面にロクロケズリが施され，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はB群である。

須恵器有台杯（117） 底径5.4cm。底面は回転ヘラ切り後ロクロケズリ再調整。体部外面はロクロケズリされ，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はB群である。

須恵器括れ鉢（118） 口径23.4cm。口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，口縁端部内面に段を有する。内外面ともロクロナデによって仕上げられる。胎土はA群である。

8）B区Ⅵ層上面遺構出土の遺物

a 流路4出土遺物（第35図・図版12・15）

土師器無台椀（119～122） 底部は回転糸切り無調整で，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。120の体部がやや直線的だが，そのほかは口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形。口径12.0～12.6cm，高さ3.7～5.1cm。121は，全面に黒褐色の膠着物がみられる。

土師器長胴甕（123） 口径20.5cm。口縁端部が上方へ短く屈折する。内外面ロクロナデで仕上げられる。口縁部～頸部内面・頸部外面に煤状の炭化物が付着している。

黒色土器無台椀（124） 内面が黒色処理された土師器椀である。底部はロクロケズリ再調整。口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形で，底径7.6cm。体部下端・底部外面はロクロケズリ。内面は放射状のヘラミガキ。そのほかはロクロナデによって仕上げられる。

須恵器無台杯（125） 口径12.4cm。底部は回転ヘラ切り無調整。体部下端外面はロクロケズリされ，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はB群である。

須恵器有台杯（126） 口径13.4cm。口縁部～体部はロクロナデによって仕上げられる。口縁部外面に煤状の炭化物が付着する。胎土はB群である。

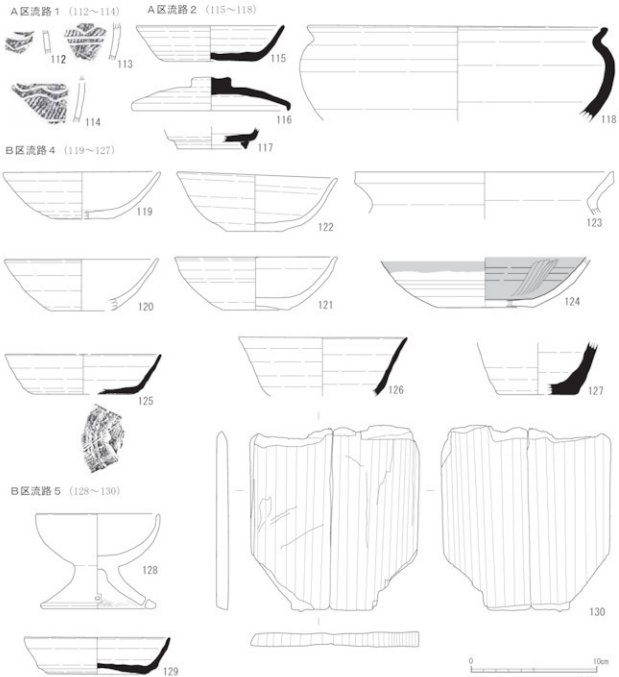
須恵器壺（127） 底径6.2cmの平底で，底部外面はナデ再調整される。体部は長胴になるとみられる。内面に残る焼成時の降灰の様子から狭口壺である可能性が高い。

b 流路5出土遺物（第35図・図版12・13・16）

土師器高杯（128） 口径9.7cm，底径7.6cm，高さ8.4cm。内湾する丸い杯部をもち，口縁端部は丸く収められている。脚部は杯部底から強く外反し，端部を丸く収める。全面に赤色顔料が塗布され，脚部裾部に小孔が1ヶ所穿たれる。古墳時代前期中葉のものである。

須恵器無台杯（129） 口径11.6cm，高さ2.9cm。底部は回転ヘラ切り無調整。体部下端外面はロクロケズリされ，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土はB群である。

不明加工板（130） 上下両端部を欠く。ほぼ中央で縦に左右2つに折損する。ほぼ正方形の下方の二隅を切り取った形状をした柾目板である。上端部は表裏面から斜めに切り取られており，断面形は楔形を呈する。表・裏面と



第35図　A・B区Ⅵ層流路出土遺物

もに平滑になっているが，明瞭な加工痕は確認できない。上端部及び下端部の切断痕は，未製品を示すものなのか，製品を転用する際の再加工痕であるかは不明である。

B　遺構外出土の遺物

1）A区Ⅴa層出土の遺物（第36・37図・図版12・15・17）

弥生土器甕，土師器壺・甕・高杯・無台椀・無台杯・壺蓋・小甕・長胴甕・鍋・甑・有台鉢，須恵器無台杯・有台杯・杯蓋・壺蓋・甕・長頸瓶・横瓶・括れ鉢，土器片製円板，鉄滓が出土しており，それらのうち35点を図化した。**弥生土器甕**（131・132）131は口縁部の破片である。ヘラ状工具1本描き手法によって，連弧文が施される。口縁端部には刻み目が入る。132は，口縁部～体部片（口縁端部を欠く）。地文（撚りはRL縄文，附加条？）施文後，

ヘラ状工具1本描き手法によって，上方から連弧文・平行沈線文が施され，沈線間に押し引き状の不規則な交互刺突文が入る。その下は無文帯。外面に煤状の炭化物が付着する。後期初頭，天王山式期のものである。

土師器甕（133） 口縁部が緩やかに外反する器形。口縁端部は丸く収められている。内外面ともハケメ後口縁端部をナデる。古墳時代前期中葉のものである。

土師器高杯（134・135） 134は，底径9.4cm。脚部は杯部底から直線的に開き，端部は丸く収められる。杯部内面ヘラミガキ，脚部内面ハケメ後ナデ，外面ハケメ後ヘラミガキ。脚部内面に輪積痕が残る。古墳時代前期中葉のものである。135は，中実棒状の脚上部をもつ。杯部内面ナデ，脚部内面ハケメ，外面ヘラミガキ。古墳時代中期のものか。

土師器無台椀（136） 底部は回転糸切り無調整で，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形。口径12.8cm，高さ4.1cm。

土師器無台杯（137） 口径13.6cm，高さ3.1cm。須恵器無台杯と同じ器形。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整で，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。

土師器小甕（138） 口縁部が外反するものである。内外面及び破断面に煤状の炭化物が付着する。

土師器長胴甕（139） 口径22.0cm，残存高28.0cm。口縁部が「く」の字に屈曲し，口縁端部が受け口状に立ち上がり，外面が樋状にくぼむものである。体部は砲弾形で，体部最下部～底部を欠くが，丸底になるとみられる（推定器高30.3cm）。口縁部内外面ヨコナデ，体部内面ハケメ・ナデ，体部外面上半カキメ・下半平行線文タタキ目。外面及び口縁部内面に煤状の炭化物が付着している。

土師器鍋（140・141） 140は，口縁部が緩やかに屈曲し，口縁端部がつまみ上げられ，丸く収まるものである。内外面ともカキメ後口縁部をヨコナデする。 141は，口縁部が緩やかに屈曲し，口縁端部がやや内側向きに丸く収まるもので，口縁部外面が強くナデられ，稜がつく。内外面ともカキメ後口縁部をヨコナデする。体部外面に炭化物が塊状に付着する。

土師器甑（142） 底径21.0cm。無底式で，体部から底部に向かって強く屈折する。内外面ハケメ後ナデによって仕上げられる。

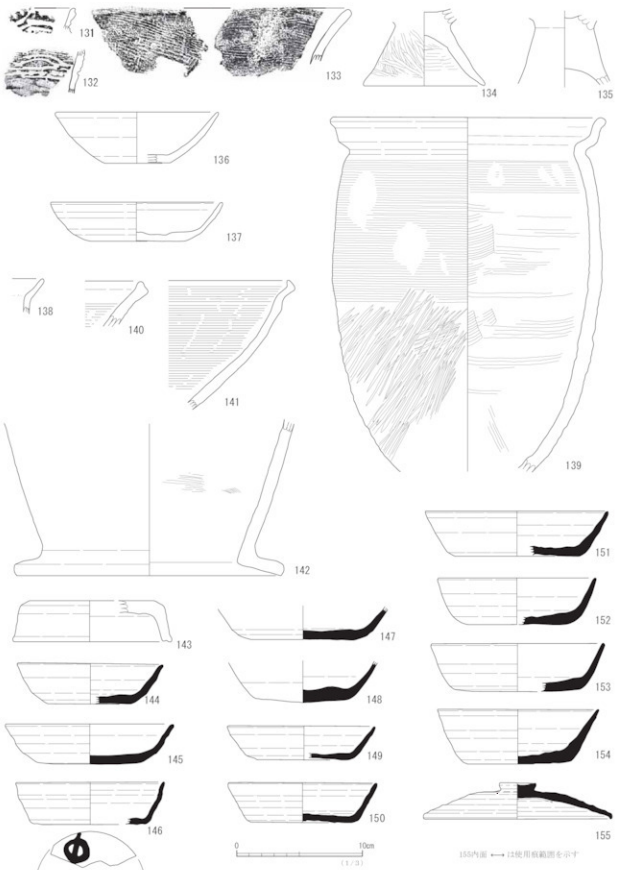
土師器壺蓋（143） 胎土が土師質であるため，酸化焔焼成須恵器ではなく土師器とした。短頸壺にともなうとみられる。口径12.4cm，高さ3.3cm。口縁部内外面ヨコナデ，天井部内面指オサエ・外面ロクロケズリ。

須恵器無台杯（144 ～ 154） 口径11.4 ～ 14.4cm，高さ2.7 ～ 4.3cm。底部は全て回転ヘラ切りだが，切り離し後無調整のもの（149 ～ 151），ナデ再調整を行うもの（144・145・148・152・153），ロクロケズリ再調整を行うもの（146・147・154）がある。体部下半外面及び下端外面をロクロケズリするもの（146・147・154）があるが，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。146 ～ 148の底面には墨書（「φ」）がみとめられる。152の口縁部内外面にタール状の付着物がみられる。胎土は，146・149・150はB群，それ以外はA群であり，144・145・147・148は，酸化焔焼成。

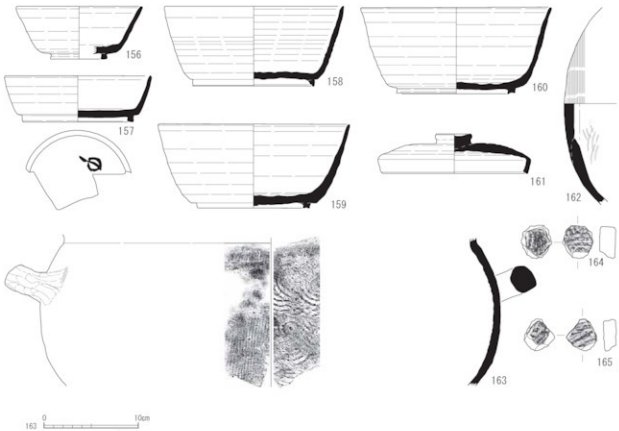
須恵器杯蓋（155） 口径14.6cm，高さ2.9cm。中央部が窪むボタン形の鈕がつく。口縁部は端部が直立するもので，断面は丸形。天井部～体部上半外面はロクロケズリが施され，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。天井部内面が摩耗している。胎土はB群である。

須恵器有台杯（156 ～ 160） 口径10.0 ～ 15.2cm，高さ3.7 ～ 6.7cm。底部は回転ヘラ切り後，157のみがロクロケズリ再調整される。158 ～ 160の体部下端外面にはロクロケズリが施されるが，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。157の底面に墨書（「φ」）がみとめられる。胎土は156がA群，157がC２群，158 ～ 160がB群である。

須恵器壺蓋（161） 口径11.8cm，高さ3.2cm。（球胴）短頸壺にともなうと考えられる。天井部～体部外面はロ



第36図　A区Ⅴa層遺構外出土遺物（1）



第37図　A区Ⅴa層遺構外出土遺物（2）

クロケズリが施され，そのほかの部位はロクロナデによって仕上げられる。口縁部は「く」の字状に屈曲し，中央が窪むボタン状の鈕がつく。胎土はB群である。

須恵器横瓶（162）　体部側面端部の破片であり，円板を側面にあて閉塞する。内面同心円文アテ具痕後ナデ，外面平行線文タタキ目後カキメ。胎土はA群である。

須恵器括れ鉢（163）　頸部が括れる器形。半円状の把手が横位に取り付けられ，ヘラケズリされる。体部内面は同心円文アテ具痕，外面は平行線文タタキ目後カキメ。頸部以上はロクロナデ。胎土はA群である。類例に新潟市中谷内遺跡確認調査3T出土資料〔立木・澤野ほか2005〕などがあるが数は少ない。

土器片製円板（164・165）　須恵器甕体部を利用し，その周縁部を加工しておおよそ円形に仕上げたものである。内面同心円文アテ具痕，外面平行線文タタキ目。164の長さ2.6cm，幅2.4cm，厚さ1.3cm，重さ10g，実165の長さ2.5cm，幅2.5cm，厚さ1.0cm，重さ7g。

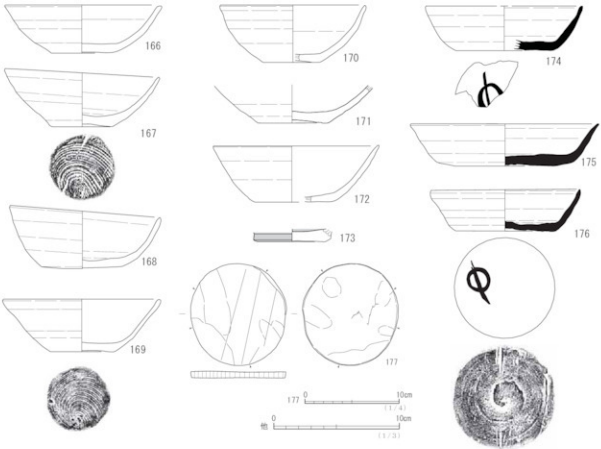
鉄滓（②）　長さ6.2cm，幅4.5cm，重さ47g。表面に砂粒が付着し，部分的に銹状となる。磁着しない。

2）B区Ⅴa層出土の遺物（第38図・図版13・15・17）

土師器無台椀・小甕・長胴甕・鍋，黒色土器無台椀・有台椀，須恵器無台杯・有台杯・杯蓋・甕・瓶，木製品（曲物底板）が出土しており，それらのうち12点を図化した。

土師器無台椀（166～172）　底部はほとんどが回転糸切り無調整（168のみロクロケズリ再調整）であり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。器形は，口縁部から底部に向かって緩く内湾する，いわゆる椀形。169は，体部が直線的であるもの，170は，口縁端部が僅かに外反するものである。口径11.4～13.0cm，高さ3.8～5.0cm。

黒色土器有台椀（173）　内外両面を黒色処理された土師器椀である。底径5.4cm。削り出しによる高さ0.6cmの



第38図　B区Ⅴa層遺構外出土遺物

低い高台（平高台）をもつ。内面は放射状のヘラミガキ，体部下端・底部はロクロケズリが行われる。施釉陶器の模倣品とみられる。

須恵器無台杯（174～176）　口径11.8～14.8cm，高さ3.4～3.5cm。底部は回転ヘラ切り無調整のもの（175）とナデ調整のもの（174・176）があり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。174・176の底面に墨書（「φ」）がある。174の底部外面にタール状の付着物がみとめられる。胎土は174・176がB群，175がA群である。175は酸化焔焼成。

曲物底板（177）　完存品である。ほぼ円形を呈するが，周辺はやや角をもつ。両面とも手斧状の工具によりほぼ平滑に仕上げられている。側面には側板を留める木釘穴が4カ所確認できる。一方の表面には平滑に仕上げた際の加工痕のほかに，線状の傷が3～4本確認できる。底板製作とは無関係な刃物痕と考えられるが，意図は不明である。直径約10cmと小形であることから，柄杓の身の底板であろうか。

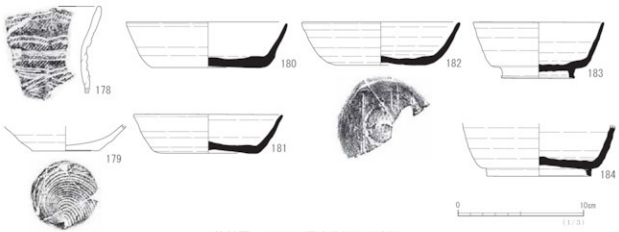
3）A区Ⅴb層出土の遺物（第39図・図版13・15・17）

弥生土器甕，土師器壺・甕・無台椀・長胴甕・鍋，須恵器無台杯・有台杯・杯蓋・甕が出土しており，それらのうち7点を図化した。

弥生土器甕（178）　口縁部～体部。地文（撚りはLR縄文）施文後，2本同時施文手法によって，上方から連弧文・連弧文・横位区画平行沈線文・重菱形文が施される。後期初頭，天王山式期のものである。

土師器無台椀（179）　底部は回転糸切り無調整。底径5.3cm。

須恵器無台杯（180～182）　口径11.9～12.7cm，高さ3.1～3.6cm。底部は回転ヘラ切り無調整のもの（181）とナデ再調整のもの（180・182）があり，そのほかはロクロナデによって仕上げられる。胎土は180がA群，



第39図　A区Vb層遺構外出土遺物

181・182がB群である。180は酸化焔焼成。

須恵器有台杯（183・184）　183の口径10.5cm，高さ4.5cm。底部は回転ヘラ切り無調整。体部下端外面がロクロケズリされるほかは，ロクロナデによって仕上げられる。胎土は183がA群，184がB群である。

第２表　遺物観察表（石製品・土製品・鉄滓）

遺物No.	地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	法量（cm・g） 長・タテ	幅・ヨコ	厚さ	重量	材質	備考	挿図	写真図版
石製品														
15	B	水田区画6	Ok4-5	Ⅲ	石製品	紡錘車	復元径5.6	孔径0.6	(0.8)	6	凝灰岩		29	16
41	A	水田区画8	Pp2-1	Ⅳ	石製品	砥石	13.2	6.8	3.4	510	溶結凝灰岩	3面砥面，荒砥	30	
76	B	畦畔8	Oj4-5	Ⅳ	石製品	砥石	13.3	4.0	1.2	115	泥岩	4面砥面，中砥	32	
土製品（土器片製円板）														
22	A	水田区画7	Np3-3	Ⅳ	土製品	土器片製円板	2.6	2.7	1.1	9	須恵質	須恵器壁転用	30	16
40	A	水田区画8	Op1-4	Ⅳ	土製品	土器片製円板	2.4	1.7	0.8	5	須恵質	須恵器壁転用		
70	A	水田区画9	Oq3-1	Ⅳ	土製品	土器片製円板	2.6	2.2	1.5	9	土師質	土師長胴甕か鍋転用	31	
71	A	水田区画9	Oq5-3	Ⅳ	土製品	土器片製円板	2.2	2.8	1.3	10	須恵質	須恵器壁転用		
80	B	水田区画12	Ok5-4	Ⅳ	土製品	土器片製円板	1.7	2.5	1.0	4	土師質	土師長胴甕か鍋転用	32	
164	A	—	Op1-5	Va	土製品	土器片製円板	2.6	2.4	1.3	10	須恵質	須恵器壁転用	37	
165	A	—	Op2-1	Va	土製品	土器片製円板	2.5	2.5	1.0	7	須恵質	須恵器壁転用		
鉄滓														
①	A	—	Oq3-1	Va	—	鉄滓	6.2	4.5	—	47	—	表面に砂粒付着，部分的に飴状，磁着しない		16
剥片														
①	A	水田区画7	Np2-3	Ⅳ	—	剥片	5.8	4.6	1.8	25	流紋岩	硅質頁岩		16

第３表　遺物観察表（木製品）

遺物No.	地区	遺構	グリッド	層位	器種	法量（cm・g） 長・タテ	幅・ヨコ	厚さ	重量	木取り	遺存状態	備考	挿図	写真図版
6	A	—	Np3-2	Ⅲ層	箸状木製品	(13.7)	0.9	0.8	—	柾目	上下端部欠		29	16
7	A	—	Np3-5	Ⅲ層	箸状木製品	(8.8)	0.8	0.5	—	柾目	上下端部欠			
8	A	—	Np3-4	Ⅲ層	不明加工材	(4.7)	(4.4)	(2.3)	—	柾目	片側面・下端部欠	製品の一部か		
13	A	—	Pp5-5	Ⅲ層	箸状木製品	(6.6)	0.6	0.3	—	柾目	上端部欠			
23	A	—	Nq2-2	Ⅳ	曲物側板？	(9.2)	3.0	0.2～0.3	—	板目	両端部欠	綴じ合せ部付近の破片か	30	
72	A	—	Nq3-1	Ⅳ	曲物側板？	(12.6)	(2.3)	0.1～0.3	—	板目	両端部欠	ケビキ？有り	31	
73	A	—	Nq3-1	Ⅳ	不明加工材	(9.6)	(2.0)	0.4	—	柾目	上端・片側面欠	斎串か		
78	B	—	Oj4-4	Ⅳ	箸状木製品	(18.7)	0.7	0.6	—	柾目	上端部欠		32	
130	B	流路5	Pk4-5	1	不明加工板	(14.6)	13.3	1.2	—	柾目	上下端部欠		35	
177	B	—	Pk4-4	V	曲物底板	10.8	10.2	0.8	—	柾目	完存	側板を留める木釘板4か所有り。柄内か？	38	

第4表　遺物観察表（土器）

※胎土の含有物は長石（長），石英（英），雲母（雲），チャート（チ）と略す。

遺物No.	地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	法量（cm） 口径	底径	高さ	器高指数	底径指数	胎土	遺存率 口縁部	底部	全体	手法 内外面	底部	回転方向	焼成	備考	挿図	写真図版
1	A	水田区画1	Op1-5	Ⅲ	須恵器	杯	12.2	—	(1.5)	—	—	石・長	3/36	—	1/36		—	—	良好	口縁部内面肥厚	29	14
2	A	水田区画1	Np2-4他	Ⅲ	須恵器	杯蓋	—	—	(1.5)	—	—	長・雲	10/36	—	10/36	外：ｺｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	やや不良	転用硯？，内面頂部付近に使用痕		
3	A	水田区画1	Np5-5	Ⅲ	須恵器	有台杯	—	7.2	(1.6)	—	—	石・長・雲	—	36/36	17/36		回転ヘラ切	右	不良	酸化焔焼成		
4	A	水田区画1	Nq2-4	Ⅲ	須恵器	長頸瓶	5.1	—	(3.0)	—	—	石・長	1/36	—	—		—	—	良好	小型		
5	A	水田区画1	Nq2-1	Ⅲ	須恵器	横瓶	—	—	—	—	—	石・長	—	—	—	外：平行線文ﾀﾀｷ目，内：同心円文ｱﾃ具痕後ﾅﾃﾞ	—	—	良好	体部を円形に刳り抜き口縁部を取り付ける，外面自然釉		
9	A	水田区画2	Op2-2他	Ⅲ	須恵器	無台杯	—	7.2	(1.9)	—	—	石・長・雲	—	25/36	12/36		回転ヘラ切後ﾅﾃﾞ	左	不良	酸化焔焼成，底部ヘラキリ後ﾅﾃﾞ後，条線，内外面煤状炭化物付着		
10	A	水田区画2	Op2-5	Ⅲ	須恵器	有台杯	—	8.0	(2.6)	—	—	長・雲	—	21/36	9/36	外：下端ｺｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	右	良好			11
11	A	水田区画3	Op3-2	Ⅲ	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	—	—	石・長・雲	—	—		内：ﾅﾃﾞ，外：地文（LR縄文）	—	—	良好			14
12	A	水田区画4	Pp5-4	Ⅲ	黒色土器	椀	—	—	(1.9)	—	—	石・長	—	—	—		—	—	良好	内面黒色処理，外面黒色化		
14	B	水田区画6	Ok5-4	Ⅲ	土師器	有台椀	—	6.8	(3.8)	—	—	雲・チ	—	36/36	—		回転糸切り	右	やや不良	柱状高台		11・17
16	A	水田区画7	Np2-5	Ⅳ	縄文土器	鉢	—	—	(3.4)	—	—		—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：ヘラ描文	—	—	良好	ヘラ状工具の押し引きによる平行沈線文，外面煤状炭化物付着	30	14
17	A	水田区画7	Np4-1	Ⅳ	土師器	無台椀	—	5.2	(1.3)	—	—	石・長・雲	—	29/36	13/36		回転糸切	左	良好			
18	A	水田区画7	Np2-2	Ⅳ	土師器	瓶	—	—	(4.4)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：ﾅﾃﾞ	—	—	やや不良			11
19	A	水田区画7	Np3-3他	Ⅳ	須恵器	無台杯	12.1	7.0	2.8	23.1	57.9	長・雲	12/36	33/36	22/36		回転ヘラ切	右	良好			
20	A	水田区画7	Nq2-1	Ⅳ	須恵器	無台杯	12.1	8.2	2.8	23.1	67.8	長・雲	16/36	21/36	17/36		回転ヘラ切後ﾅﾃﾞ	左	良好			
21	A	水田区画7	Np2-5他	Ⅳ	須恵器	有台杯	—	8.6	(1.8)	—	—	長・雲	—	16/36	5/36	外：下端ｺｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	左	良好			14
24	A	水田区画8	Op1-4	Ⅳ	弥生土器	甕	—	—	(3.9)	—	—		—	—		内：ﾅﾃﾞ，外：地文（LR縄文）＋ヘラ描文	—	—	良好	平行沈線文・連弧文		
25	A	水田区画8	Op1-4	Ⅳ	弥生土器	甕	—	—	(2.9)	—	—	石・長・雲	—	—		内：ﾅﾃﾞ，外：地文（LR縄文）＋ヘラ描文	—	—	良好	連弧文		
26	A	水田区画8	Op1-4	Ⅳ	弥生土器	甕	—	—	(2.2)	—	—	石・長・雲	—	—		内：ﾅﾃﾞ，外：地文（LR縄文）＋ヘラ描文	—	—	良好	菱形文		
27	A	水田区画8	Op1-4	Ⅳ	弥生土器	甕	—	—	(2.4)	—	—	石・長・雲	—	—		内：ﾅﾃﾞ，外：地文（LR縄文）＋ヘラ描文	—	—	良好	菱形文		
28	A	水田区画8	Op1-2	Ⅳ	土師器	無台椀	—	4.4	(1.7)	—	—	石・長・雲	—	36/36	8/36		回転糸切	右	やや不良			
29	A	水田区画8	Op1-1	Ⅳ	土師器	長胴甕	18.8	—	(2.9)	—	—	石・長・雲	5/36	—	2/36		—	—	良好			
30	A	水田区画8	Nq2-1他	Ⅳ	土師器	無台椀	—	4.8	(2.5)	—	—	長・雲	—	14/36	6/36		回転糸切	右	良好	内外面タール状付着物		
31	A	水田区画8	Np5-2	Ⅳ	須恵器	無台杯	13.6	9.4	3.2	23.5	69.1	石・長・雲	2/36	11/36	5/36		回転ヘラ切	左	不良	墨書「ｏ」，酸化焔焼成気味		17
32	A	水田区画8	Np4-4他	Ⅳ	須恵器	無台杯	12.3	7.2	3.7	30.1	58.5	石・長	6/36	24/36	14/36		回転ヘラ切後ﾅﾃﾞ	左	不良	酸化焔焼成		11
33	A	水田区画8	Oq1-4他	Ⅳ	須恵器	無台杯	11.9	7.6	2.9	24.4	63.9	長	21/36	25/36	23/36	外：下端ｺｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	左	良好			
34	A	水田区画8	Op1-5他	Ⅳ	須恵器	杯蓋	17.0	—	(2.3)	—	—	長・雲	5/36	—	5/36	外：天井ｺｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好			14
35	A	水田区画8	Op1-4他	Ⅳ	須恵器	有台杯	10.4	5.6	4.6	44.2	53.9	石・長・雲	3/36	20/36	11/36	外：下端ｺｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	右	良好			11
36	A	水田区画8	Op1-5	Ⅳ	須恵器	有台杯	10.0	5.7	4.7	47.0	57.0	石・長・雲	14/36	26/36	20/36		回転ヘラ切	左	良好			
37	A	水田区画8	Op1-4他	Ⅳ	須恵器	有台杯	14.0	8.2	6.7	47.9	58.6	長・雲	2/36	14/36	8/36		回転ヘラ切	？	良好			
38	A	水田区画8	Np5-2他	Ⅳ	須恵器	有台杯	—	5.8	(2.8)	—	—	石・長	—	36/36	16/36		回転ヘラ切	左	不良	酸化焔焼成		

遺物No.	地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	高さ	器高指数	底径指数	胎土	遺存率 口縁部	底部	全体	手法 内外面	底部	回転方向	焼成	備考	挿図	写真図版
39	A	水田区画8	Np5-3他	Ⅳ	須恵器	長頸瓶	11.0	—	(9.3)	—	—	石・長・雲	8/36	—	2/36		—	—	良好	体部を円形に刳り抜き口縁部を取り付ける	30	11
42	A	水田区画9	Nq4-1	Ⅳ	土師器	無台椀	—	6.6	(2.3)	—	—		—	18/36	8/36		回転糸切	右	良好	外面タール状付着物		14
43	A	水田区画9	Op5-5	Ⅳ	土師器	椀	12.5	—	(4.0)	—	—	長・雲	5/36	—	2/36		—	—	やや不良			
44	A	水田区画9	Np4-5	Ⅳ	土師器	小甕	17.0	—	3.7	—	—	石・長・雲	4/36	—	2/36	内：ﾅﾃﾞ，外：ﾅﾃﾞ	—	—	やや不良			
45	A	水田区画9	Op2-5	Ⅳ	土師器	小甕	15.0	—	(7.2)	—	—	石・長・雲	10/36	—	4/36	ﾊｹﾒ	—	—	良好			
46	A	水田区画9	Op1-1	Ⅳ	土師器	鍋	—	—	(3.5)	—	—	長・雲	—	—	—		—	—	やや不良			
47	A	水田区画9	Nq5-2他	Ⅳ	土師器	鍋	—	—	(7.6)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ・ｶｷﾒ，外：ﾅﾃﾞ・ｶｷﾒ	—	—	やや不良	外面煤状炭化物付着		
48	A	水田区画9	Nq3-1他	Ⅳ	黒色土器	無台椀	—	5.4	(1.7)	—	—	石・長・雲・焼	—	18/36	8/36	内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	やや不良	内面黒色処理		
49	A	水田区画9	Op3-2	Ⅳ	黒色土器	有台椀	—	—	(1.5)	—	—	長・雲	—	10/36	3/36	内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転糸切後ﾅﾃﾞ	?	良好	内面黒色処理，輪高台，外面タール状付着物		
50	A	水田区画9	Oq1-1	Ⅳ	黒色土器	有台椀	—	5.6	(0.9)	—	—		—	12/36	4/36	内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ	—	—	やや不良	両面黒色処理，平高台		
51	A	水田区画9	Oq3-1他	Ⅳ	須恵器	無台杯	13.5	11.8	3.4	25.2	87.4	石・長・雲	8/36	14/36	8/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	左	不良	酸化焔焼成		
52	A	水田区画9	Nq4-2	Ⅳ	須恵器	無台杯	—	7.4	(1.7)	—	—	石・長	—	18/36	8/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切	?	やや不良	墨書「ｏ」，酸化焔焼成気味		17
53	A	水田区画9	Oq3-5他	Ⅳ	須恵器	無台杯	12.0	9.4	2.9	24.2	78.3	石・長	5/36	35/36	20/36		回転ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	左	やや不良			—
54	A	水田区画9	Op2-5他	Ⅳ	須恵器	無台杯	11.2	8.0	3.2	28.6	71.4	長・雲	23/36	30/36	27/36		回転ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	左	良好			—
55	A	水田区画9	Oq1-3他	Ⅳ	須恵器	無台杯	11.4	7.2	3.0	26.3	63.2	石・長・雲	15/36	35/36	20/36		回転ﾍﾗ切	左	良好	底部ﾍﾗ切後条線，内面タール状付着物	31	11・17
56	A	水田区画9	Op2-5	Ⅳ	須恵器	杯蓋	12.8	—	2.3	—	—	長・雲・海	7/36	—	7/36	外：天井ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	低い擬宝珠状の鈕		14
57	A	水田区画9	Oq1-1他	Ⅳ	須恵器	杯蓋	14.2	—	2.7	—	—	石・長・雲	5/36	—	5/36	外：天井ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	不良	ボタン状の鈕，酸化焔焼成		11
58	A	水田区画9	Op4-4他	Ⅳ	須恵器	杯蓋	—	—	1.8	—	—	石・長・雲	—	—	6/36	外：ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	ボタン状の鈕，		14
59	A	水田区画9	Nq4-1他	Ⅳ	須恵器	杯蓋	11.2	—	2.6	—	—	長・雲	9/36	—	—	外：天井ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	転用硯？，内面頂部付近に使用痕，ﾎﾞﾀﾝ状の鈕		
60	A	水田区画9	Oq1-3他	Ⅳ	須恵器	杯蓋	15.0	—	3.0	—	—	長	16/36	—	16/36	外：天井ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	ボタン状の鈕，内面タール状付着物		11
61	A	水田区画9	Oq1-1他	Ⅳ	須恵器	杯蓋	14.8	—	2.0	—	—	石・長・雲	3/36	—	3/36	外：天井ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	短頸壺蓋の可能性あり		14
62	A	水田区画9	Nq2-4	Ⅳ	須恵器	折縁杯	12.0	—	(2.0)	—	—	長	3/36	—	1/36		—	—	良好			
63	A	水田区画9	Nq4-1他	Ⅳ	須恵器	有台杯	—	5.2	(4.0)	—	—	石・長	—	8/36	3/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切	?	良好			
64	A	水田区画9	Np3-5他	Ⅳ	須恵器	有台杯	—	5.8	(2.2)	—	—	石・長・雲	—	35/36	20/36	外：下半ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切	左	やや不良			11
65	A	水田区画9	Oq1-4	Ⅳ	須恵器	有台杯	—	7.6	(2.8)	—	—	長・雲・海	—	23/36	11/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	左	やや不良	墨書「光」？		11・17
66	A	水田区画9	Np3-5他	Ⅳ	須恵器	有台杯	10.4	6.6	4.7	45.2	63.5	長	13/36	32/36	22/36		回転ﾍﾗ切	左	良好			11
67	A	水田区画9	Nq3-3他	Ⅳ	須恵器	有台杯	13.6	9.0	6.9	50.7	66.2	長・雲・海	5/36	21/36	13/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切	左	良好			
68	A	水田区画9	Nq5-4	Ⅳ	須恵器	甕	25.4	—	(4.8)	—	—		6/36	—	1/36		—	—	やや不良	酸化焔焼成気味		14
69	A	水田区画9	Oq1-3	Ⅳ	須恵器	長頸瓶	—	15.2	(4.6)	—	—	石・長	—	7/36	3/36		—	—	良好	底部破片		11
74	B	畦畔8	Pj2-5	Ⅳ	黒色土器	無台椀	15.2	6.6	4.9	32.2	43.4	長・雲	14/36	12/36	12/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	良好	内黒黒色処理	32	
75	B	畦畔8	Oj3-4他	Ⅳ	黒色土器	無台椀	—	7.9	(7.5)	—	—	長・雲	—	36/36	15/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	良好	内黒黒色処理		12
77	B	水田区画11	Oj5-4	Ⅳ	須恵器	無台杯	12.2	7.8	2.7	22.1	63.9	長・雲	8/36	17/36	12/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	左	良好	墨書		17
79	B	水田区画12	Pj2-5	Ⅳ	土師器	無台椀	—	5.6	(1.1)	—	—	石・長・雲	—	17/36	7/36		回転糸切	?	良好	墨書		14・17
81	A	溝1	Np2-3他	1	須恵器	無台杯	12.2	7.8	3.2	26.2	63.9	石・長・雲	6/36	13/36	8/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	左	良好		33	12
82	A	溝2	Np3-3	1	土師器	無台椀	—	6.0	(1.1)	—	—	石・長・雲	—	14/36	6/36		回転糸切	右	良好	外面煤状炭化物付着		14
83	A	溝2	Np3-2	1	土師器	小甕	—	—	(4.5)	—	—	石・長・雲	—	—	—	外：頸部ｹｽﾞﾘ，ﾅﾃﾞ	—	—	良好			
84	A	溝2	Np3-2	2	須恵器	無台杯	—	8.0	(1.8)	—	—	石・長・雲	—	10/36	5/36		回転ﾍﾗ切	左	良好			
85	A	溝2	Np3-3他	1	須恵器	無台杯	13.2	9.4	3.7	28.0	71.2	石・長	2/36	8/36	4/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	?	良好			
86	A	溝3	Np4-3他	1	須恵器	有台杯	—	8.3	(2.8)	—	—	石・長	—	6/36	3/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	左	不良	高台接合部に「アタリ」の沈線，酸化焔焼成		12・17
87	A	土坑4	Np2-1他	1	土師器	無台椀	—	7.0	(3.9)	—	—	石－長－雲	—	8/36	3/36	内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ？	ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	良好			14

遺物No.	地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	高さ	器高指数	底径指数	胎土	遺存率 口縁部	底部	全体	手法 内外面	底部	回転方向	焼成	備考	挿図	写真図版
88	A	土坑4	Np2-1	1	土師器	長胴甕	—	—	(2.1)	—	—	石・長・雲	—	—	—		—	—	良好	外面煤状炭化物付着	33	14
89	A	土坑4	Np2-1他	2	土師器	長胴甕	21.0	—	(2.5)	—	—	石・長・雲	4/36	—	2/36	内：ｶｷﾒ，外：ﾅﾃﾞ	—	—	良好	内外面煤状炭化物付着		—
90	A	土坑4	No3-5	1	須恵器	杯	13.0	—	(2.5)	—	—	長	3/36	—	1/36		—	—	良好			—
91	A	土坑4	No3-5	2	須恵器	無台杯	13.2	9.4	3.4	25.8	71.2	長・雲	1/36	10/36	5/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切	左	良好			12
92	B	溝5	Pj1-4	1	土師器	無台椀	—	—	(1.6)	—	—	雲	—	—	—		回転糸切	?	良好			14
93	A	溝10	Nq5-3	1	土師器	小甕	17.2	—	(2.9)	—	—	長・雲	3/36	—	2/36		—	—	良好	内外面煤状炭化物付着	34	
94	A	溝10	Nq4-4他	1	土師器	有台鉢	34.8	24.2	6.0	17.2	69.5	石・長・雲	1/36	10/36	5/36	内：ｶｷﾒ・ﾅﾃﾞ，外：ｶｷﾒ・ﾅﾃﾞ	—	—	やや不良	高台貼付け時の指オサエ顕著，内面煤状炭化物付着		12
95	A	溝10	Nq5-3他	1	須恵器	無台杯	11.8	8.6	3.2	27.1	72.9	長・雲	—	10/36	5/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	左	良好			14
96	A	溝14	Np2-3	1	土師器	無台椀	—	6.0	(2.7)	—	—		—	11/36	5/36		回転糸切	右	やや不良			
97	A	溝15	Np3-2	1	土師器	甕	—	11.6	(5.2)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ，外：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	—	—	良好			
98	A	溝15	Np3-2	1	須恵器	杯	—	—	(0.6)	—	—	長・雲	—	5/36	2/36		回転ﾍﾗ切	?	良好	墨書「φ」?，無台杯の可能性高い		17
99	A	溝17	Np3-1他	1	土師器	長胴甕	18.0	—	(4.5)	—	—	石・長・雲	7/36	—	—	ﾊｹﾒ	—	—	良好	外面輪積痕		14
100	A	土坑12	Np3-2	1	土師器	無台杯	13.0	6.0	3.4	26.2	46.1	石・長・雲	12/36	18/36	13/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	右	不良	器形・技法は酸化焔焼成須恵器に近いが胎土が土師質		12
101	A	溝18	Nq2-2	2	土師器	甕	17.0	—	(1.5)	—	—	石・長・雲	6/36	—	2/36	内：ﾅﾃﾞ，外：ﾅﾃﾞ	—	—	良好			15
102	A	溝18	Np5-4他	1	土師器	甕	20.0	—	(4.2)	—	—	石・長・雲	4/36	—	2/36	内：ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ，外：ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	—	—	良好			
103	A	溝18	Nq3-3	2	土師器	甕	—	—	(2.4)	—	—	石・長・雲	—	—		内：ﾊｹﾒ，外：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	—	—	良好			
104	A	溝18	Np4-3	2	土師器	鉢	20.0	—	(3.8)	—	—	石・長・雲	4/36	—	2/36	内：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ，外：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	—	—	良好	有孔鉢の可能性大		—
105	A	溝18	Np4-4	2	土師器	甕	—	8.0	(2.6)	—	—	石・長・雲	—	18/36	8/36	内：ﾅﾃﾞ，外：ﾅﾃﾞ	—	—	良好	壺の可能性あり		15
106	A	溝18	Nq3-1他	2	土師器	壺	—	—	(4.5)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：ﾅﾃﾞ	—	—	良好	二重口縁		12
107	A	溝18	Nq5-4	1	土師器	壺	—	—	—	—	—	石・長・雲・チ	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：ﾍﾗﾐｶﾞｷ	—	—	良好	108と同一個体，頸部に刻目の入る隆帯		15
108	A	溝18	Np5-4	1	土師器	壺	—	8.4	(11.2)	—	—	石・長・雲	—	18/36	8/36	内：ﾊｹﾒ，外：ﾊｹﾒ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	—	—	良好	107と同一個体		12
109	A	溝18	Nq2-4	1	土師器	壺	—	7.0	(2.9)	—	—	石・長・雲	—	16/36	5/36	外：ﾅﾃﾞ，内：ﾅﾃﾞ	—	—	良好			15
110	A	溝18	Np4-3	2	土師器	鉢	—	6.0	(3.1)	—	—	石・長・雲	—	11/36	4/36	内：ﾊｹﾒ，外：ﾅﾃﾞ	—	—	良好	台付鉢の脚部		
111	A	溝18	Np5-3他	1	土師器	鉢	9.0	4.6	6.7	74.4	51.1	石・長・雲	4/36	27/36	14/36	内：ﾅﾃﾞ，外：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	—	—	良好	内面中央に小さな凹み		12
112	A	流路1	Pq5-5	Ⅴb	弥生土器	甕	—	—	(1.9)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：地文(LR縄文)+ﾍﾗ描文	—	—	良好	鋸歯文		15
113	A	流路1	Pq5-5	Ⅴb	弥生土器	甕	—	—	(3.0)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：地文(LR縄文)+ﾍﾗ描文	—	—	良好	平行沈線文・鋸歯文	35	
114	A	流路1	Pq5-5	Ⅴb	弥生土器	甕	—	—	(3.1)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：地文(LR縄文)+ﾍﾗ描文	—	—	良好	平行沈線文・鋸歯文		
115	A	流路2	Nq5-3他	Ⅴb	須恵器	無台杯	11.6	7.4	2.9	25.0	63.8	長・雲	20/36	36/36	24/36		回転ﾍﾗ切	左	やや不良			12
116	A	流路2	Nq5-3他	Ⅳ	須恵器	杯蓋	12.3	—	2.7	—	—	長・雲	4/36	—	3/36	外：天井ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	頂部が広いボタン状の鈕		15
117	A	流路2	Op5-1	Ⅴb	須恵器	有台杯	—	5.4	1.8	—	—	長・雲	—	7/36	2/36	外：ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	良好			
118	A	流路2	Nq5-4他	Ⅴb	須恵器	括れ鉢	23.4	—	(7.5)	—	—	石・長	4/36	—	2/36	ﾅﾃﾞ	—	—	良好			
119	B	流路4	Oj5-5他	2	土師器	無台椀	12.6	4.9	3.7	29.4	38.9	長・雲	5/36	15/36	10/36		回転糸切	右	良好			
120	B	流路4	Pk2-1	1	土師器	無台椀	12.0	4.8	5.1	42.5	40.0	長・雲	13/36	1/36	6/36		?	?	良好			12
121	B	流路4	Oj5-5	2	土師器	無台椀	12.6	5.2	4.3	34.1	41.3	石・長・雲	4/36	27/36	15/36		回転糸切	右	良好	黒褐色の膠着物		15
122	B	流路4	Pk2-1	1	土師器	無台椀	12.6	4.4	4.5	35.7	34.9	長・雲	17/36	36/36	25/36		回転糸切	右	良好			12

遺物No.	地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	高さ	器高指数	底径指数	胎土	遺存率 口縁部	底部	全体	手法 内外面	底部	回転方向	焼成	備考	挿図	写真図版
123	B	流路4	Pk5-5	2	土師器	長胴甕	20.5	—	3.5	17.1	—	石・長・雲	4/36	—	2/36		—	—	良好	内外面煤状炭化物付着	35	15
124	B	流路4	Oj5-5	2	黒色土器	無台椀	—	7.6	(3.9)	—	—	雲	—	12/36	5/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ，内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	良好	内面黒色処理，放射状ﾍﾗﾐｶﾞｷ		
125	B	流路4	Pk5-5	2	須恵器	無台杯	12.4	—	4.2	33.9	—	長・海	2/36	6/36	3/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切	右	良好	底部ﾍﾗ切後条線		—
126	B	流路4	Qk1-5	1	須恵器	有台杯	13.4	—	(4.7)	—	—	長・雲・海	7/36	—	3/36		—	—	良好	外面煤状炭化物付着		15
127	B	流路4	Oj5-5	2	須恵器	壺	—	6.2	(4.1)	—	—	長	—	4/36	—		回転ﾍﾗ切？後ﾅﾃﾞ	?	不良	酸化焔焼成，長胴，狭口壺の可能性大		
128	B	流路5	Pk2-4	2	土師器	高杯	9.7	8.4	7.6	78.4	86.6	石・長・雲	2/36	30/36	15/36	内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ？・ﾅﾃﾞ，外：ﾍﾗﾐｶﾞｷ？・ﾅﾃﾞ	—	—	良好	全面に赤彩，脚部に小孔あり		12
129	B	流路4	Pk3-3他	2	須恵器	無台杯	11.6	7.6	2.9	25.0	65.5	石・長	12/36	18/36	15/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切	左	良好			
131	A	—	Oq3-2	Ⅴa	弥生土器	甕	—	—	(1.8)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：ﾍﾗ描文	—	—	良好	連弧文，口縁端部に刻目	36	15
132	A	—	Oq3-2	Ⅴa	弥生土器	甕	—	—	(3.5)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：地文（RL縄文）＋ﾍﾗ描文	—	—	良好	連弧文・平行沈線文・交互刺突文，外面に煤状炭化物付着		
133	A	—	Np5-3	Ⅴa	土師器	甕	—	—	(4.8)	—	—	石・長・雲	—	—	—	外：体部ﾊｹﾒ	—	—	良好			
134	A	—	Np3-2	Ⅴa	土師器	高杯	—	9.4	(6.1)	—	—	石・長・雲・チ	—	—	3/36	内：ﾊｹﾒ，外：ﾊｹﾒ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	—	—	良好	脚部内面輪積痕		12
135	A	—	Oq5-2	Ⅴa	土師器	高杯	—	—	(5.4)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ，外：ﾊｹﾒ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	—	—	良好			
136	A	—	Np3-1他	Ⅴa	土師器	無台椀	12.8	5.2	4.1	32.0	40.6	長・雲	1/36	16/36	6/36		回転糸切	右	やや不良			15
137	A	—	Np3-4他	Ⅴa	土師器	無台杯	13.6	7.5	3.1	22.8	55.1	石・長・雲	15/36	36/36	24/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	左	やや不良	器形・技法は酸化焔焼成須恵器に近いが胎土が土師質		12
138	A	—	Nq5-3	Ⅴa	土師器	小甕	—	—	(2.8)	—	—	石・長・雲	—	—	—		—	—	良好	内外面・破断面に煤状炭化物付着		15
139	A	—	Np5-4他	Ⅴa	土師器	長胴甕	22.0	—	(28.0)	—	—	石・長・雲	12/36	—	8/36	内：同心円文ｱﾃ具痕後ｶｷﾒ・ﾊｹﾒ，外：上半ｶｷﾒ・下半平行線文ﾀﾀｷ目	—	—	良好	内面口縁・外面口縁～体部下半に煤状炭化物付着		12
140	A	—	Op2-5	Ⅴa	土師器	鍋	—		(3.6)	—	—	石・雲	—	—	—	体部ｶｷﾒ	—	—	やや不良			15
141	A	—	Nq3-2	Ⅴa	土師器	鍋	—	—	(10.3)	—	—	長・雲	—			内：ｶｷﾒ，外：ｶｷﾒ	—	—	良好	外面塊状炭化物付着		—
142	A	—	Nq3-2他	Ⅴa	土師器	甑	—	21.0	(12.5)	—	—	石・長・雲	18/36			内：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ，外：ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	—	—	良好			12
143	A	—	Np5-2他	Ⅴa	土師器	壺蓋	12.4	—	3.3	26.6	—	長・雲	12/36	13/36	11/36	内：天井指ｵｻｴ，外：天井ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	短頸壺蓋，黒斑あり		12
144	A	—	Op2-3	Ⅴa	須恵器	無台杯	11.4	6.6	3.2	28.1	57.9	石・長・雲	5/36	18/36	11/36	下半ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	?	不良	酸化焔焼成		15
145	A	—	Op2-3他	Ⅴa	須恵器	無台杯	13.2	7.9	3.2	24.2	59.9	石・長・雲	3/36	9/36	5/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	?	不良	酸化焔焼成		15・17
146	A	—	Nq3-2	Ⅴa	須恵器	無台杯	12.0	9.0	3.3	27.5	75.0	長・雲	6/36	10/36	7/36		回転ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	左	良好	墨書「φ」		—
147	A	—	Op1-1	Ⅴa	須恵器	無台杯	—	8.0	(2.7)	—	—	長・雲	—				回転ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	左	不良	酸化焔焼成，墨書「φ」，底部ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ後条線		15
148	A	—	Np3-5	Ⅴa	須恵器	無台杯	—	7.5	3.3	—	—	石・長・雲	—	36/36	15/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ？	右	不良	酸化焔焼成，墨書「φ」，底部ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ後条線		15・17
149	A	—	Nq3-2他	Ⅴa	須恵器	無台杯	11.5	7.2	2.7	23.5	62.6	石・長・雲	20/36	35/36	18/36		回転ﾍﾗ切	左	良好			13
150	A	—	Nq3-2	Ⅴa	須恵器	無台杯	11.4	8.0	3.2	28.1	70.2	石・長	14/36	31/36	20/36		回転ﾍﾗ切	左	良好	底部ﾍﾗ切後条線		
151	A	—	Np5-3	Ⅴa	須恵器	無台杯	14.4	10.0	3.6	25.0	69.4	石・長・雲	9/36	13/36	10/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切	左	良好			15
152	A	—	Np5-2他	Ⅴa	須恵器	無台杯	12.4	8.0	3.7	29.8	64.5	石・長	8/36	23/36	12/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	右	やや不良	内外面タール状付着物		13
153	A	—	Nq4-4他	Ⅴa	須恵器	無台杯	13.6	10.0	3.8	27.9	73.5	石・長・雲	14/36	18/36	16/36		回転ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ	左	良好			—
154	A	—	Np3-5他	Ⅴa	須恵器	無台杯	13.0	8.6	4.3	33.1	66.2	石－長	30/36	28/36	25/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	良好			13

遺物No.	地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	高さ	器高指数	底径指数	胎土	遺存率 口縁部	底部	全体	手法 内外面	底部	回転方向	焼成	備考	挿図	写真図版
155	A	—	Op3-4他	Ⅴa	須恵器	杯蓋	14.6	—	2.9	—	—	石・雲	4/36	—	4/36	外：天井～体上半ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	転用硯？，内面頂部付近に使用痕，ﾎﾞﾀﾝ状の鈕	36	13
156	A	—	Op1-2	Ⅴa	須恵器	有台杯	10.0	4.5	4.2	42.0	45.0	石・長	11/36	6/36	8/36		回転ヘラ切	?	良好		37	15
157	A	—	Np2-5他	Ⅴa	須恵器	有台杯	11.5	8.6	3.7	23.5	74.8	石・長	2/36	14/36	8/36		回転ヘラ切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	右	良好	墨書「ｏ」		—
158	A	—	Op2-5他	Ⅴa	須恵器	有台杯	14.2	9.6	6.3	44.4	67.6	長・雲	4/36	11/36	6/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	?	良好			13
159	A	—	Op1-3他	Ⅴa	須恵器	有台杯	15.2	8.8	6.7	44.1	57.9	長・雲	4/36	20/36	10/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	左	良好			13
160	A	—	Op1-3他	Ⅴa	須恵器	有台杯	15.0	9.4	5.9	39.3	62.7	長・雲	7/36	6/36	6/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	右	良好			
161	A	—	Np5-5他	Ⅴa	須恵器	壺蓋	11.8	—	3.2	—	—		20/36	—	20/36	外：天井～体ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	—	—	良好	短頸壺蓋，ボタン状の鈕		
162	A	—	Nq3-3	Ⅴa	須恵器	横瓶	—	—	(3.6)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：同心円文ｱﾃ具痕・ﾅﾃﾞ，外：平行線文ﾀﾀｷ目・ｶｷﾒ	—	—	良好	側面端部を円板で閉塞		15
163	A	—	Nq3-2	Ⅴa	須恵器	括れ鉢	—	—	(16.0)	—	—	石・長・雲	—	—	3/36	内：同心円文ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ，外：平行線文ﾀﾀｷ目	—	—	やや不良	把手付，把手内面指ｵｻｴ，外面ヘラｹｽﾞﾘ		15
166	B	—	Oj5-5	Ⅴa	土師器	無台椀	12.4	5.1	3.8	30.7	41.1	石・長・雲	4/36	31/36	16/36		回転糸切	右	良好		38	13
167	B	—	Pj1-5他	Ⅴa	土師器	無台椀	12.2	4.8	4.2	34.4	39.3	雲	6/36	36/36	21/36		回転糸切	右	良好			
168	B	—	Pk1-5	Ⅴa	土師器	無台椀	11.8	6.3	5.0	42.4	53.4	雲	13/36	18/36	15/36		回転糸切後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	良好			13・17
169	B	—	Oj4-5	Ⅴa	土師器	無台椀	12.4	5.1	4.1	33.1	41.1	石・長・雲	3/36	36/36	18/36		回転糸切	右	良好			15
170	B	—	Oj4-4	Ⅴa	土師器	無台椀	11.4	4.4	4.5	39.5	38.6	長・雲	9/36	23/36	15/36		回転糸切	右	やや不良			13
171	B	—	Oj3-5	Ⅴa	土師器	無台椀	—	5.5	(3.1)	—	—	石・長・雲	—	36/36	17/36		回転糸切	右	やや不良			15・17
172	B	—	Oj4-4他	Ⅴa	土師器	無台椀	13.0	6.0	4.5	34.6	46.1	石・長・雲	11/36	30/36	19/36		回転糸切	?	やや不良			13
173	B	—	Ok3-1他	Ⅴa	黒色土器	有台椀	—	5.4	(1.5)	—	—	石・長・雲	—	36/36	18/36	内：ヘラﾐｶﾞｷ，外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	?	良好	平高台，両面黒色処理，内面放射状ヘラﾐｶﾞｷ		15
174	B	—	Ok5-5他	Ⅴa	須恵器	無台杯	13.5	7.8	3.5	25.9	57.8	長・雲	3/36	1/36	2/36		回転ヘラ切後ﾅﾃﾞ	右	良好	墨書「ｏ」，外面にタール状付着物		17
175	B	—	Pj1-5他	Ⅴa	須恵器	無台杯	14.8	8.0	3.4	23.0	54.1	石・雲	3/36	16/36	18/36		回転ヘラ切	右	不良	酸化焔焼成		13
176	B	—	Pj1-5	Ⅴa	須恵器	無台杯	11.8	7.8	3.4	28.8	66.1	長・雲	36/36	36/36	36/36		回転ヘラ切後ﾅﾃﾞ	右	良好	墨書「ｏ」，底部ヘラ切後条線		13・17
178	A	—	Oq4-1他	Ⅴb	弥生土器	甕	—	—	(6.6)	—	—	石・長・雲	—	—	—	内：ﾅﾃﾞ，外：地文（LR縄文）＋ヘラ描文	—	—	良好	連弧文・平行沈線文・重菱形文	39	15
179	A	—	Np2-4	Ⅴb	土師器	無台椀	—	5.3	(2.1)	—	—	長・雲	1/36	36/36	17/36		回転糸切	右	良好			
180	A	—	Nq5-2	Ⅴb	須恵器	無台杯	12.7	9.0	3.6	28.4	70.9	石・長・雲	2/36	36/36	18/36		回転ヘラ切後ﾅﾃﾞ	右	不良	酸化焔焼成		13
181	A	—	Oq2-3他	Ⅴb	須恵器	無台杯	11.9	7.8	3.1	26.1	65.5	長・雲	4/36	29/36	20/36		回転ヘラ切	左	良好			13・17
182	A	—	Oq3-2他	Ⅴb	須恵器	無台杯	12.4	7.2	3.5	28.2	58.1	長・雲・海	12/36	20/36	15/36		回転ヘラ切後ﾅﾃﾞ	左	良好	底部ヘラ切後ﾅﾃﾞ？後条線		13
183	A	—	Oq4-1他	Ⅴb	須恵器	有台杯	10.5	5.7	4.5	42.9	54.3	長・海	5/36	15/36	10/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	右	良好			13・17
184	A	—	Oq2-3他	Ⅴb	須恵器	有台杯	—	8.2	(4.5)	—	—	長・雲	—	20/36	10/36	外：下端ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	回転ヘラ切	左	良好			13

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　出土須恵器のＸ線回折試験及び化学分析試験

㈱第四紀 地質研究所　井上　巖

Ａ　実験条件

１）　試料

分析に供した試料は第５表胎土性状表に示す通りである。

Ｘ線回折試験に供する遺物試料は洗浄し，乾燥したのちに，メノウ乳鉢にて粉砕し，粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し，表面を洗浄し，乾燥後，試料表面をコーテングしないで，直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し，分析した。

２）　Ｘ線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はＸ線回折試験によった。測定には日本電子製 JDX-8020 Ｘ線回折装置を用い，次の実験条件で実験した。

Target: Cu,　Filter: Ni,　Voltage: 40kV,　Current: 30mA,　ステップ角度：0.02°，計数時間：0.5 秒。

３）　化学分析

元素分析は日本電子製 5300LV 型電子顕微鏡に 2001 型エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置をセットし，実験条件は加速電圧：15kV，分析法：スプリント法，分析倍率：200 倍，分析有効時間：100 秒，分析指定元素 10 元素で行った。

Ｂ　Ｘ線回折試験結果の取扱い

実験結果は第５表胎土性状表に示す通りである。

第５表右側にはＸ線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり，左側には，各胎土に対する分類を行った結果を示している。

Ｘ線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

１）　組成分類

ａ　Ｍｏｎｔ－Ｍｉｃａ－Ｈｂ三角ダイヤグラム

第 44 図に示すように三角ダイヤグラムを１～ 13 に分割し，位置分類を各胎土について行い，各胎土の位置を

第５表　家ノ内遺跡試料胎土性状表

試料	タイプ	組成分類	粘土鉱物および造岩鉱物															備　考		
No.	分類	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	器　種	器　形	時　期
No.1	A	14	20						1317	114	788	72						須恵器	杯	
No.2	A	14	20						2824	49	102	61						須恵器	杯	
No.3	A	14	20						2085	108	497	156						須恵器	杯	
No.4	A	14	20						805	99	930	140						須恵器	杯	
No.5	A	14	20						2396	54	71	92						須恵器	杯	

Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石 Ch：緑泥石 (Ch/Fe　一次反射，Ch/Mg　二次反射)　Qt：石英 Pl：斜長石　Crist：クリストバライト
Mullite：ムライト K-fels：カリ長石　Halloy：ハロイサイト Kaol：カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au：自然輝石 Py: 紫蘇輝石

数字で表した。

Mont，Mica，Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ，別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)，雲母類(Mica)，角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトはMont／Mont＋Mica＋Hb×100でパーセントとして求め，同様にMica，Hbも計算し，三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1～4はMont，Mica，Hbの3成分を含み，各辺は2成分，各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第44図に示す通りである。

b　Mont－Ch，Mica－Hb菱形ダイヤグラム

第45図に示すように菱形ダイヤグラムを1～19に区分し，位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)，雲母類(Mica)，角閃石(Hb)，緑泥石(Ch)の内，a）3成分以上含まれない，b）Mont，Chの2成分が含まれない，c）Mica，Hbの2成分が含まれない，の3例がある。

菱形ダダイヤグラムはMont－Ch，Mica－Hbの組合せを表示するものである。

Mont－Ch，Mica－Hbのそれぞれの X線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので，例えば，Mont／Mont＋Ch×100と計算し，Mica，Hb，Chも各々同様に計算し，記載する。

菱形ダイヤグラム内にある1～7はMont，Mica，Hb，Chの4成分を含み，各辺はMont，Mica，Hb，Chのうち3成分，各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第45図に示すとおりである。

c　化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として，ノーマル法（10元素全体で100%になる）で計算し，化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて$SiO_2-Al_2O_3$図，$Fe_2O_3-TiO_2$図，K_2O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに，土器類を元素の面から分類した。

C　X線回折試験結果

1）タイプ分類

第5表胎土性状表には家ノ内遺跡より出土した須恵器が記載してある。

第6表タイプ分類表に示すように須恵器はAタイプが検出された。

Aタイプ：Mont，Mica，Hb，Chの4成分にかける。

高温で焼成されているために鉱物は分解してガラスに変質している。

第6表　家ノ内遺跡試料タイプ分類表

試料No.	タイプ分類	備考	
		器種	器形
No.1	A	須恵器	杯
No.2	A	須恵器	杯
No.3	A	須恵器	杯
No.4	A	須恵器	杯
No.5	A	須恵器	杯

2）石英（Qt）－斜長石（Pl）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質，土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で，ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり，言い換えれば，各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第40図Qt－Pl図に示すようにQtの強度が小の領域から大の領域にかけて3グループに分類された。

Qt：1－Qtが800～1600，Plが65～115の領域に分布する。

貝屋窯跡とホーロク沢窯跡より出土した須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

Qt：2－Qtが1750～2800，Plが55～110の領域に分布する。

真木山窯跡・貝屋窯跡・ホーロク沢窯跡の須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

Qt：3－Qtが2750～3100，Plが45～70の領域に分布する。

貝屋窯跡・ホーロク沢窯跡・家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

D　化学分析結果

第7表化学分析表には家ノ内遺跡，ホーロク沢窯跡，貝屋窯跡，真木山窯跡より出土した須恵器が記載してある。分析結果に基づいて第F図 SiO_2 － Al_2O_3 図，第G図 Fe_2O_3 － TiO_2 図，第H図 K_2O － CaO 図を作成した。

1）　SiO_2 － Al_2O_3 の相関について

第41図 SiO_2 － Al_2O_3 図を基準として，家ノ内遺跡，ホーロク沢窯跡，貝屋窯跡，真木山窯跡より出土した須恵器はⅠ～Ⅲの3タイプに分類した。

タイプⅠ：SiO_2 が60.5～66.0%，Al_2O_3 が22.5～28.0%の領域に分布する。

ホーロク沢窯跡より出土した須恵器が集中し，貝屋窯・真木山窯・家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

タイプⅡ：SiO_2 が66.0～71.5%，Al_2O_3 が18.0～23.0%の領域に分布する。

貝屋窯跡と真木山窯跡より出土した須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

タイプⅢ：SiO_2 が72.0～75.0%，Al_2O_3 が15.0～19.0%の領域に分布する。

貝屋窯跡より出土した須恵器が集中する。

2）　Fe_2O_3 － TiO_2 の相関について

第42図 Fe_2O_3 － TiO_2 図に示すように，Fe_2O_3 と TiO_2 の領域によって，ホーロク沢窯跡，貝屋窯跡，真木山窯跡より出土した須恵器は1・2の2タイプに分類した。

TiO_2：1－Fe_2O_3 が3.0～8.0%，TiO_2 が0.5～1.5%の領域に分布する。

貝屋窯跡と真木山窯跡より出土した須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

TiO_2：2－Fe_2O_3 が3.5～9.5%，TiO_2 が1.1～1.8%の領域に分布する。

ホーロク沢窯跡より出土した須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

3）　K_2O － CaO の相関について

第43図 K_2O － CaO 図に示すように K_2O の値によって1～3の3グループに分類した。

K_2O：1－K_2O が2.2～3.1%，CaO が0.35～0.60%の領域に分布する。

貝屋窯の須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

K_2O：2－K_2O が2.4～3.3%，CaO が0.2～0.4%の領域に分布する。

貝屋窯跡より出土した須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

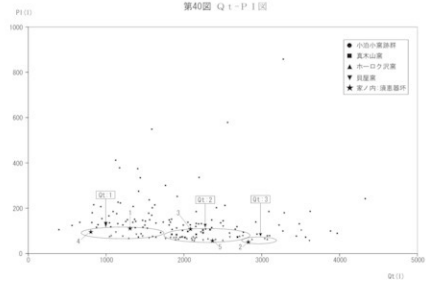
K_2O：3－K_2O が3.0～4.5%，CaO が0.05～0.25%の領域に分布する。

ホーロク沢窯跡と真木山窯跡より出土した須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

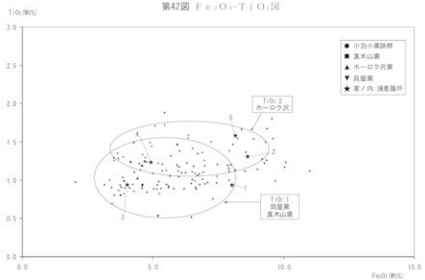
第7表　家ノ内試料化学分析表（単位：%）

試料名	地区	グリッド	遺構	層位	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	Ig.loss	Total	器種	器形	時期
No.1	A区	Np-2・3		Ⅲ層	0.39	0.00	20.55	66.93	2.15	0.38	0.95	0.36	8.02	0.28	100.01	須恵器	杯	
No.2	A区	Np-3・2		Ⅳ層	0.40	0.00	18.45	68.61	2.56	0.21	1.32	0.16	8.63	0.25	99.99	須恵器	杯	
No.3	A区	Nq-4・1		Ⅳ層	0.36	0.00	21.46	70.24	2.40	0.31	0.94	0.31	3.98	0.00	100.00	須恵器	杯	
No.4	A区	Nq-5・1		Ⅳ層	0.74	0.00	20.27	69.89	2.28	0.47	1.24	0.23	4.80	0.07	99.99	須恵器	杯	
No.5	A区	Op-1・2		Ⅴa層	0.00	0.20	23.52	62.47	3.50	0.17	1.59	0.32	8.18	0.04	99.99	須恵器	杯	

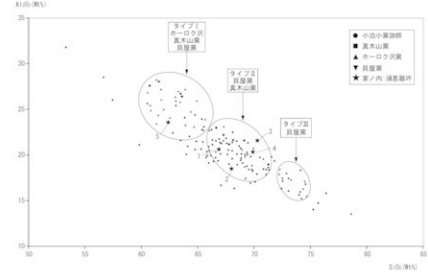
第40図 Ｑｔ－ＰＩ図



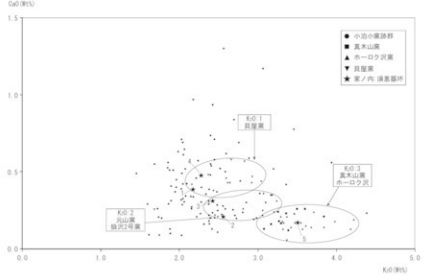
第42図 Ｆｅ２Ｏ３－ＴｉＯ２図



第41図 ＳｉＯ２－ＡｌＯ３図



第43図 Ｋ２Ｏ－ＣａＯ図



E　小泊古窯跡群との対比

第40図Qt－Pl図（小泊古窯跡群対比），第41図SiO_2－Al_2O_3図（小泊古窯跡群対比），第42図Fe_2O_3－TiO_2図（小泊古窯跡群対比），第43図K_2O－CaO図（小泊古窯跡群対比）の各図と対比したが家ノ内遺跡の須恵器は小泊古窯跡群に近い組成を示すものはなく，小泊古窯跡群の須恵器とするのは難しい。

F　まとめ

X線回折試験と蛍光X線分析結果に基づいて，家ノ内遺跡，ホーロク沢窯跡，貝屋窯跡，真木山窯跡より出土した須恵器を第6表タイプ分類表と第8表組成分類表に示すように分類した。

（1）第6表タイプ分類表に示すように，高温で焼成されているため鉱物は分解してガラスに変質しAタイプになっている。

（2）第40図Qt－Pl図に示すように，Qt：1の領域には貝屋窯跡より出土した須恵器が集中し，家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

Qt：2の領域にはホーロク沢窯・貝屋窯・真木山窯と家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

Qt：3の領域にはホーロク沢窯・貝屋窯・家ノ内遺跡の須恵器が共存する。

（3）第8表組成分類表に示すように，家ノ内遺跡の須恵器とホーロク沢窯跡，貝屋窯跡，真木山窯跡より出土した須恵器を組成分類で対比した。貝屋窯跡の須恵器は組成的に貝屋窯1と貝屋窯2に分類される。

「タイプⅠ：Qt－2・Fe_2O_3：2」は家ノ内－5で，ホーロク沢窯跡に対比される。

「タイプⅡ：Qt－1・Fe_2O_3：1」は家ノ内－1，4で，貝屋窯1に対比される。

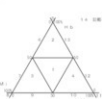
「タイプⅡ：Qt－2・Fe_2O_3：1」は家ノ内－3で，貝屋窯2？に対比される。

「タイプⅢ：Qt－3・Fe_2O_3：2」は家ノ内－2で，貝屋窯2に対比される。

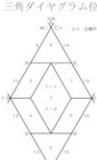
今回分析した家ノ内遺跡の須恵器は貝屋　窯跡の須恵器の組成と類似し，家ノ内－5はホーロク沢窯跡に対比される。

第6表　家ノ内遺跡試料組成分類表

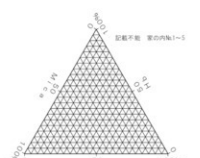
試料No.	タイプ分類	器　種	器　形	対比窯跡
タイプⅠ：Qt－2・Fr203：2				
No. 5	A	須恵器	坏	ホーロク沢窯跡
タイプⅡ：Qt－1・Fr203：1				
No. 1	A	須恵器	坏	貝屋窯跡1
No. 4	A	須恵器	坏	貝屋窯跡1
タイプⅡ：Qt－2・Fr203：1				
No. 3	A	須恵器	坏	貝屋窯跡2？
タイプⅢ：Qt－3・Fr203：2				
No. 2	A	須恵器	坏	貝屋窯跡2



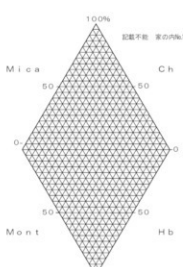
第44図　三角ダイヤグラム位置分類図



第45図　菱形ダイヤグラム位置分類図



第46図　Mo－Mi－Hb三角ダイヤグラム



第47図　Mo－Ch，Mi－Hb三角ダイヤグラム

第２節　種実遺体・木製品の年代測定及び木製品樹種同定

パリノ・サーヴェイ㈱　高橋　敦

本報告では，家ノ内遺跡の発掘調査で出土した種実遺体や杭等の木製品を対象に放射性炭素年代測定を行い，土層や遺構の年代を検討するための資料を作成する。

１）試料

分析試料は，種実遺体４点と杭等の木製品６点の計 10 点である。なお，木製品等については，試料の由来（種類）を確認するため樹種同定を行った。各試料の詳細（樹種同定結果を含む）は，結果とともに第９表に示す。

２）分析方法

a　放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去した。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去，NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行った（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ，１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30 分）850℃（２時間）で加熱した。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにて CO_2 を精製した。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切った。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し，グラファイトを生成した。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mm の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定した。測定機器は，3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC, Pelletron9SDH-2）を使用した。AMS 測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行った。また，測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため，この値を用いて $\delta\ ^{13}C$ を算出した。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用した。また，測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いた。

b　樹種同定

各試料から剃刀の刃を用いて直接各断面から切片を採取した。切片試料は，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入して，プレパラートを作製した。作製したプレパラートは，生物顕微鏡で木材組織を観察し，その特徴から種類を同定した。

第９表　放射性炭素年代測定結果

試料 No.	地区	遺構	グリッド	層位	試料種別	補正年代 BP	$\delta\ 13C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
試料１	A区	水田区画１	Sp-3・3	Ⅲ	オニグルミ（核）	2,150 ± 40	-24.45 ± 0.95	2,150 ± 30	PLN-926701
試料２	A区	水田区画２	Oq-3・4	Ⅲ	スギ	910 ± 30	-25.66 ± 1.02	920 ± 30	PLN-926704
試料３	B区	水田区画５	Pj-3・5	Ⅲ	クリ	870 ± 30	-30.56 ± 0.86	960 ± 30	PLN-926708
試料４	A区	水田区画９	Sq-2・3	Ⅳ	ハンノキ属	910 ± 40	-31.76 ± 0.95	1,020 ± 30	PLN-926702
試料５	A区	水田区画９	Op-1・1	Ⅳ	オニグルミ（核）	1,510 ± 40	-26.53 ± 0.81	1,540 ± 40	PLN-926703
試料６	A区	杭跡４	Pp-5・5	Ⅳ	クリ	700 ± 40	-27.52 ± 0.88	830 ± 30	PLN-926705
試料７	A区	杭跡４	Pp-5・1	Ⅳ	クリ近似種	800 ± 30	-30.54 ± 0.95	890 ± 30	PLN-926706
試料８	A区	水田区画10	Pp-5・5	Ⅳ	クリ	740 ± 40	-31.45 ± 0.79	850 ± 30	PLN-926707
試料９	B区	―	Ok-4・2	Ⅴ	オニグルミ（核）	1,410 ± 30	-28.48 ± 0.82	1,470 ± 30	PLN-926709
試料 10	B区	流路５	Pk-4・5	Ⅰ	オニグルミ（核）	1,240 ± 30	-23.87 ± 0.81	1,220 ± 30	PLN-926710

1) 年代値の算出には，Ｌｉｂｂｙの半減期 5568 年を使用。
2) BP 年代値は，1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の 68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

3）結果

a　放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果は，第 10 表のとおりであった。

なお，暦年較正とは，大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては，本来 10 年単位で表すのが通例であるが，将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，1 年単位で表している。いずれも北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いた。

暦年較正結果は，測定誤差 σ，2 σ 双方の値を表記した。σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲，2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また，表中の相対比とは，σ，2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

b　樹種同定

木製品の樹種同定の結果，針葉樹のスギ（試料 2），落葉広葉樹のハンノキ属（試料 4），クリ（試料 3・6・8），クリ近似種（試料 7）が認められた。なお，試料 7 は観察範囲が狭く，よく似た組織を有するコナラ節の可能性もあるため，ここではクリ近似種と表記するに留めている。

第 10 表　暦年較正結果

試料 No.	補正年代 (BP)		暦年較正年代 (cal)											相対比	Code No.
試料 1	2,154 ± 36	σ	cal	BC	351	–	cal	BC	298	cal	BP	2,301	– 2,248	0.412	PLN-927601
			cal	BC	228	–	cal	BC	222	cal	BP	2,178	– 2,172	0.026	
			cal	BC	210	–	cal	BC	160	cal	BP	2,160	– 2,110	0.471	
			cal	BC	133	–	cal	BC	117	cal	BP	2,083	– 2,067	0.091	
		2 σ	cal	BC	358	–	cal	BC	277	cal	BP	2,308	– 2,227	0.351	
			cal	BC	259	–	cal	BC	91	cal	BP	2,209	– 2,041	0.634	
			cal	BC	71	–	cal	BC	60	cal	BP	2,021	– 2,010	0.015	
試料 2	912 ± 33	σ	cal	AD	1,044	–	cal	AD	1,101	cal	BP	906	– 849	0.590	PLN-927604
			cal	AD	1,119	–	cal	AD	1,143	cal	BP	831	– 807	0.241	
			cal	AD	1,146	–	cal	AD	1,163	cal	BP	804	– 787	0.169	
		2 σ	cal	AD	1,032	–	cal	AD	1,190	cal	BP	918	– 760	0.968	
			cal	AD	1,196	–	cal	AD	1,207	cal	BP	754	– 743	0.032	
試料 3	865 ± 34	σ	cal	AD	1,058	–	cal	AD	1,072	cal	BP	892	– 878	0.968	PLN-927608
			cal	AD	1,155	–	cal	AD	1,220	cal	BP	795	– 730	0.932	
		2 σ	cal	AD	1,045	–	cal	AD	1,094	cal	BP	905	– 856	0.173	
			cal	AD	1,120	–	cal	AD	1,141	cal	BP	830	– 809	0.056	
			cal	AD	1,147	–	cal	AD	1,257	cal	BP	803	– 693	0.771	
試料 4	905 ± 34	σ	cal	AD	1,044	–	cal	AD	1,098	cal	BP	906	– 852	0.536	PLN-927602
			cal	AD	1,119	–	cal	AD	1,142	cal	BP	831	– 808	0.215	
			cal	AD	1,147	–	cal	AD	1,174	cal	BP	803	– 776	0.249	
		2 σ	cal	AD	1,037	–	cal	AD	1,209	cal	BP	913	– 741	1.000	
試料 5	1,512 ± 38	σ	cal	AD	465	–	cal	AD	482	cal	BP	1,485	– 1,468	0.100	PLN-927603
			cal	AD	533	–	cal	AD	607	cal	BP	1,417	– 1,343	0.900	
		2 σ	cal	AD	433	–	cal	AD	494	cal	BP	1,517	– 1,456	0.225	
			cal	AD	505	–	cal	AD	633	cal	BP	1,445	– 1,317	0.775	
試料 6	793 ± 35	σ	cal	AD	1,220	–	cal	AD	1,264	cal	BP	730	– 686	1.000	PLN-927605
		2 σ	cal	AD	1,182	–	cal	AD	1,279	cal	BP	768	– 671	1.000	
試料 7	795 ± 33	σ	cal	AD	1,220	–	cal	AD	1,263	cal	BP	730	– 687	1.000	PLN-927606
		2 σ	cal	AD	1,184	–	cal	AD	1,277	cal	BP	766	– 673	1.000	
試料 8	741 ± 36	σ	cal	AD	1,252	–	cal	AD	1,288	cal	BP	698	– 662	1.000	PLN-927607
		2 σ	cal	AD	1,217	–	cal	AD	1,297	cal	BP	733	– 653	0.997	
			cal	AD	1,374	–	cal	AD	1,376	cal	BP	576	– 574	0.003	
試料 9	1,609 ± 32	σ	cal	AD	411	–	cal	AD	442	cal	BP	1,539	– 1,508	0.374	PLN-927608
			cal	AD	453	–	cal	AD	461	cal	BP	1,497	– 1,489	0.069	
			cal	AD	484	–	cal	AD	532	cal	BP	1,466	– 1,418	0.558	
		2 σ	cal	AD	391	–	cal	AD	540	cal	BP	1,559	– 1,410	1.000	
試料 10	1,236 ± 32	σ	cal	AD	693	–	cal	AD	748	cal	BP	1,257	– 1,202	0.478	PLN-927608
			cal	AD	765	–	cal	AD	783	cal	BP	1,185	– 1,167	0.176	
			cal	AD	788	–	cal	AD	815	cal	BP	1,162	– 1,135	0.234	
			cal	AD	843	–	cal	AD	859	cal	BP	1,107	– 1,091	0.112	
		2 σ	cal	AD	687	–	cal	AD	877	cal	BP	1,263	– 1,073	1.000	

1) 計算には，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 Copyright: 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが，暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，1 桁目を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%，2 σ は 95 % である。
5) 相対比は，σ，2 σ のそれぞれを 1 とした場合，確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第Ⅵ章　ま と め

第１節　古墳時代以前の土器

A　弥生時代後期の土器について

今回の調査で出土した弥生土器は，20 点余りで，いずれも甕の小破片であり，地文のみが施されたものも多い。ここでは，図化した特徴的な部位や文様を残すもの（10 点）について，村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡出土資料にもとづく編年〔野田・滝沢ほか 2003，石川 2004〕との比較からその時期的な検討を加えることとする。

24 ～ 27・178：口縁端部および外面に地文（撚りは LR 縄文）施文後，２本同時施文手法によって，沈線文・連弧文・菱形文あるいは重菱形文を施すものである。これらの特徴は，滝ノ前遺跡３号建物第２層出土の第１群土器の甕に類似するものである。178 は 24・25 とは同一個体ではないものの口縁部の肥厚の度合いや文様の特徴が似ており，同様に滝ノ前遺跡第１群土器に含まれるものであろう。

112 ～ 114 は小破片であるが，同じく文様の特徴などから滝ノ前遺跡第１群土器に含まれるものではないかと考える。

131 と 132 は口縁端部に刻み目が入り，体部は地文（撚りは RL 縄文，附加条？）施文後，ヘラ状工具１本描き手法によって，連弧文・沈線文が施され，沈線間に押し引き状の不規則な交互刺突文が入り，その下が無文帯となるものである。これらの特徴から，砂山遺跡における第４群に相当するものではないかと考えられる。

これらは，すべて弥生後期初頭，天王山式期のものであり，特に 178 にみられる重菱形文は，日本海側の天王山式期の土器の特徴の１つ〔田中 1988〕である。また，132 にみられる押し引き状の不規則な交互刺突文を退化形態とみるならば（新潟市歴史文化課渡辺朋和氏御教示），131・132 は，ほかの８点よりやや後出である可能性がある。これらを野田氏・石川氏の編年にあてはめ，まとめると第 11 表となる。

砂山式２期〔石川 2004〕になると，阿賀北地域において砂山式１期〔石川 2004〕までの遺跡立地の中心であった砂丘上のみならず周辺の平野部・丘陵部・山間部といった様々な場所へと遺跡が拡がり，数も急増する〔野田 2006〕という。今泉川によって形成された自然堤防および接する沖積低地に位置する本遺跡の出土資料も，その流れを裏付けるものであろうか。

B　古墳時代前期の土師器について

今回の調査で出土した古墳時代前期の土師器は，残存状態が悪いものの，形態の特徴をとらえられるものがあり，11 点（完形に復元できるもの２点を含む）を図化した。

ここでは，川村浩司氏による上越地方を中心とした編年（川村 2000，以下川村編年と呼ぶ）と比較してその時期を検討する。

第 11 表　弥生時代中期末葉～後期初頭の編年

時　期	野田ほか（2003）	石　川　（2004）		本遺跡出土資料遺物番号
中　期	砂山３群	砂山式１期	天王山式 1a 期（和泉段階）	—
後　期			天王山式 1b 期（能登段階）	—
	砂山４群	砂山式２期	天王山式２期（天王山段階）	24 ～ 27・112 ～ 114・131・132・178

１）前期中葉（川村編年３・４段階）の資料

甕（101・133）：101 は小破片であるが口縁部形態からが外反し，端部がつまみあげられ，シャープな端面をも

つ。内外面ともに丁寧なナデが施されている。川村氏の器種分類（川村 1993，以下略す）甕A類に類するものであろうか。133 とともに口縁部破片であり，体部を伴わないため時期決定は難しいが，101 は口縁端部の特徴，133 は口縁の開き方，内外面の調整などからこの時期のものとしたが，川村編年５段階まで下可能性もある。

鉢（104・111）：104 は，粗製で，内面口縁端部付近まで粗いハケメ調整を施しているなど後出的な様相もみられるため，５段階まで下る可能性もある。111 は内湾する丸い体部に平底の底部がつく，小型無頸のもの。胎土と全体の調整から精製の鉢H類に属するものであろうが，口縁端部は比較的雑である。４段階に属するものであろうか。

壺（107・108）：同一個体とみられる。体部が球胴で，頸部に刻み目が入る隆帯が貼り付けられ，突出した平底の底部がつくもの。隆帯のつくりなどからこの時期に属するものと推定した。

高杯（128・134）：128 は小型のもの，内湾する丸い杯部と杯部底から強く外反する脚部をもつもの。全面に赤色顔料が塗布され，脚部裾部に小孔が１ヶ所穿たれる。穿孔の意味は不明である。高杯B類の小型のものであろうか。杯部の器形，脚部内面の整形は隣接する野中土手付遺跡Ⅶ層出土のもの〔春日・滝沢ほか 2004〕と類似する。134 は脚部内面の整形は 128 に近く同時期のものであろうか。

２）前期後葉（川村編年５・６段階）の資料

全てA区溝 18 出土資料である。

甕（102）：この時期と推定したが，さらに新しくなる可能性もある。

壺（106・109）：106 は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し，二重口縁を有する壺であり，壺H類に相当するものであろうか。109 は平底の底部であるが，底部中央がわずかに凹むことからこの時期と推定される。

これらを川村編年にあてはめてまとめると第 12 表となる。

川村編年３段階になると，阿賀北地域において川村編年２段階の遺跡立地の中心であった砂丘上から周辺の沖積低地へと遺跡が拡がり，数も増加する傾向（野田・野水 2005）が指摘されており，今泉川によって形成された自然堤防の西に広がる沖積低地に位置する本遺跡の出土資料もそれを裏付けるものといえようか。

第２節　古代の土器

今回の調査では古代の土器はⅢ～Ⅴ層から出土しており，中世以降と考えられる水田遺構等により攪乱を受けていると考えられる。そのため層位による時期的な区分の検討はできないため，出土土器の類別を行い春日真実氏の研究〔春日 1999〕をもとに，詳細な時期を検討することにする。

土師器　　器種は第Ⅳ章第２節に述べたように土師器には無台椀・有台椀・無台杯・壺蓋・小甕・長胴甕・鍋・瓶・有台鉢がある。無台椀には身の浅いⅠ類（器高指数で 29～34）と深いⅡ類（同じく 39 以上）の２種に分類できる。Ⅰ類には，119・121・122・136・166・166・167・169・172 がある。Ⅱ類には 120・168・170 がある。前者の中ではさらに，口縁部がやや内彎しながら開くA類（119・121・122・166・167）と，直線的に開くB類（136・169・172）がある。Ⅱ類にも底径が小さいものと（120・170）やや大きなもの（168）がある。これらは細かな差異は認められるものの，口径の大きさなどからすべて春日

第 12 表　古墳時代前期中葉～後葉の編年

時　期	新潟（上越）	本遺跡出土資料 遺物番号
前期中葉	川村編年３段階	101・104・107・108・111・128・133・134
	川村編年４段階	
前期後葉	川村編年５段階	102・106・109
	川村編年６段階	

編年（以下略す）Ⅵ期に属するものと考えられる。出土位置でみると 119 ～ 122 はＢ区流路４，166 ～ 170 はＢ区Ⅴａ層，136 がＡ区Ⅴａ層の出土である。一見，Ⅴａ層以下で出土したように見えるが，口縁部まで復元できなかった無台椀にはⅣ層出土のものも多くみられる。

有台椀はⅢ層出土の１点（14）のみである。器形などから 12 ～ 13 世紀初頭に属するものと考えられる。

無台杯は２点出土した（100・137）。第Ⅳ章で述べたように，器形・製形技法は須恵器無台杯と共通しているが，胎土が土師質であり，焼成も酸化焔焼成である。おそらく同時期の須恵器を模したものであろうと考えられ，100 は比較的厚手と器形からⅣ～Ⅴ期に属するものと考えられる。137 はやや薄手で，直線的に口縁部が立ち上がることなどから，佐渡小泊産の須恵器を模したものと考えられる。Ⅴ期に属するものであろう。100 はＡ区土坑 12，137 はＡ区Ⅴａ層から出土したものである。

壺蓋は１点（143）のみである。土師器無台杯と同様，成形技法などから土師器と考える。類例がなく所属時期は不明である。

小甕は口縁部破片のみ出土した（44・45・83・93）。45・93 は口縁部の特徴からⅥ期に属するものと考えられる。44･83 は頸部の括れ，口縁端部の成形からやや古くなりⅣ期あるいはⅤ期の古い段階に属するものであろう。44・45 はＡ区水田区画９で出土し，83 はＡ区溝２，84 はＡ区溝 10 で出土した。

長胴甕は 29・88・89・99・123・139 である。139 は全体の器形が分かる例である。それ以外は口縁部の破片である。口縁部の特徴から３種に分類することが出来る。口縁端部を「く」の字状に内屈させるもの（29）をＡ類，口縁部が「く」の字状に屈折し，口縁端部が上方に引き上げられるもの（88・89・123・139）をＢ類，口縁部がゆるく外反し，口縁端部に丸みをもつもの（99）をＣ類とする。Ｂ類に分類した 88・89 は端部に面をもつことなどからⅤ～Ⅵ期に属するものと考えられる。一方，139 は口縁端部に丸みをもたせて上方に引き上げていることなどからⅥ期に属するものと考えられるが，カキメが体部上半部全面にみられることからやや古い要素も残している（新潟県埋蔵文化財調査事業団春日真実氏の御教示）Ａ類はＢ類より口縁端部の成形にやや古い要素が認められ，Ⅳ～Ⅴ期に属するものであろうか。99 は時期不詳である。出土位置は 29 がＡ区水田区画８，88・89 がＡ区土坑４，99 がＡ区溝 17，123 がＢ区流路４，139 がＡ区Ⅴａ層である。

鍋は 46・47・140・141 である。すべて同様の器形であるが，141 のみ口縁部外面が強くなでられていることにより，稜がついている。口縁部の形態からおそらくⅤ～Ⅵ期に属するものであろう。46・47 はＡ区水田区画９，140・141 はＡ区Ⅴａ層の出土である。

甑は 18・142 である。類例が多くみられないため，詳細な時期は不明である。

有台鉢は１点（94）のみである。岩船郡荒川町鴨侍遺跡〔吉井 2002〕などに類例がみられるが，脚部が本遺跡例は非常に短い。Ⅴ～Ⅵ期に多くみられるものである（春日真実氏の御教示）。

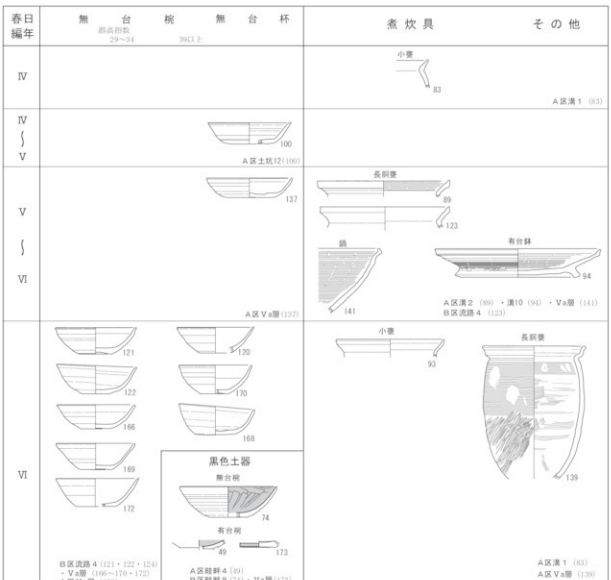
黒色土器　　黒色土器には無台椀と有台椀がある。

無台椀は 48・74・75・124 がある。比較的残りが良い 74・75 の身の深さ，口径に比して底径が小さいことからⅥ期に属するものであろう。また 48 は底径の大きさからほぼ同じ時期と考えられる。124 も同じくⅥ期に属するものであろうか。48 はＡ区水田区画７，74・75 はＢ区畦畔８，124 はＢ区流路４出土である。

有台椀は 49・50・173 である。49 のみ輪高台で，他は平高台である。平高台の２点はいずれも内外両面黒色処理を行っている。これらのことからⅥ期に属するものと考えられる。輪高台の 49 の時期は不詳であるが，高台の付くものはⅤ期には少ないことからⅥ期の可能性が高い。

須恵器　　須恵器には無台杯・杯蓋・折縁杯・有台杯・壺（狭口壺）・壺蓋・甕・長頸瓶・横瓶・括れ鉢に分けられる。胎土はＡ・Ｂ・Ｃ１・Ｃ２の４群に分けられる。

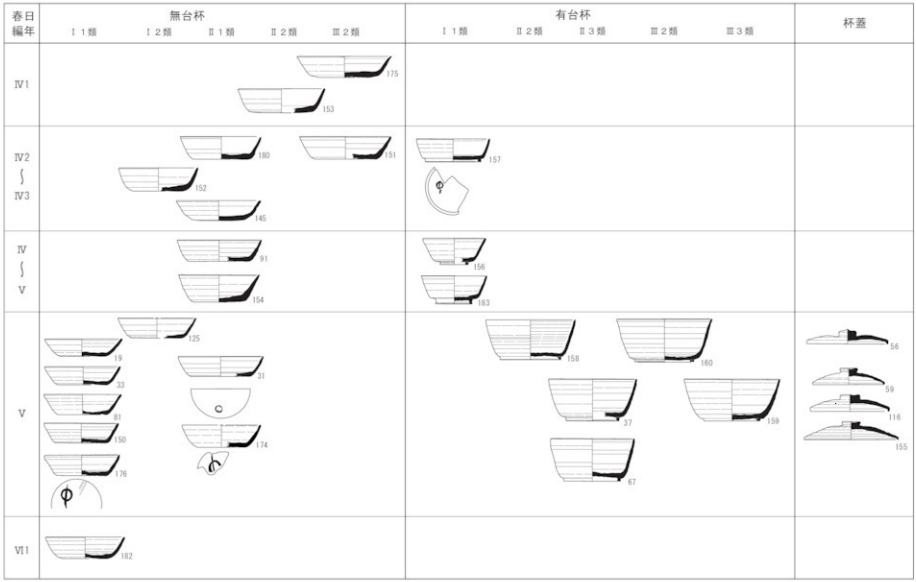
無台杯 40 点以上出土しており，古代土器の主体を占めるものである。胎土はＡ群とＢ群がみられる。口径と



第48図　古代土師器・黒色土器編年図（94・139：S=1/8，他：1/6）

器高により次のような細分類が可能である。口径が11～12㎝前後のⅠ類，13㎝前後のⅡ類，14～15㎝のⅢ類。器高が3㎝前後の1類，4㎝前後の2類。分類可能な資料28点の内Ⅰ1類が半数の14点を占め（19・20・33・53・77・81・95・115・129・146・149・150・176・181・182），以下Ⅰ2類は3点（32・125・152），Ⅱ1類は8点（31・51・85・91・145・154・174・180），Ⅱ2類は1点（153），Ⅲ1類は1点（175）のみである。Ⅲ2類は2点（151・175）である。Ⅰ1類・Ⅰ2類・Ⅱ1類には胎土にA・B群ともみられる。ただし，Ⅰ1類では1点（53）を除きすべてB類であり，Ⅱ1類では2点（31・174）がB群で，他はA群であるという偏りを示している。Ⅱ2類・Ⅲ2類にはA群しか確認できないが，これは資料数が少ないためであると思われる。

Ⅰ1類はほぼ佐渡小泊産と考えられ，口径に比較して，器高が低く，また底径もやや小さく口縁部の立ち上がりが鋭角的となることからⅤ期に属するものと考える。ただ，182のみ口縁部の立ち上がりに後出的な様相がみられ，Ⅵ－1期に下るものとみられる。A区水田区画7～9・11，溝1・10，流路2，B区流路4とA・B区のⅤ層から出土した。Ⅰ2類はⅠ1類に比べやや身が深く，Ⅳ期後半～Ⅴ期の範囲に含まれるものであろう。A区水田区画8，B区流路4，A区Va層から出土した。Ⅱ1類はやや厚手のものが多く，口縁部の立ち上がりもや



第49図　須恵器主要器形編年図（S=1/6）

や緩やかであることから大半がⅣ期後半～Ⅴ期に属するものと思われる。胎土がB群の31・174については口縁部の立ち上がりにやや後出的な様相もみられ，Ⅴ期に属する可能性もある。A区水田区画9，溝2，土坑4とA・B区のⅤ層から出土した。Ⅱ2類（153）は厚手であるが，Ⅱ1類と比べ口縁部の開きが大きく古い様相をもつもので，Ⅳ1期に属するものであろう。A区のⅤa層から出土したものである。Ⅲ2類（151・175）は比較的厚手であるが，151の器形はⅠ1類に類似しており，Ⅳ2～Ⅳ3のものと思われる。175は比較的厚手であるものの，口縁部が端部付近で急に薄くなり若干外に開く特徴をもつことから，Ⅳ1期のものと考えられる。A・B区のⅤa層から出土した。

なお，31・52・77・146・147・148・174・176の底部には墨書があり，77が不鮮明であることを除き，すべて「φ」である。

杯蓋は2・34・56～61・116である。口縁端部の確認できるもの（34・56・57・59～61・116）は折り返しの形状は61を除きほぼ同様な形状をしている。また鈕の形状では56がやや低い擬宝珠形を呈するものとボタン形のものの2種がある。61は下小中山窯出土遺物〔戸根1973〕にもみられる形態であり，古い要素をもつが，それ以外のものはⅤ期に属するものと考える。胎土は57のみA群で，他はB群である。出土位置は，2のみA区Ⅲ層の水田区画出土で，他のものはA区Ⅳ層の水田区画出土である。

有台杯は無台杯に次ぎ多く出土した。口縁部まで残存している資料が比較的少ないものの，器高が約10～11cmのⅠ類，13～14cmのⅡ類，約15cmのⅢ類に細分できる。また，器高で3～5cm弱のⅠ類，6cm前後の2類，約7cmの3類に細分できる。Ⅰ1類（35・36・66・156・157・183）は口径・器高からⅣ期後半～Ⅴ期に属するものと考えられる。胎土はA・B群とC2群が認められる。C2群のもの（157）は頸城西部地方産と推定される（春日真実氏の御教示）。A区水田区画8・9，Ⅴa・b層から出土した。Ⅱ2類（158）・Ⅱ3類（37・67）・Ⅲ2類（160）・Ⅲ3類（159）は，口径・器高の大きさからⅤ期に属するものと考えられる。胎土はB群である。A区水田区画8・9・Ⅴa層から出土した。口縁部が欠損していたために細分類を行えなかった86は，高台が薄く比較的高く立つものであり，Ⅳ1期まで遡るものであろう。A区溝3から出土した。

なお，65・157の底部には墨書が認められ，65は「光」とも読める文字で，157は「φ」という記号である。

他の器形，折縁杯・壺・壺蓋・甕・長頸瓶・横瓶・括れ鉢については出土点数が少なく，時期を推定できるものはなかった。括れ鉢は他遺跡の類例も少ないが，特に163は把手の付く特徴的なもので，新潟市中谷内遺跡でも出土しており〔立木・澤野ほか2005〕遺跡の性格と関係するものかどうか注目すべき資料である。

以上，種類別・器種別に時期的な検討を加えてきた。出土層位と時期との関係に注目すると初めに述べたが，分析の結果，必ずしも層位と時期との整合性はもっていないことが明らかとなった。その理由としては，古代以降の水田耕作による影響が大きいのではないかと考えられる。出土遺物の時期は，Ⅳ～Ⅵ期と幅をもつが，出土量からみてⅤ～Ⅵ期が中心といえる。その時期の遺物の多くは，本来存在したであろう集落の中心部から自然流路などの影響で流れ込んで再堆積した遺物である可能性が非常に強く，家ノ内遺跡の主体をなすと考えられる9世紀中葉～10世紀初頭にかけての集落の本体は別の地点に想定される。

本調査時のA区最終面の地形から，旧地形が西から東に向かって傾斜していること，また，試掘調査での遺物の出土量が西の方が多いという傾向が確認されていることなどから，想定される家ノ内遺跡の主体となる集落は，今回の調査地西方の現在水田が広がる旧微高地上に存在するのではないかと推定される。

第3節　Ⅲ・Ⅳ層水田遺構について

Ⅲ・Ⅳ層で確認された水田区画に伴う畦畔跡に沿うようにして並んでいた杭について，水田遺構の時期を推定

するために年代測定を実施した。その分析結果は第Ⅴ章第２節のとおりであるが，その分析結果と今回の調査で出土した土器の年代観などを比較検討して杭の性格を考える。

まず出土土器については 12 ～ 13 世紀初頭まで下る土師器（14）が１点出土したものの，それ以外には古代末～中世にかけての遺物は全く見られない。

分析された杭は，年代測定の結果では最も古くて 11 世紀の中頃，新しいものでも 13 世紀初頭という年代値だが，すべて比較的樹皮に近い位置から採取したサンプルによる測定結果であり，大きな誤差は考えられない。また，杭であることを考えれば伐採年代とのずれはほぼ無いと考えられる。杭の性格であるが，西側の畦畔６の南端付近で検出された杭（40 ～ 43）に関しては，少なくとも畦畔を意識したものではなく、また水田区画に稲干し台などの構造物として打ち込まれたものでもないようであり，性格は不明である。一方，東側の杭（１～ 40）は畦畔４に沿って検出され，明らかに畦畔を意識したものであるといえる。若干のずれがあるものの概ね２列とみられる。同時期例ではなく単純に比較することはやや問題があるが，静岡県登呂遺跡などでは，畦畔の際に杭を打ち込みその内側に横板をはわせ土止めをしていた跡がみつかっている。今回は横板などの杭に伴う付属物は確認されておらず，なおも用途・性格の検討は必要である。

Ⅲ・Ⅳ層で確認された水田区画は，同層出土の遺物の年代観よりは新しい古代末～中世初頭以降のものと考えられる。また，同時代の遺物が出土していないなど生活痕が残されていないということは，当時の集落地からは離れた水田であったと考えれば決して不思議な事ではない。また，前節で述べた，層位的な出土を示さない土器の様相についても，自然流路による影響ばかりではなく水田耕作による攪乱の結果とも考える事が出来る。

第４節　家ノ内遺跡の性格について

前節のⅢ・Ⅳ層水田遺構に関わる検討を踏まえ，家ノ内遺跡の古環境と性格について出土遺物などから次のようにまとめることが出来る。

①３世紀末葉以前：Ⅵ層堆積後，今泉川によって形成された自然堤防に接する（本調査区を含む）部分一帯に自然流路（Ａ区流路１，Ｂ区流路５）が形成される（形成の開始時期は不明）。度々氾濫を繰り返し，低湿な状態が続いた。

②３世紀末葉～４世紀中葉（古墳時代前期）：この時期になり，Ａ区東側の標高のやや高い部分と低湿な部分を区切り，排水をも意図した溝 18 が掘られる。しかし溝内の堆積土の大部分が砂であることからも明らかなように，その機能は充分ではなかったようである。すぐに埋没してしまい復旧されることはなかった。

③４世紀中葉～８世紀後葉：Ａ区溝 18 の埋没後，新たな自然流路（Ａ区流路２・３，Ｂ区流路４）の形成と氾濫とが繰り返され，また低湿な状態がしばらく続いたと考えられる。

④８世紀後葉～ 10 世紀初頭：自然流路（Ａ区流路１～３，Ｂ区流路４・５）の氾濫もようやく収束し，粘土質の土壌（Ａ区Ⅴａ・Ⅴｂ層，Ｂ区Ⅴａ層）によって埋没し，あるいは埋没の過程で湿地化（ヨシ属植物が繁茂？）し，この粘土質の土壌（Ａ区Ⅴａ・Ⅴｂ層，Ｂ区Ⅴａ層）た。Ⅴａ・Ⅴｂ層は，平安時代（８世紀後葉～ 10 世紀初頭）を主とした遺物を包含する。これらの遺物は該期の集落の中心部から自然流路などの影響によって流入・再堆積したものであると考えられる。明治期の地形図（第 51 図）・第２次世界大戦直後に撮影された空中写真（図版 10）において今泉川の両岸に自然堤防が存在していることは明瞭にみてとれる。その形成は，古い時期まで遡ると考えられ，この自然堤防上に本遺跡の主体となる集落が存在するのではないかと推定される。

⑤ 10 世紀初頭～ 13 世紀初頭：（ヨシ属植物によって形成された腐植土層を利用し？）水田が耕作された（Ａ・Ｂ区Ⅳ層水田跡）。またＡ区溝１～３および溝 15 ～ 17 はほぼ等間隔で平行し，始まりが同一位置であることか

ら畑跡にともなう耕作痕（佐藤 1998）である可能性が高いことからまた，A区東側の一段高い部分で畑作が営まれたと推定される。

⑥中世（13 世紀初頭～近世？）：Ⅳ層水田跡から連続する水田（A・B区Ⅲ層水田跡）が経営された。B区Ⅲ層水田跡水田区画 6 からこの水田跡の年代を推定できる柱状高台をもつ土師器有台椀（12 ～ 13 世紀初頭）が出土した。

⑦近世？～現代：昭和 33（1958）年，当地に加治川小学校が建設され，校庭が造成（A・B区Ⅰ層盛土）されるまで，水田（A・B区Ⅱ層水田跡）耕作と洪水による耕作の放棄，復旧が断続的に行われたと考えられる。

引用・参考文献

赤塚次郎　1990 「Ｖ考察」『堀間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター

阿部朝衛　1989 「新潟県阿賀野川以北の古墳時代前期」『北越考古学』第２号　北越考古学研究会

荒井　格ほか　2004 『富沢遺跡－第 131 次発掘調査報告書－』 仙台市教育委員会

荒川隆史ほか　2000 『青田遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川日出志　2004 「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』 明治大学史學地理學会

飯坂盛泰・霜島正道ほか　2002 『蔵ノ坪遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

家田順一郎　1981 『曽根遺跡Ⅰ』 新潟県豊浦町教育委員会

――　1982 『曽根遺跡Ⅱ』 新潟県豊浦町教育委員会

伊東　崇　1997 『松山窯跡』 新潟県黒川村教育委員会

宇野隆夫　1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集　国立歴史民俗博物館

大熊　孝　1979 「信濃川治水の歴史」『アーバンクボタ』No.17　久保田鉄工株式会社

尾崎高宏ほか　2001 『正尺Ａ遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

小田由美子ほか　2006 『滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

加治川村誌編さん委員会編　1986 『加治川村誌』　新潟県加治川村

春日真実　1999 「第４章２節　土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院

――　2004 「第Ⅳ章　２土師器」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会

――　2006 「新潟市釈迦堂遺跡出土土器について－越後における平安時代土器編年に関する予察－」『吉岡康暢先生古希記念論集』 吉岡康暢先生古希記念論集刊行会

――・井上　巌　2001 『棹子谷窯跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

――・滝沢規朗ほか　2004 『野中土手付遺跡』 新潟県加治川村教育委員会

川上貞雄　1982 『貝屋須恵窯址』 新潟県加治川村教育委員会

――　1997 『曽根遺跡Ⅲ』 新潟県豊浦町教育委員会

――　1999 『志村山須恵窯址』 新潟県豊浦町教育委員会

川村浩司　1989 「越後の古代集落の素描―遺跡の類型とその展望―」『新潟考古学談話会会報』第３号　新潟考古学談話会

――　1993 「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第２号　新潟大学環日本海地域比較史研究会

――　2000 「上越市の古墳時代の土器様相―関川右岸下流を中心に―」『上越市史研究』第５号　新潟県上越市

――　2003 『古墳出現期土器の研究』 高志書院

北野博司　1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』第８号　北陸古代土器研究会

小林　弘　2004 「第Ⅲ章　３五頭山麓窯跡群」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会

笹沢正史　2004 「第Ⅳ章　１須恵器生産の概要」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会

坂井秀弥ほか　1989 『山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所

――・川村浩司　1993 「古墳出現前後における越後の土器様相－越後・会津・能登－」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ

――・鶴間正昭・春日真実　1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古学』第２号　新潟県考古学会

坂野井給里・宮内信雄ほか　1989 『デト山遺跡発掘調査報告書』 新潟県柴雲寺町潟県教育委員会

佐藤甲二　1998　「畑跡の畝間と耕作痕について－仙台市域の考古学的事例から－」『人類学集報 1998』 東京都立大学
――　1999　「水田跡に関する擬似畦畔Ｂと連続耕作－仙台市富沢遺跡の事例から－」『人類学集報 1999』 東京都立大学
――ほか　1988　『富沢遺跡－第 28 次発掘調査報告書－』 仙台市教育委員会
嶋田仁志　2005　『野中土手付遺跡第２次』 新潟県加治川村教育委員会
関　雅之・本間信昭　1981　『真木山製鉄遺跡』 新潟県豊浦町教育委員会
滝沢規朗　2005　「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現　第１分冊』 新潟県考古学会
田嶋明人　1986　「考察―諏町遺跡出土土器の編年的考察」『諏町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
立木宏明・澤野慶子　2005　『神ノ羽遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 新津市教育委員会
田中　靖　1988　「北陸地方における天王山式系土器について」『新潟考古学談話会会報』第２号
鶴巻康志　1998　『市道関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ　山王遺跡１・２次調査　松橋遺跡　岡塚館跡』 新発田市教育委員会
――　2001　「新発田市ホーロク沢窯跡採集の須恵器」『北越考古学』第 12 号　北越考古学研究会
鶴巻康志ほか　2003　『桑ノ口遺跡』 新発田市教育委員会
寺崎裕助ほか　2005　『西川内北遺跡・西川内南遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
戸根与八郎　1973　「新潟県北蒲原郡加治川村下小中山の須恵窯址」『越佐研究』第 33 集　新潟県人文研究会
――　1986　「付編二　生産遺跡　真木山窯跡群」『新潟県史』通史編１原始・古代　新潟県
中川成夫・倉田芳郎・岡本　勇・田村晃一　1962　『新潟県北蒲原郡における二窯址の調査』 新潟県豊浦町教育委員会
――・土井義雄・川上貞雄　1973　『狼沢窯跡群の調査』 立教大学文学部考古学研究室
野田豊文　2006　「新潟県における「天王山式土器」について」『新潟県考古学談話会会報』第 31 号　新潟県考古学談話会
――・滝沢規朗ほか　2003　「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝の前遺跡を中心に－」『三面川流域の考古学』第２号　三面川を考える会
――・野水晃子　2005　「阿賀北地域の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現　第１分冊』 新潟県考古学会
仙台市農耕文化研究会　1990　「水田跡の基本的理解－仙台市における水田跡の検出と認定－」『第３回東日本の水田を考える会－資料集－』 東日本の水田跡を考える会
前川雅夫ほか　2001　『道端遺跡Ⅲ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
水澤幸一　2002　『船戸川崎遺跡４次』 新潟県中条町教育委員会
――　2004a　「第Ⅲ章　１塩津（紫雲寺）潟周辺」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
――　2004b　「第Ⅳ章　３折縁杯・蓋」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
――　2006　『大塚遺跡４次調査』 新潟県胎内市教育委員会
――ほか　2001　『船戸桜田遺跡２次』 新潟県中条町教育委員会
――ほか　2006　『市内遺跡Ⅰ』 新潟県胎内市教育委員会
――・吉村光彦　2002　『船戸桜田遺跡４次・５次 船戸川崎遺跡６次』 新潟県中条町教育委員会
――・　――　2004　『屋敷遺跡２次』 新潟県中条町教育委員会
森岡秀人・西村　歩　2006　「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
堀　大介　2002　「古墳成立期の土器編年―北陸南西部を中心に」『朝日山』 石川県朝日町教育委員会
――　2006　「越前・加賀地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
吉井雅勇　1999　『元山窯跡群　平成９・10 年度町内遺跡試掘確認調査報告書』 新潟県荒川町教育委員会
――　2002　『鴨侍遺跡』 新潟県荒川町教育委員会

吉村光彦　2002『大塚遺跡第２次』新潟県中条町教育委員会
――　2004『大塚遺跡第３次』新潟県中条町教育委員会
渡邊美穂子　2004「第Ⅲ章　２加治川中流域」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
――　ほか　2001『坂ノ沢Ｃ遺跡Ⅱ（平安時代編）』新発田市教育委員会

要　約

1．家ノ内遺跡は，新潟県新発田市上今泉 366 番地ほかに所在する。遺跡は今泉川が形成した自然堤防上の西に広がる沖積低地に立地する。付近の標高は約 6 mである。

2．発掘調査は加治川統合小学校建設に伴って実施された。新発田市教育委員会が主体となり，調査業務を国際航業株式会社へ委託して同社が調査を実施した。調査は平成 17（2005）年 10 月 11 日から平成 18（2006）年 4 月 14 日に実施し，整理期間は発掘調査終了後から 7 月 31 日まで実施した。

3．検出した遺構は水田畦畔 8 か所，水田区画 12 区画，溝 9 条，土坑 10 基，自然流路 5 条であるが，古墳前期に属すると考えられる溝 1 条（溝 18）を除き時期を特定し得なかった。また，正確な時期は不明確であるが，水田関係遺構は古代末～中世初頭（12 ～ 13 世紀初頭）以降と考えられる。

4．出土遺物は，平安時代（8 世紀末～ 10 世紀初頭）の遺物が多数を占めるが、縄文時代晩期の鉢と思われる破片 1 点，弥生時代後期初頭の天王山式期に属すると考えられる深鉢破片，また古墳時代前期中葉および後葉の土師器甕・壺・高杯・鉢が出土している。平安時代の土器は土師器・黒色土器・須恵器がある。時期不詳の木製品として曲物底板・側板などが出土している。ただし，まとめ（第Ⅵ章）で述べたように，これらの出土遺物は重層的に出土しておらず，古代の土器と弥生土器・古墳時代の土師器が混じって出土した。

5．平安時代の土師器 1 点，須恵器 11 点で墨書が確認できた。土師器の墨書文字は不明である。須恵器 11 点の内，9 点には「φ」と記され，1 点には「光」らしき文字が記され，残り 1 点については文字が不明である。「φ」の墨書は在地産と佐渡小泊産の区別無く存在することから，本遺跡での何らかの意味を持つ印ではないかと考えられる。

6．水田畦畔と平行して打ち込まれていた杭の年代測定の結果，11 世紀中頃～ 13 世紀初頭であった。当該期の遺物は，この年代まで下る可能性が高い土師器有台椀が 1 点出土しているのみで，他には輸入陶磁器を含め遺物は全く出土していない。これは，水田遺構という性格から当然のことであろうが，この杭の年代測定を実施したことにより，水田遺構のおおまかな年代を捉えることができた。

7．今回の調査においては，集落の中核となるような遺構の発見を伴わなかったが，平安時代から中世にかけての生活痕跡は明確に認められ，近くにその集落の主体部分があると考えられる。また，調査当初は予想されなかった弥生・古墳時代の遺物の存在は，平安時代以後と同様にこの時期の遺跡が付近にあることを示すものである。

A区溝 18 完掘（北から）

A区Ⅲ層畦畔・杭列検出状況

Ｂ区西壁土層（東から）

Ｂ区流路１・２検出状態（北西から）

A区調査前状態（北東から）

B区調査前状態（北西から）

A区西壁土層（北東から）

A区北壁土層（南から）

B区東壁土層（西から）

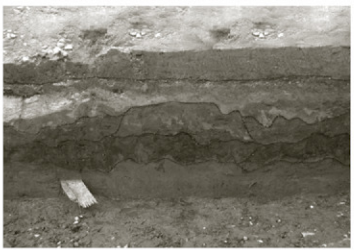
A区Ⅲ層水田跡畦畔１検出作業風景（北から）

A区Ⅲ層水田跡畦畔１検出状態（北から）

A区Ⅲ層水田跡段差２検出状態（南から）

A区Ⅲ層水田跡畦畔１・Ⅳ層水田跡畦畔４断面（北から）

B区Ⅲ層水田跡検出状態（西から）

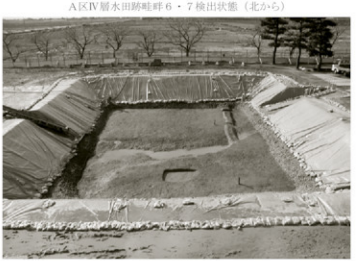

B区Ⅲ層畦畔１断面（東から）

B区Ⅲ層水田跡完掘（東から）

A区Ⅳ層水田跡検出状態（東から）

A区Ⅳ層水田跡畦畔６・７検出状態（北から）

B区Ⅳ層畦畔８断面（東から）


B区Ⅳ層水田跡完掘（東から）

A区溝１～３，土坑４，ピット１～４検出状態（北から）

A区溝１断面（南東から）

A区溝２断面（南東から）

A区溝３断面（南東から）

A区溝１～３完掘（北から）

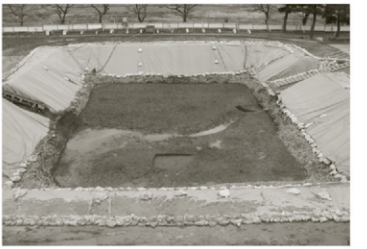
A区土坑４検出状態（東から）

A区土坑４断面（東から）

A区ピット４・５断面（東から）

A区２トレンチ断面（北から）

B区溝１検出状態（南から）



B区Va層上面遺構完掘（東から）

A区溝 10 検出状態（西から）

A区溝 10 断面（北から）

A区溝 10 完掘（西から）

A区溝 14 ～ 17，土坑 11 ～ 13，ピット７・８検出状態（北から）

A区溝 15 断面（西から）

A区溝 16 断面（西から）

A区溝 17 断面（西から）

A区溝 14 ～ 17、土坑 11 ～ 13、ピット 6 ～ 8 完掘（北から）

A区土坑 6 検出状態（東から）

A区土坑 6 断面（東から）

A区ピット 9 断面（東から）

A区ピット 9 完掘（東から）

A区溝 18 検出状態（北から）

A区溝 18 掘削作業風景（北から）

A区溝 18 断面（北から）

A区流路２・３検出状態（北から）

A区流路２完掘（北から）

A区流路３断面（北から）

A区流路３完掘（北から）

A区VI層完掘（東から）

B区VI層清掃作業風景（北西から）

B区流路4断面（南東から）

B区流路2断面（東から）

B区VI層完掘（北西から）

B区1トレンチ断面（南東から）

B区2トレンチ断面（南東から）

家ノ内遺跡周辺の旧地形（上が北方位。1948 年 10 月米極東空軍撮影。縮尺 5 万分の 1）

10

14

18

19

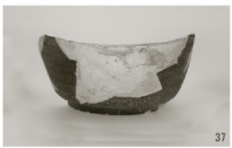
20

32

33

35

36

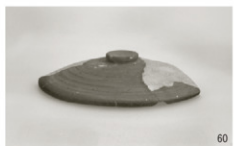

37

38

39

55

57


60

64

65

66

67

69

74

75

81

86

91

94

100

106

108

111

115

120

122

128

129

134

135

137

139

142

143

149

150

152

154

155

158

159

160

161

166

167

168

170

172

175

176

180

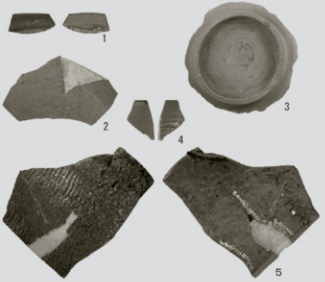
181

182

183

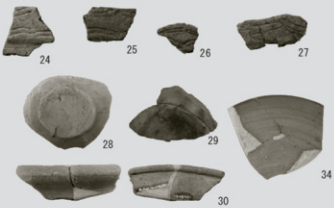
184

水田区画 1（1 ～ 5）

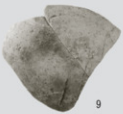


水田区画 7（16・17・21）

水田区画 8（24 ～ 30・34）



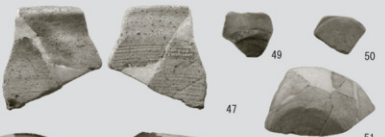
水田区画 2（9）

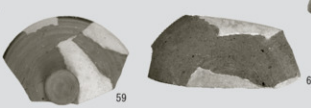


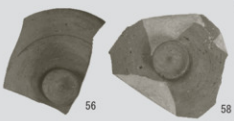
水田区画 3（11）

水田区画 4（12）

水田区画 9（42 ～ 51・56・58・59・61 ～ 63・68）

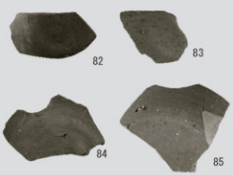




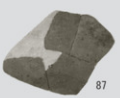


水田区画 12（79）

溝 2（82 ～ 85）



土坑 4（87・88）



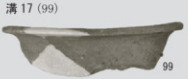
溝 10（93・95）

溝 14（96）

溝 15（97）

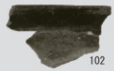
溝 1（92）

溝 17（99）



溝 18（101 ～ 103・105・107・109・110）

101

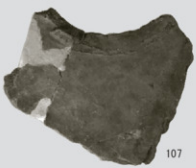

102

103

105

109

110


107

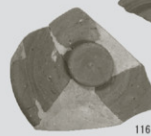
流路 1（112 ～ 114）

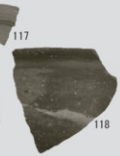
112

113

114

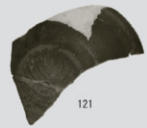
流路 2（116 ～ 118）

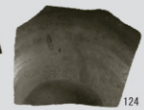

116


117
118

流路 4（119・121・123・124・126・127）

119


121


124

123

126

127

A区Ⅴa層（131 ～ 133・136・138・140・144・145・147・148・151・156・162・163）

131

133

132

138

136

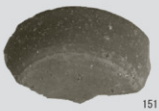
140

144

145

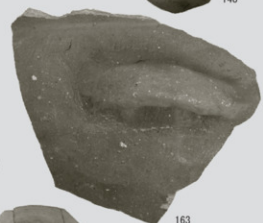
147

148


151

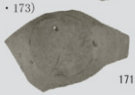
162

156


163

B区Ⅴa層（169・171・173）

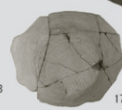
169


171

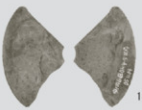
173

A区Ⅴb層（178・179）

178

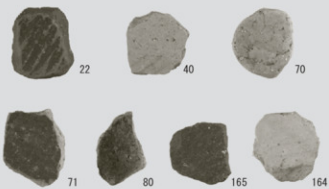

179

石製品（15・41・76）

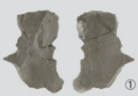


木製品（6・7・8・13・23・72・73・78・103・179）

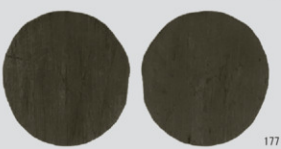
土製品（22・40・70・71・79・80・164・165）

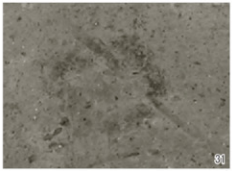


剥片（①）



鉄滓（②）

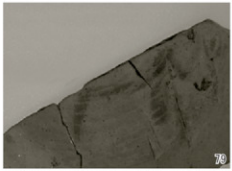


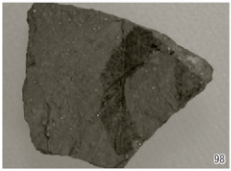

31

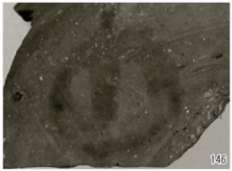
52

65

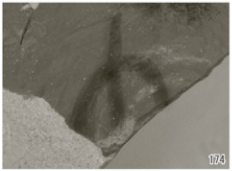
77


79

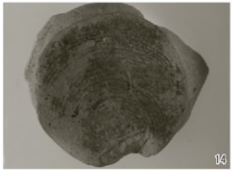

98

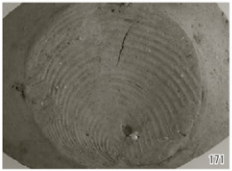

146

148

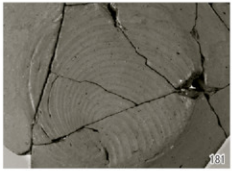

174

176


14

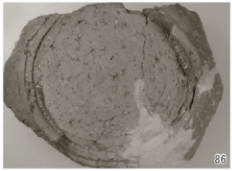

171

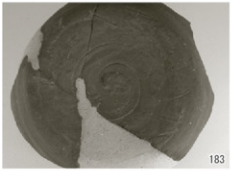
168

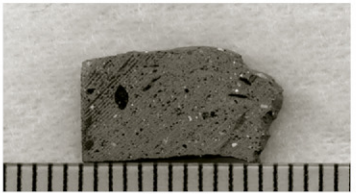

181

55

176


86

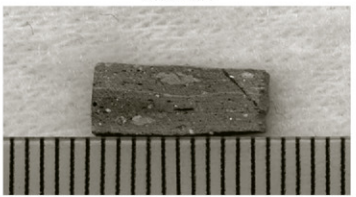

183


試料No. 1 断面

試料No. 1 顕微鏡写真 1

試料No. 2 断面

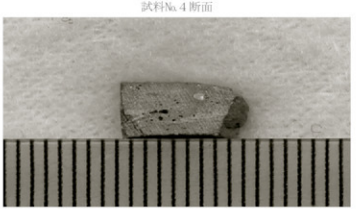
試料No. 1 顕微鏡写真 2

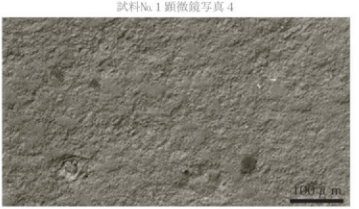

試料No. 3 断面

試料No. 1 顕微鏡写真 3

試料No. 4 断面

試料No. 1 顕微鏡写真 4


試料No. 5 断面



試料No. 1 顕微鏡写真 5

報告書抄録

ふりがな	いえのうち
書名	家ノ内遺跡発掘調査報告書
副書名	加治川統合小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 33
編著者名	新発田市教育委員会　鈴木　暁 国際航業㈱　菊池　豊・丹下昌之・山川純一
編著機関	新発田市教育委員会・国際航業株式会社文化事業部
編著機関	〒 959-2323　新潟県新発田市乙次 281 番地 2　TEL.0254-22-3715（新発田市教育委員会　生涯学習課）
	〒 102-0075　東京都千代田区三番町 5 番地　TEL.03-3288-7491（国際航業株式会社　文化事業部）
発行年月日	平成 18(2006) 年 7 月 31 日
体裁	A 4 版　横組 1 段　本文 77 頁　写真図版 18 頁　本文・図版とも中性紙使用

所収遺跡（ふりがな）	所在地	コード		北緯（世界測地系）	東経（世界測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
家ノ内遺跡（いえのうち）	新潟県新発田市（にいがたけんしばたし）上今泉（かみいまいずみ）366 番地（ばんち）	市町村 15206	遺跡番号 656	37°59′22″	139°21′32″	20051011 ～ 20060414 (63 日間)	790 ㎡	校舎建設（加治川統合小学校）

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家ノ内遺跡	遺物包含地	縄文時代晩期		縄文土器（鉢）：1 点のみ	古代を中心に遺物が出土しているが，層位的な出土はしておらず明確な時期が決定できた遺構は，古墳時代の溝 1 条のみである。中世以降と考えられる水田遺構も確認されているが，出土遺物はほとんどなく詳細な時期は不明。これらの水田耕作の影響により大きく遺物が動いているものとみられる。しかし，比較的残りの良い古代の遺物が多数出土している事から集落の主体部分は付近に存在すると考えられる。
		弥生時代後期		弥生土器（甕）	
		古墳時代前期	溝	土師器（甕・壺・高杯・鉢）	
		平安時代（9 C 代） （12 ～ 13 C 初頭）		土師器（長胴甕・小甕・鍋・甑・無台椀・台付鉢・蓋） 黒色土器（無台椀・有台椀） 須恵器（甕・括れ鉢・狭口壺・長頸瓶・無台杯・有台杯・杯蓋・壺蓋・横瓶） 土師器（有台椀）：1 点のみ	
	水田	中世以降	水田区画・畦畔	杭	

家ノ内遺跡発掘調査報告書

加治川統合小学校建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　　平成 18（2006）年 7 月 31 日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次 281 番地 2
電話　0254-22-3715

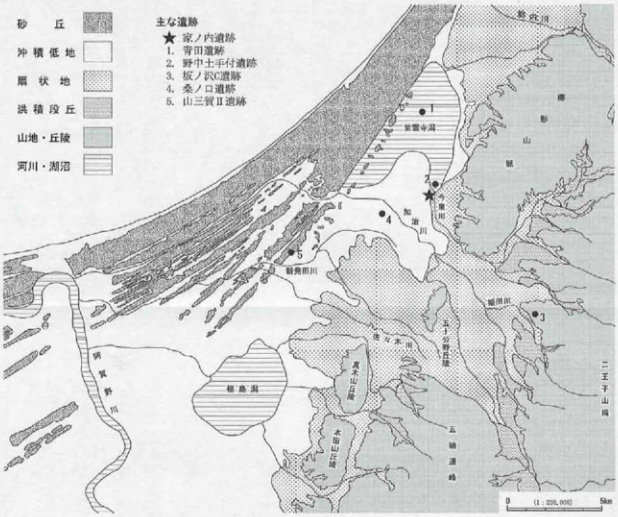
印　刷　　㈱第一印刷所

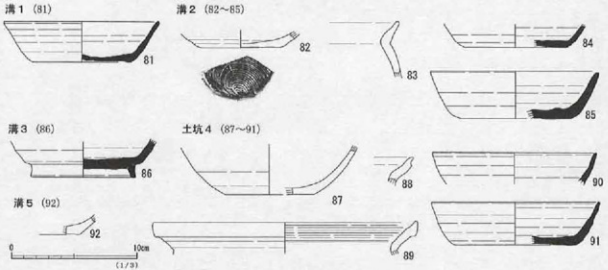
本書は，本文・図版とも中性紙を使用しています。

『家ノ内遺跡発掘調査報告書』正誤表

下記の箇所に誤りがありましたので、お詫びし訂正します。用紙はシールとなっております。訂正部分を上から貼付けて使用下さい。

箇所	誤	正
5頁1行目	北緯37° 55′ 44″	北緯37° 59′ 22″
7頁第3図	「二王子山塊」周辺トーンを訂正。下図に差替え。	
44頁第33図	地区名を取る。81須恵杯口縁部消え。下図に貼り替え	
69頁第48図	合村鉢	有合鉢
図版10 キャプション	「図」をトル。 下のキャプションに貼り替え。 家ノ内遺跡周辺の旧地形（上が北方位。1948年10月米極東軍撮影。縮尺5万分の1）	
抄録 所在地 番地を追記、北緯緯度誤り	新潟県新発田市（にいがたけんしばたし） 上今泉（かみいまいずみ）	新潟県新発田市（にいがたけんしばたし） 上今泉366番地（かみいまいずみ ばんち）
	誤 37° 55′ 44″	正 37° 59′ 22″





第33図　A・B区Va層遺構出土遺物